高松市埋蔵文化財調査報告　第74集

四国横断自動車道関連特別用地対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

津内・東井坪遺跡
中森遺跡
林谷遺跡
林下所遺跡
林下所・木太今村上所遺跡
林下所・六条乾遺跡
六条上川西遺跡
六条西村遺跡

２００４年3月

高松市教育委員会

例　言

1　本書は，四国横断自動車道関連特別用地対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で，高松市に所在する津内・東井坪遺跡，中森遺跡，林谷遺跡，林下所遺跡，林下所・木太今村上所遺跡，林下所・六条乾遺跡，六条上川西遺跡，六条西村遺跡の調査報告を収録した。

2　発掘調査及び整理作業については，高松市教育委員会が実施した。

3　調査から報告書に至るまで，下記の関係機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して感謝したい。
香川県教育委員会　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　讃岐文化遺産研究会

4　四国横断自動車道関連特別用地対策事業に伴う埋蔵文化財調査は，文化振興課文化財専門員山本英之・山元敏裕・大嶋和則・小川賢が行い，末光甲正・中西克也（讃岐文化遺産研究会）がこれを補佐した。整理作業は小川が行い，同課文化財専門員川畑が補佐した。

5　報告書掲載の遺物写真撮影は，杉本和樹氏（西大寺フォト）の協力を得た。

6　本書の執筆は，第１・２章を川畑が，第３章№10を末光が担当し，それ以外を小川が行った。編集も小川が行った。

7　本文の挿図として，国土地理院発行２万５千分の１地形図「高松南部」「白峰山」及び高松市都市計画図２千５百分の１「鬼無２」「御厩１」「木太２」「林」を一部改変して使用した。

8　発掘調査で得られた資料は，高松市教育委員会で保管している。

9　本報告書の高度値は海抜高を表し，方位は座標北または磁北を示す。

10　本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SB：掘立柱建物　SE：井戸　SK：土坑　SD：溝　SR：旧河道　SX：性格不明遺構

11　土壌及び土器観察の色調表現は，新版 標準土色帖（農林水産省技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色表監修）による。

目　次

例言・目次 …… 1
第１章　調査の経緯と経過 …… 2
　第１節　調査の経緯 …… 2
　第２節　調査の経過 …… 2
第２章　地理的環境・歴史的環境
　第１節　地理的環境 …… 6
　第２節　歴史的環境 …… 6
第３章　調査の成果 …… 11
第４章　まとめ …… 79

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

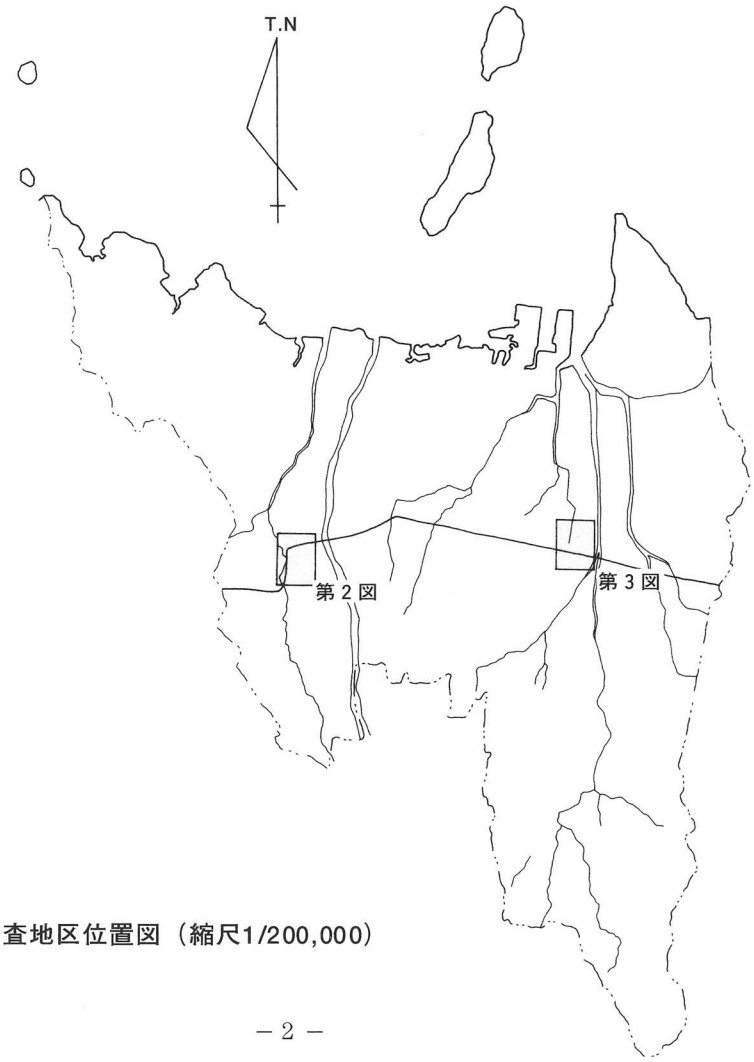
四国横断自動車道関連特別用地対策事業は，高松市域を東西に横断する四国横断自動車道建設に伴って，周辺地域の道路整備等を目的に実施されたものである。当事業は香川県独自のもので，県費補助のもと市町及び土地改良区などの公共団体又は公共的団体が事業主体となり，市町道路整備や水路改修，地区集会所建設などを事業内容としている。この事業実施にあたって，事業主体である高松市都市開発部高速交通対策課（現在，高速交通対策室）と高松市教育委員会は，平成８年度に協議を行った。その結果，埋蔵文化財包蔵地および隣接する地域においては，事前の確認調査および立会調査を実施し，必要に応じて発掘調査を実施することで合意に達した。

第２節　調査の経過

この事業に伴う調査は，平成８年度から開始し，平成15年度の事業終了まで随時行った。このため，調査後の整理作業は，平成14年度から開始し，平成15年度の事業終了と同時に報告書を刊行することになった。

この事業の一つの特徴として，秋の稲刈前後に用地売買の契約がなされ，早い場合では稲刈直後に工事を開始するという状況が多く見られた。そのため，稲刈直後に確認調査を実施して埋蔵文化財が確認された場合，高速交通対策室より文化財保護法第57条の３に基づく通知が香川県教育委員会に提出され，発掘調査の指示が県教委よりあると同時に，発掘調査を実施しなければならないという慌しさが挙げられる。

さて，調査の概要については，第１表のとおりである。合計22地点を調査し，調査回数は28回に及び，調査総面積は約4,500㎡を測る。確認調査を15回実施し，そのうち６回が発掘調査に至った。さらに，工事中の立会調査は７回実施した。地区別では，高松市域の西部にあたる檀紙・中間町周辺が９地点，高松市域の中心部にあたる六条・林町周辺が13地点であった。

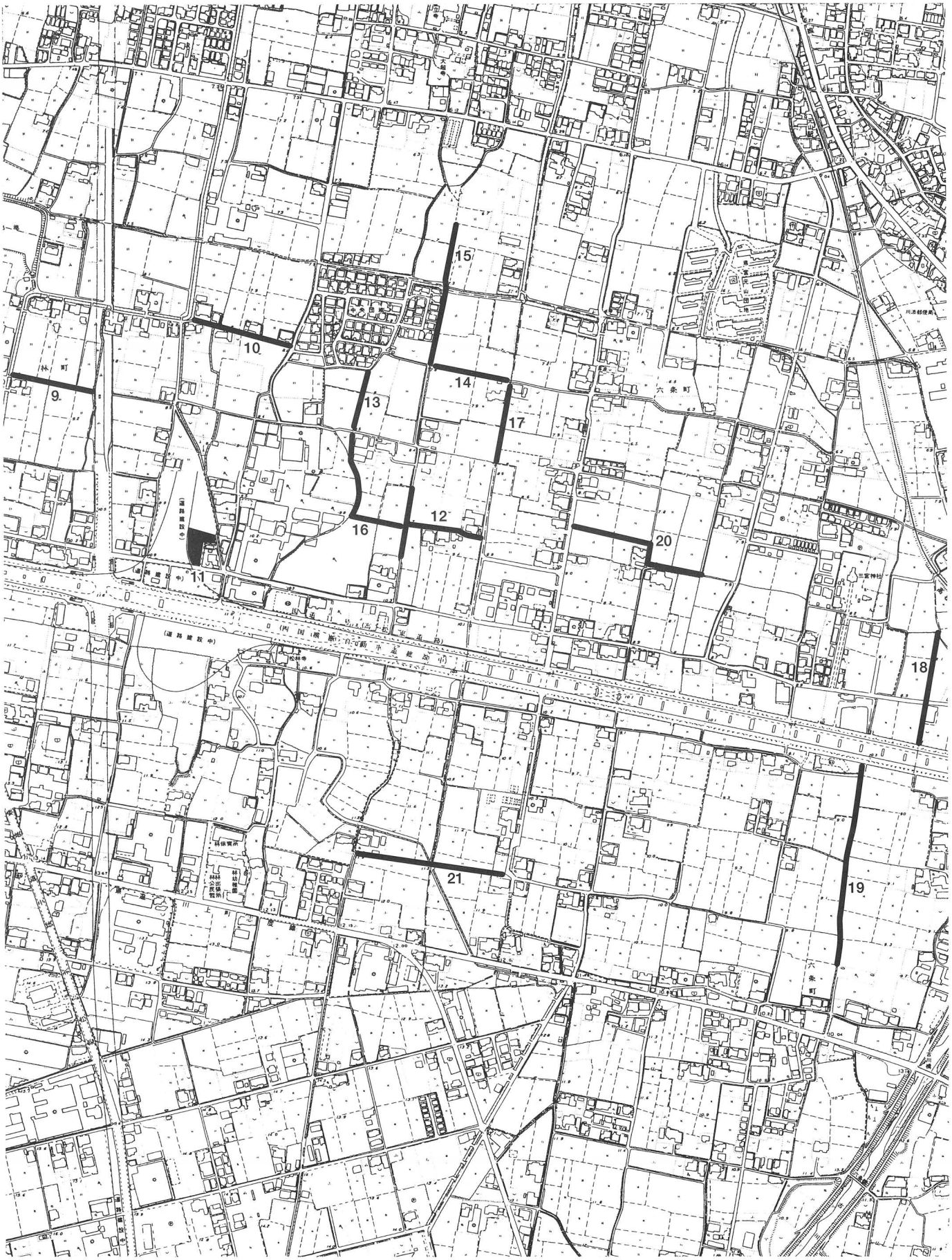


第１図　調査地区位置図（縮尺1/200,000）

地区	No.	調査年度	遺跡名 (路線名)	所在地	北緯 東経	調査面積 (㎡)	調査期間	遺跡の内容	調査状況
檀紙・中間地区	1	平成8年度	(中間町45号線)	中間町	34° 17′ 38″ 133° 59′ 46″	72	平8.6.4～ 平8.6.6	少量の遺物は出土したが，遺構等の埋蔵文化財は確認されなかった。	確認調査
	2	平成8年度	(檀紙町66号線)	檀紙町	34° 17′ 36″ 134° 00′ 07″	92	平8.10.17	埋蔵文化財は確認されなかった。	確認調査
	3	平成9年度	(中間町45号線)	中間町	34° 17′ 38″ 133° 59′ 50″	40	平9.9.4	埋蔵文化財は確認されなかった。	確認調査
	4	平成12年度	(中間町48号線)	中間町	34° 17′ 34″ 133° 59′ 49″	50	平13.1.15～ 平13.1.16	埋蔵文化財は確認されなかった。	確認調査
	5	平成13年度	津内・東井坪遺跡 (檀紙町55号線)	御厩・ 中間町	34° 17′ 42″ 133° 59′ 46″	65	平13.10.29～ 平13.10.30	平安時代の溝，近世以前の道路状遺構を確認した。	確認調査
						225	平13.12.10～ 平13.12.20		事前調査
	6	平成13年度	(檀紙町27号線西)	檀紙町	34° 18′ 10″ 134° 00′ 17″	10	平13.10.23～ 平13.10.25	時期不明の溝を確認した。	確認調査
	7	平成13年度	中森遺跡 (檀紙町27号線東)	檀紙町	34° 18′ 11″ 134° 00′ 09″	57	平12.11.26～ 平12.11.29	中世の溝及び集石遺構を確認した。	確認調査
	8	平成14年度	(中間15号線)	中間町	34° 17′ 33″ 133° 59′ 40″	60	平14.10.25	時期不明の溝を確認した。	確認調査
	22	平成11年度	(成合檀紙線)	檀紙町	34° 17′ 44″ 133° 59′ 58″	150	平12.3.30～ 平12.4.20	埋蔵文化財は確認されなかった。	工事立会
六条・林地区	9	平成8年度	林さこ遺跡 (林町 61号線)	林町	34° 18′ 15″ 134° 04′ 32″	107	平9.2.28～ 平9.3.3	古代～中世の条里界線の溝を確認するとともに，須恵器片が出土した。	工事立会
	10	平成8年度	林下所遺跡 (林町60号線)	林町	34° 18′ 17″ 134° 04′ 42″	372	平9.2.26～ 平9.3.31	近世以降の条里坪界線・井戸とともに，時期不明の噴礫を確認した。	工事立会
	11	平成10年度	林下所遺跡 (林下所墓地)	林町	34° 18′ 07″ 134° 04′ 38″	73	平10.4.20～ 平10.4.22	弥生時代と想定される溝状遺構を確認した。	確認調査
						632	平10.6.15～ 平10.7.21		事前調査
	12	平成10年度	林下所遺跡 (林町8号線)	林町	34° 18′ 07″ 134° 04′ 50″	400	平10.11.26～ 平10.11.30	弥生時代の溝と近世の土坑を確認した。	工事立会
	13	平成11年度	林下所遺跡 (林町65号線)	林町	34° 18′ 14″ 134° 04′ 48″	97	平11.11.8～ 平11.11.9	弥生時代～平安時代の溝状遺構及び掘立柱建物を確認した。	確認調査
						308	平11.12.3～ 平11.12.22		事前調査
	14	平成10年度	林下所遺跡 (林町60号線)	林町	34° 18′ 15″ 134° 04′ 53″	200	平11.1.27	古墳時代の須恵器がまとまって出土した。	工事立会
	15	平成14年度	林下所・木太今村上所遺跡 (林町8号線)	林町 木太町	34° 18′ 20″ 134° 04′ 52″	120	平14.10.29～ 平14.10.31	弥生時代の井戸・土坑，古墳時代後期～終末期の掘立柱建物・溝等を確認した。	確認調査
						600	平14.11.25～ 平14.12.27		事前調査
	16	平成15年度	(林町65号線)	林町	34° 18′ 09″ 134° 04′ 49″	73	平15. 5.27～ 平15. 5.28	埋蔵文化財は確認されなかった。	確認調査
	17	平成14年度	林下所・六条乾遺跡 (林町70号線)	林町 六条町	34° 18′ 13″ 134° 04′ 55″	100	平14.10.28～ 平14.10.29	平安時代の条里地割に沿った溝を確認した。	確認調査
						80	平15. 1. 8～ 平15. 1.22		事前調査
	18	平成10年度	(六条町36号線)	六条町	34° 18′ 01″ 134° 05′ 17″	65	平10.10.20～ 平10.10.22	埋蔵文化財は確認されなかった。	確認調査
	19	平成12年度	六条上川西遺跡 (六条町38号線)	六条町	34° 17′ 51″ 134° 05′ 09″	158	平12.10.24～ 平12.10.31	弥生時代の土坑及び性格不明遺構を確認した。	確認調査
	20	平成13年度	(六条町38号線)	六条町	34° 18′ 06″ 134° 04′ 59″	110	平13.10.12～ 平13.10.15	時期不明の溝を確認した。	確認調査
	21	平成15年度	六条西村遺跡 (林町23号線)	六条町	34° 17′ 53″ 134° 04′ 54″	90	平15. 5.29～ 平15. 5.30	弥生時代～古代の溝を多数確認した。	確認調査
						100	平15. 7.22～ 平15. 7.31		事前調査

第１表　調査一覧表

第２図　調査地点位置図（檀紙・中間町周辺，縮尺1/7,000）



第３図　調査地点位置図（六条・林町周辺，縮尺1/7,000）

第２章 地理的環境・歴史的環境

第１節 地理的環境

高松平野は，瀬戸内海に北面した香川県の中央に位置し，低い山塊に囲まれている。この平野は，西側が南から五色台へと続く山地，東側が立石山山地によって取り囲まれており，東西20km，南北16kmの規模をもつ。いずれの山地も花崗岩の上に緻密で侵食を受けにくい安山岩がキャップロックと呼ばれる形でかぶさっており，そのため侵食開析から取り残された台状の平坦面を有する山地（メサ）あるいは孤立丘（ビュート）となっている。西側の五色台は，平坦な頂部をよく残しており，屋島もまた同様に開析から取り残された台地である。東側の立石山山地はこれらより開折が進んでおり，紫雲山・白山・由良山など多数の孤立丘とともに高松平野の自然景観を特徴付けている。

第４図　高松市位置図

高松平野は，これら侵食が進んだあと，沖積世に入ってから堆積されて形成されたもので，讃岐山脈から流下し，北へ流れて瀬戸内海へ注ぐ香東川を主体として本津川・春日川・新川などによって搬送された堆積物により緩やかな傾斜の扇状地を形成している。今回の調査地も，扇状地に立地している。

第２節 歴史的環境

【高松平野西部】

高松平野西部で，もっとも古い人類の歴史が刻まれているのが，中間・西井坪遺跡や香西南西打遺跡，中森遺跡である。中間・西井坪遺跡では，旧石器時代後期に属する石器群が見つかるとともに，鹿児島湾北半にあたる姶良カルデラが大噴火して降ったＡＴ火山灰の堆積層も確認されている。次の縄文時代では，鬼無藤井遺跡で川跡から晩期の土器片が出土している。

稲作が始まる弥生時代では，まず鬼無藤井遺跡において前期の環濠集落が出現する。この集落は，二重の環濠を巡らし，最大径約70mの規模をもつ。弥生時代中期の遺跡は未確認で空白を生じるが，御殿貯水池遺跡が中期末まで遡る可能性がある。後期になると，西打遺跡で竪穴住居や掘立柱建物跡を，中間・西井坪遺跡では掘立柱建物跡や土器棺墓が確認されている。同じ後期に属する御厩池遺跡は，遺構は不明だが，溜池浚渫時に土器がまとまって出土している。

古墳時代になると，高松平野でも古墳の築造が顕著になる。石清尾山塊では，前期初頭の鶴尾神社４号墳を皮切りに前方後円墳や双方中円墳といった積石塚が出現する。積石塚は，尾根頂部や山頂に累々と築造され，全長100m近くを測るものも現れるが，中期中頃には，その築造は終焉するようである。一方，平野西部では，中間・西井坪遺跡で前方後円墳を含む前期古墳の周濠が３基確認されている。中期になると平野西部で最大規模をもつ全長60.5mの前方後円墳・今岡古墳が築造される。ほぼ同時期，中間・西井坪遺跡では埴輪や陶棺を製作・焼成していたことが知られており，ここで製作された陶棺が今岡古墳に供給されたと推測されている。後期初頭になると，それまで山塊や丘陵部のみだった古墳の築造が平野にも見られるようになる。相作(あいさこ)牛塚古墳は，後期初頭に築造された古墳で，挂甲(けいこう)や金銅装の馬具を副葬していた。中森古墳は，昭和46年11月に消滅したもので，かつて南北約４m，東西約５m，高さ約1.2mを測る不整円形の墳丘(第８図)が残っていた。その墳頂部に埋葬施設の底面が残っていたと伝え，墳丘除去時に須恵器(第９図)が出土している。

古墳時代後期後半では，平野縁辺部の丘陵において横穴式石室を主体部とした群集墳の築造が盛んになる。先の石清尾山塊でも横穴式石室墳が見られるほか，山塊南の浄願寺山山頂付近では小規模な横穴式石室墳が密集している。一方，平野西縁辺に位置する平木古墳群や古宮古墳周辺では，大形の横穴式石室墳が点在している。また，古墳の所在は知られていないが，万堂山東麓からは須恵器(第７図)が一括で出土しており，古墳の存在が想定される。

古墳時代に属する集落は，兀塚遺跡で後期末と推定される掘立柱建物跡群が確認されているだけで，墳墓

と比べて不明な部分が多い。飯田町東青木遺跡も，同じ後期末のもので，溝が確認されている。

古墳の築造が終了し，代わって豪族たちは寺院建築を行うようになる。平野中央部では坂田廃寺，平野北西部で勝賀廃寺が知られており，両寺とも川原寺式が退化した瓦当文様をもつ軒瓦が出土しており，白鳳期（飛鳥時代後半）の創建年代が推定されている。

奈良～平安時代にかけては，正箱遺跡・薬王寺遺跡が知られる。６時期に分かれるが，計50棟以上の掘立柱建物跡が見つかり，中には面積が40㎡を超える大形のものがある。さらに，区画溝や掘立柱建物跡の中には条里地割と方位が符合するものがあり，南海道に近接する当該地域では，早くから条里地割の敷設が進んでいたことがわかる。

鎌倉～室町時代でも，条里地割に符合した溝跡が，香西南西打遺跡や西打遺跡で数多く広範囲に検出されており，条里地割がこの頃には普遍的であったと考えられる。さらに，西打遺跡では東西54m南北40mの範囲で，区画溝に囲まれた鎌倉時代に属する屋敷地が発掘されており，荘園を基盤とした領主層の成長がうかがえる。力を蓄えた領主たちは，武装して武士化し，やがて戦国時代を強力な武士団として活躍していく。中森遺跡においても，この時期の屋敷地が発掘されている。

香川郡を拠点として，讃岐各地や備讃瀬戸に支配権をのばしたのが，香西氏である。香西氏は，承久の乱で戦功をあげ，幕府より阿野・香川郡を与えられた氏族で，この香西氏を核として地元の領主が集結して一大勢力を築いた。この香西氏を経済的に支えたのは，『兵庫北関入船納帳』(文安２年(1445))にも記されている香西浦であり，活発な商業活動が行われたのであろう。香西氏は，勝賀山に有事の際の城を築き，常は佐料城を居館とし，その周囲には植松城・芝山城・鬼無城跡などの出城を築いた。後には，本拠地を香西浦に近い藤尾城に移し，作山城を築いている。さらに，香西氏に従った地元の領主たちの居城が周囲に点在している。筑城城や飯田城，片山城が該当し，香川郡や阿野郡を中心に，その数は一説には40余にのぼったという。筑城城跡および飯田城跡周辺には，今でも塚が群集している。埴輪片が出土するものもあり，相作牛塚古墳のように古墳もあると推定されるし，中世の「武将の墓」という言い伝えも残っている。

豊臣秀吉による四国攻撃以後，その家臣である生駒親正が讃岐一国を支配し，高松城を築き，江戸時代に至る。現在の市街地は，この高松城の城下町が発展したものである。やがて，藩主は生駒家から松平家に替わり，明治維新を迎える。正箱遺跡・薬王寺遺跡や鬼無藤井遺跡では，江戸時代の庶民の墓や屋敷跡が発掘されている。

【高松平野中央部】

高松平野中央部で，最古の遺跡は，縄文時代草創期の有舌尖頭器が表採された大池遺跡である。しばらくの空白後，晩期の遺跡が発掘されており，木製農具が出土した林・坊城遺跡や谷・長池遺跡，木器加工場であった居石遺跡等をあげることができる。

弥生時代前期に移ると，天満・宮西遺跡，汲仏遺跡で環壕集落が出現するとともに，上西原遺跡，谷・長池遺跡，さこ・長池Ⅱ遺跡で不定形小区画水田が見つかっている。これら水田は，洪水砂によって埋もれたことが明らかとなっている。中期になると，谷・長池遺跡，谷・長池Ⅱ遺跡，井手東Ⅰ遺跡，多肥松林遺跡，日暮・松林遺跡で住居跡，周溝墓等を伴う集落の一部が調査されているが，松林周辺以外は規模・密度とも総じて希薄である。なお，松林遺跡では，噴礫に土器片を供献した事例が確認されている。

弥生時代後期になると遺跡は数・規模ともに爆発的に増加し，上天神遺跡，天満・宮西遺跡，凹原遺跡，空港跡地遺跡のように十数棟の住居跡と大量の廃棄土器を伴う集落が出現する。

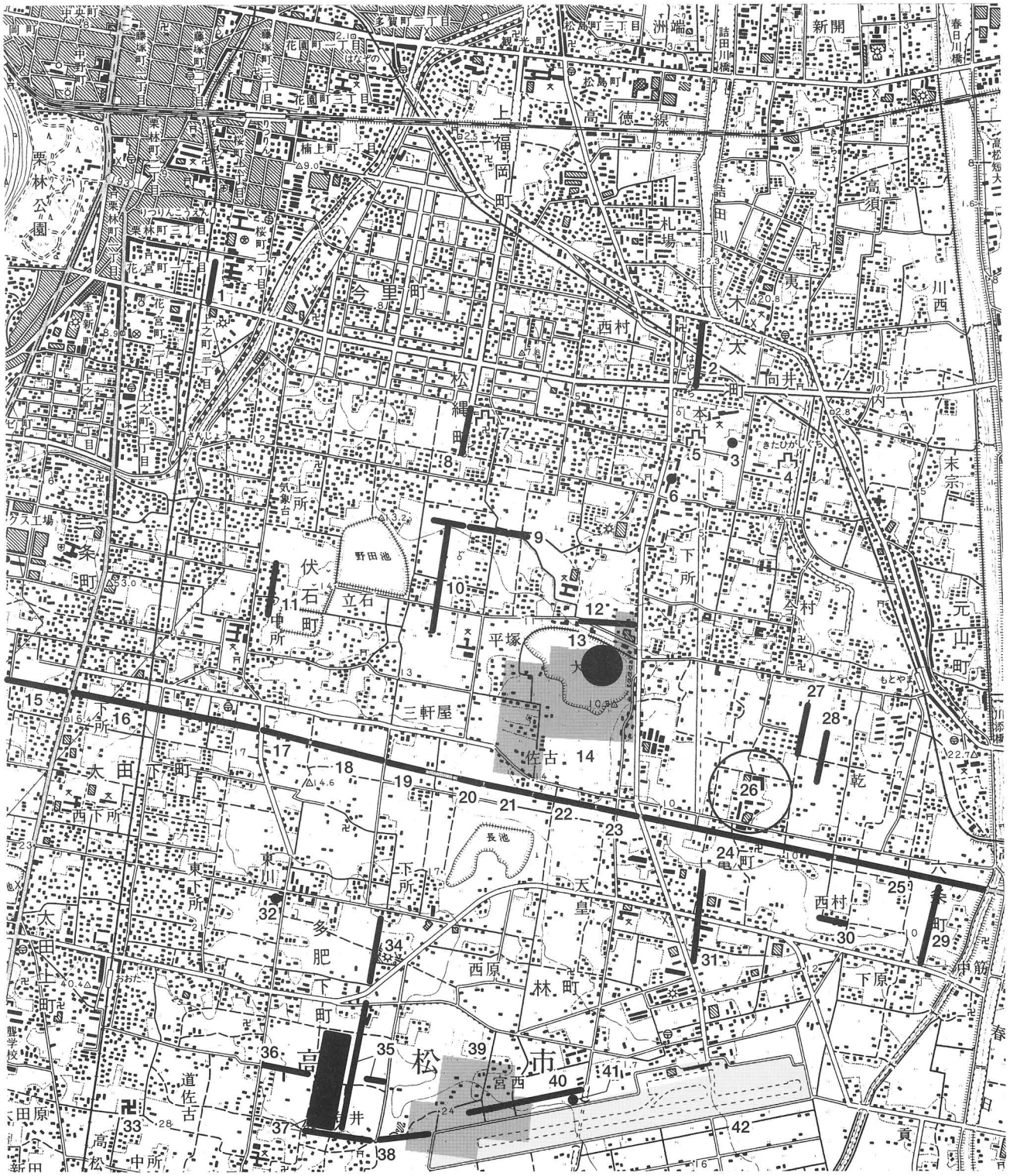
古墳時代では，これら弥生時代後期の遺跡が前期初頭に至るまで集落が存続するが，それ以降は集落が廃絶している。そうした中，太田下・須川遺跡では古墳時代中期の集落を検出しており，当該期の数少ない事例である。一方，古墳の分布状況を概観すると，石清尾山古墳群をはじめ，主に丘陵上に古墳が前期～中期にかけて築造されており，平野部における集落の動向と微妙な相違が見られる。

古代では条里遺構が注目される。各遺跡で，条里界線にあたる遺構を検出しており，飛鳥時代から現代に至るまで時代は様々であるが，条里地割施行が段階的に進んだことが明らかになりつつある。中でも，松縄下所遺跡は現地表面の条里とは10数メートルずれた位置にありながら地表条里と同方向の道路側溝を検出し，時期も７世紀代にまで遡り得るなど高松平野の条里施行に関わる可能性がある重要な遺跡である。また，谷・長池Ⅱ遺跡では旧香川・山田郡界線にあたる部分に幅６ｍの間隔で並行する道路側溝を検出している。

中世では，谷・長池遺跡，谷・松ノ木遺跡で，旧河道が埋没していく過程の凹地に小規模な区画の水田面が検出されている。また，空港跡地遺跡では溝に囲まれた屋敷跡を確認しているほか，神内城跡や松縄城跡といった十河氏や香西氏に関わる城跡も知られている。

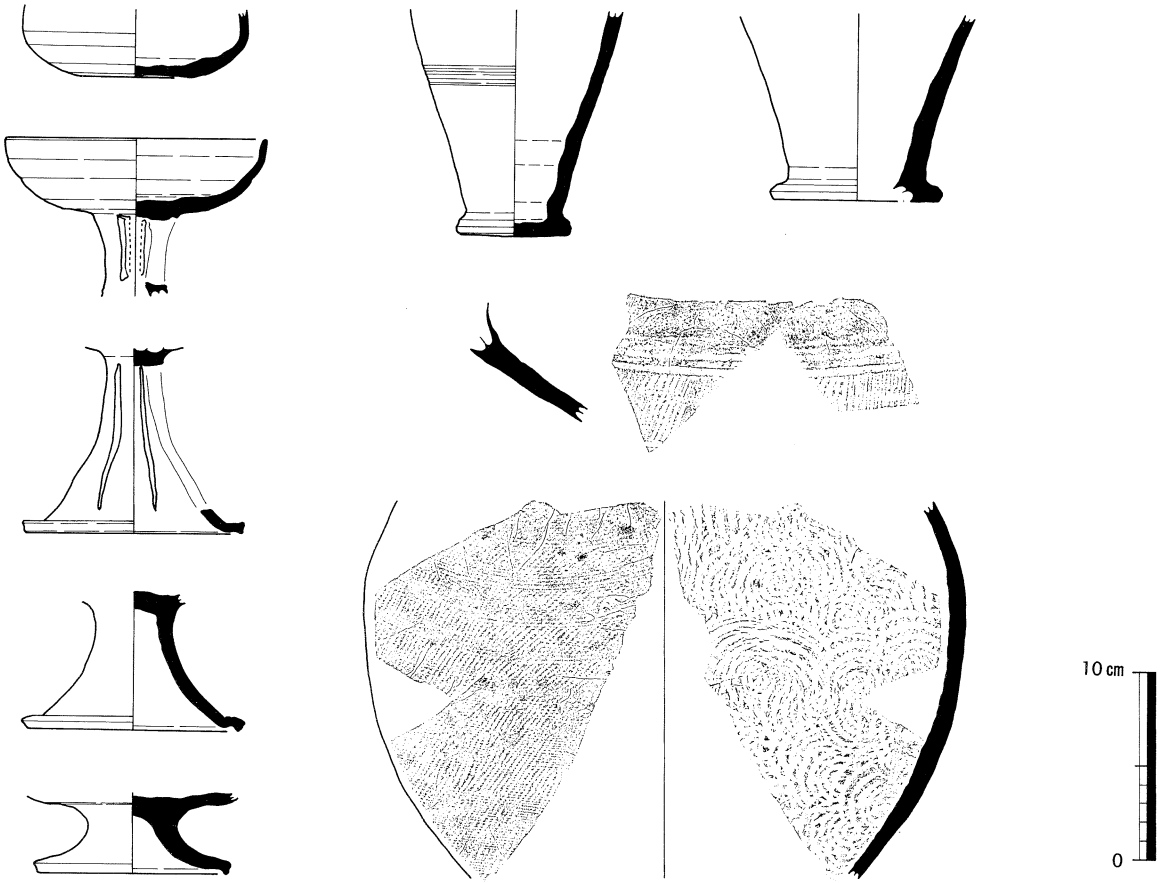
1 香西南西打遺跡　2 西打遺跡　3 鬼無藤井遺跡　4 佐料城跡　5 今岡古墳
6 大塚古墳　7 平木古墳群　8 神高池北西古墳　9 神高池西古墳　10 こめ塚古墳
11 古宮古墳　12 山野塚古墳　13 鬼無城跡　14 筑城城跡　15 王墓古墳
16 相作牛塚古墳　17 飯田町東青木遺跡　18 飯田城跡　19 半田・小坂塚群　20 青木塚群
21 紙すき塚群　22 御厩大塚古墳　23 御殿貯水池南遺跡　24 浄願寺山古墳群　25 南山浦古墳群
26 片山池1号窯跡　27 坂田廃寺　28 がめ塚古墳　29 中森古墳　30 中森遺跡
31 八幡遺跡　32 正箱遺跡・薬王寺遺跡　33 中間・西井坪遺跡　34 兀塚遺跡
35 御厩天神社古墳　36 万堂山東麓　37 御厩池遺跡

第5図　周辺主要遺跡分布図（縮尺1/25,000）

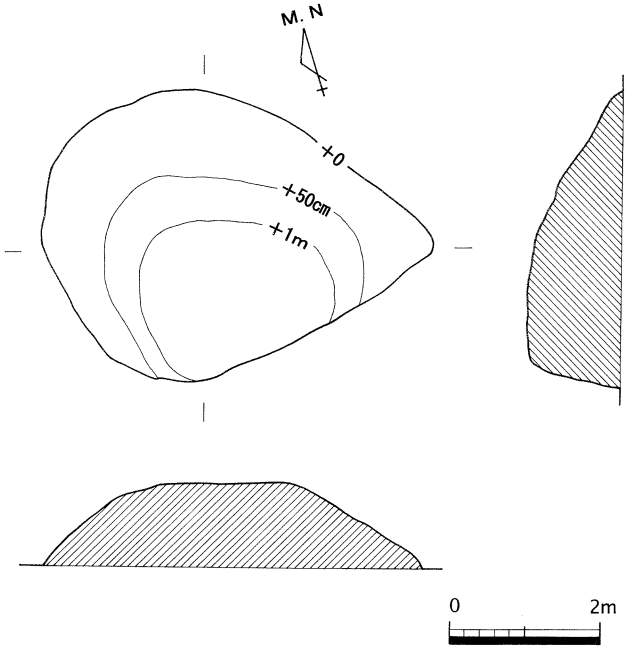


1 東中筋遺跡　2 木太中村遺跡　3 白山神社古墳　4 向城跡　5 神内城跡　6 木太本村Ⅱ遺跡
7 松縄城跡　8 天満・宮西遺跡　9 境目・下西原遺跡　10 松縄下所遺跡　11 キモンドー遺跡　12 上西原遺跡
13 大池遺跡　14 弘福寺領田図比定地北地区　15 上天神遺跡　16 太田下・須川遺跡　17 蛙股遺跡
18 居石遺跡　19 井手東Ⅱ遺跡　20 井手東Ⅰ遺跡　21 谷・長池Ⅱ遺跡　22 谷・長池遺跡
23 谷・松ノ木遺跡　24 林・坊城遺跡　25 六条・上所遺跡　26 林下所遺跡　27 林下所・木太今村遺跡
28 林下所・六条乾遺跡　29 六条上川西遺跡　30 六条西村遺跡　31 宗高坊城遺跡　32 汲仏遺跡
33 多肥廃寺　34 凹原遺跡　35 日暮松林遺跡　36 松林遺跡　37 多肥松林遺跡　38 多肥宮尻遺跡
39 弘福寺領田図比定地南地区　40 宮西・一角遺跡　41 一角遺跡　42 空港跡地遺跡

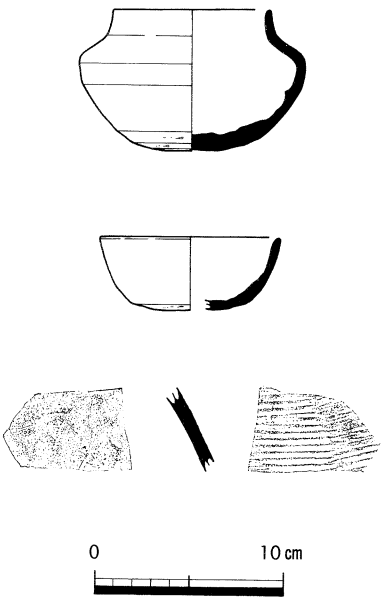
第6図　周辺主要遺跡分布図（縮尺1/25,000）



第７図　御厩町万堂山東麓出土須恵器実測図（縮尺1/4）



第８図　中森古墳墳丘平面・断面図（縮尺1/100）



第９図　中森古墳出土須恵器実測図（縮尺1/4）

第３章 調査の成果

檀紙・中間地区

No.1　中間町45号線
（平成８年度確認調査）

１　調査概要

ａ．場　所　　中間町

ｂ．期　間　　平成８年６月４日
　　・６日

ｃ．面　積　　約72㎡

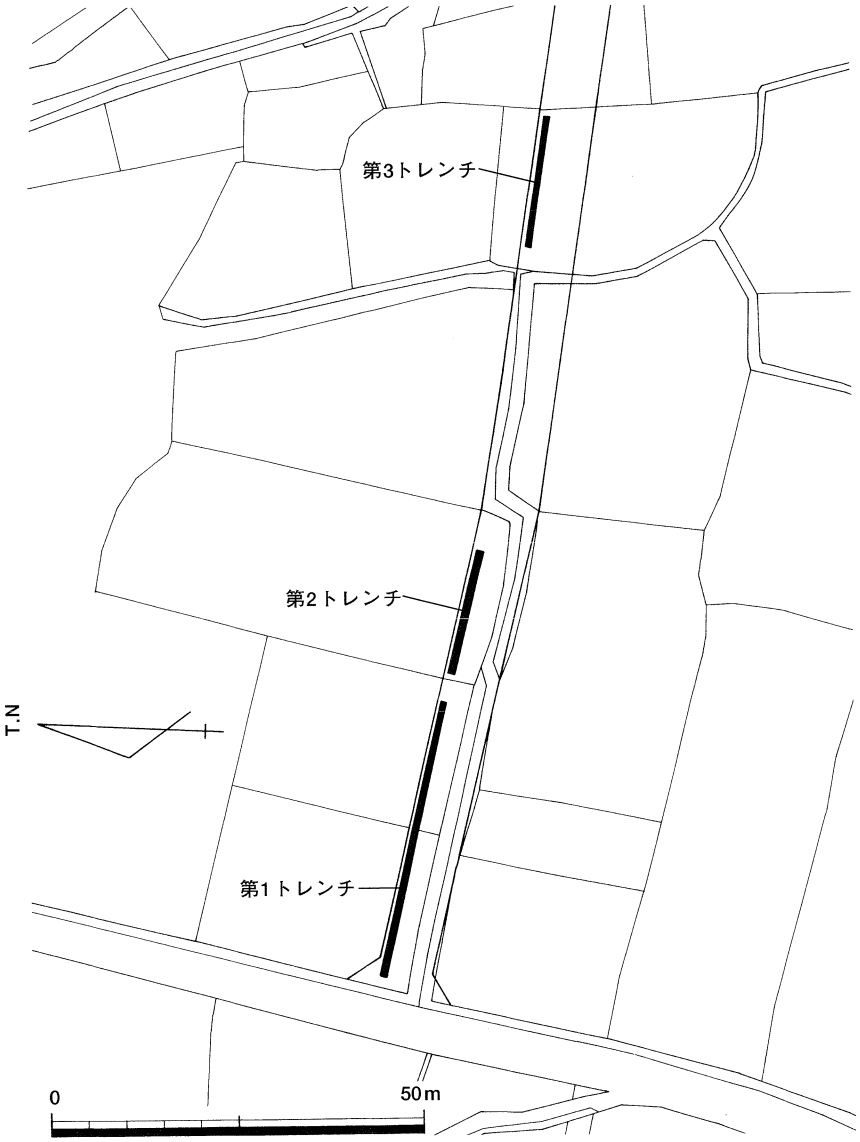
ｄ．担当者　　大嶋和則・中西克也

２　調査内容

工事予定地において，３箇所のトレンチを設定し，確認調査を実施している。

第１トレンチは，西半分が現況の耕作土直下で地山と考えられる黄灰色シルト層となり，東半分では近世期の堆積層が地山との間に認められる。小規模な南北方向の溝が２条検出されているが，遺物は確認できなかった。

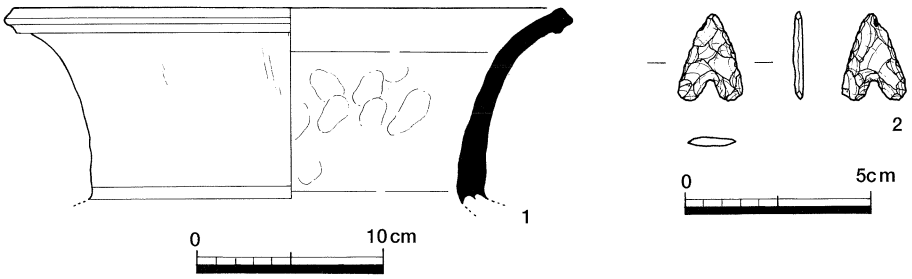
第２トレンチでは，地山層が徐々に低くなり，東端においては急に下がる。上位には，近世期の堆積が厚く認められている。遺構は確認されていないが，遺物が若干量認められた。　第３トレンチは，地表が第２トレンチより1.5ｍ以上下がり，東に流れる古川の氾濫原に位置すると考えられる。現況の耕作土の下は，土壌化していないシルト質極細砂層が２層存在し，それより以下は地山層となっている。遺構は確認しておらず，出土遺物も陶磁器片が数点のみである。



第10図　中間町45号線　平成８年度トレンチ配置図（縮尺1/4）

出土遺物（第11図）は，第２トレンチのものである。１は須恵器甕である。２は石鏃である。

以上のような結果から，工事範囲については遺構・遺物とも希薄な状況が考えられ，工事に先立つ保護措置は不要と判断した。



第11図　第２トレンチ出土遺物実測図（縮尺：土器1/4，石器1/2）

No.2　檀紙町66号線（平成８年度確認調査）

１　調査概要

ａ．場　所　　檀紙町

ｂ．期　間　　平成８年10月17日

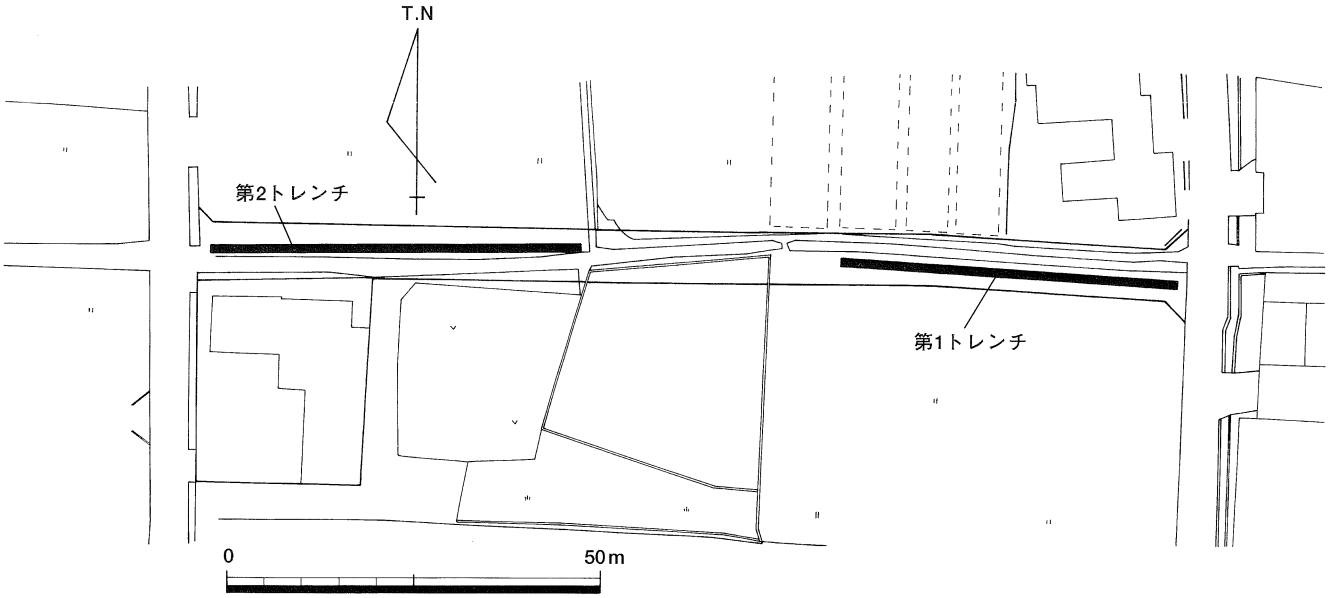
ｃ．面　積　　約92㎡

ｄ．担当者　　大嶋和則

２　調査内容

工事範囲のうち，東西に第１・２トレンチを設定し確認調査を実施した。第１トレンチ東半分は，表土及び黄褐色シルトの下位に礫層が認められ微高地と考えられる。第１トレンチ西半分と第２トレンチでは，礫層上位に黒褐色土層の堆積が20ｃｍ程認められ，やがて礫層は観察されなくなることから自然河道と推定される。この黒褐色土層より，土師器及び須恵器の細片が少量認められる。遺構は，近世期と推定される鋤痕・ピットが若干確認された。

以上のような結果から，工事範囲については遺構・遺物とも希薄な状況が考えられ，工事に先立つ保護措置は不要と判断した。また，以西の工事区間についても同様の状況が想定されることから，同措置とした。

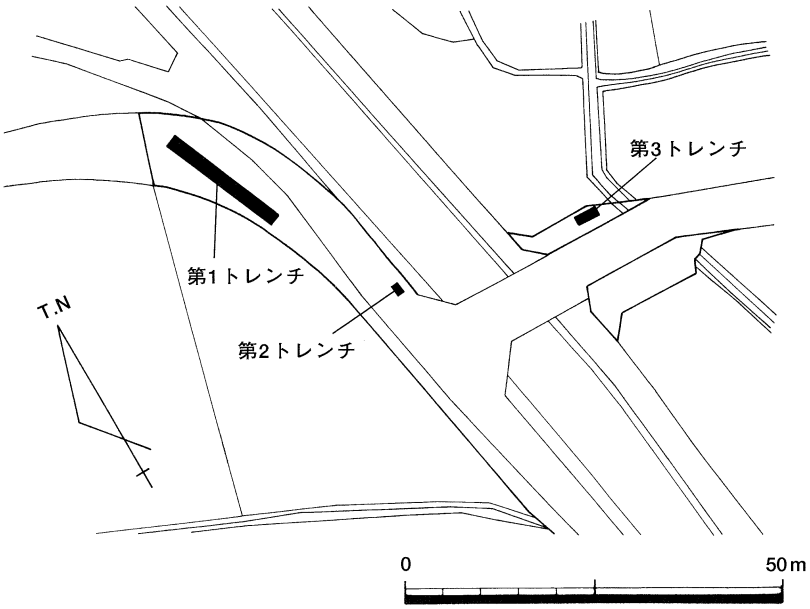


第12図　檀紙町66号線トレンチ配置図（縮尺1/1000）

No.3　中間町45号線
（平成９年度確認調査）

１　調査概要
　ａ．場　所　　中間町
　ｂ．期　間　　平成９年９月４日
　ｃ．面　積　　約40㎡
　ｄ．担当者　　山元敏裕

２　調査内容
　平成８年度に行われた工事部分の西延長部で，古川の氾濫原に位置する。トレンチを３箇所設定したが，遺構は確認されなかった。遺物も唐津１点のみである。
　以上のような結果から，工事に先立つ保護措置は不要と判断した。

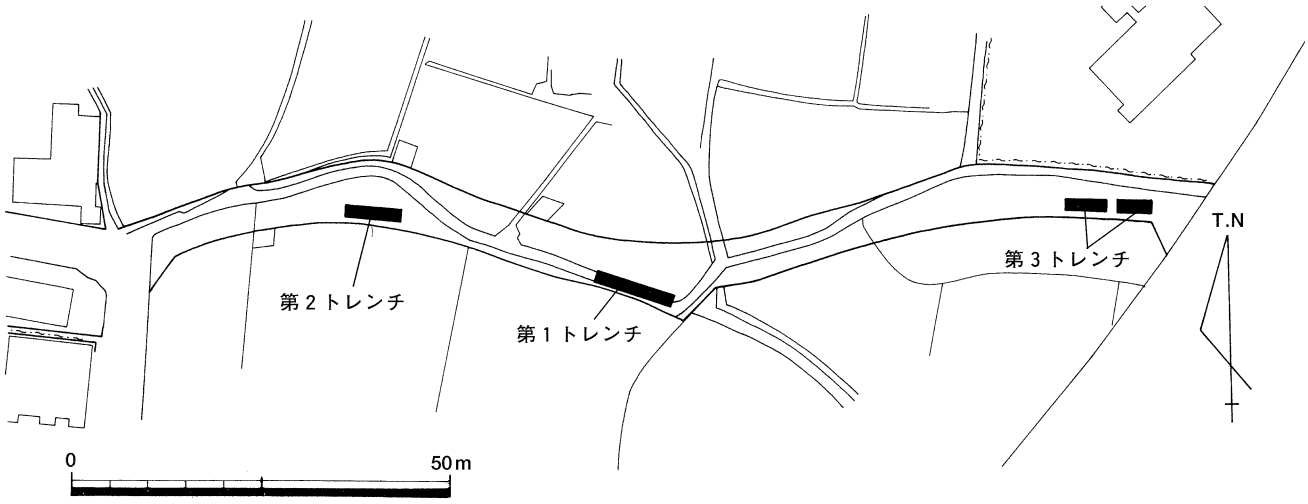


第13図　中間町45号線トレンチ配置図（縮尺1/1000）

No.4　中間町48号線（平成12年度確認調査）

１　調査概要
　ａ．場　所　　中間町
　ｂ．期　間　　平成13年１月15日・16日
　ｃ．面　積　　約50㎡
　ｄ．担当者　　小川賢・末光甲正

２　調査内容
　工事範囲で３箇所のトレンチを設定した。西半分では砂層及び黒褐色土の堆積が認められ古川の氾濫原に相当するものと考えられるが，東半分でやや微高地状となっていた。しかし遺構は確認されず，サヌカイト片・須恵器片がローリングを受けた状態で若干出土したのみである。以上のような結果から，工事に先立つ保護措置は不要と判断した。



第14図　中間町48号線トレンチ配置図（縮尺1/1000）

No.5 津内・東井坪遺跡（檀紙町55号線　平成13年度調査）

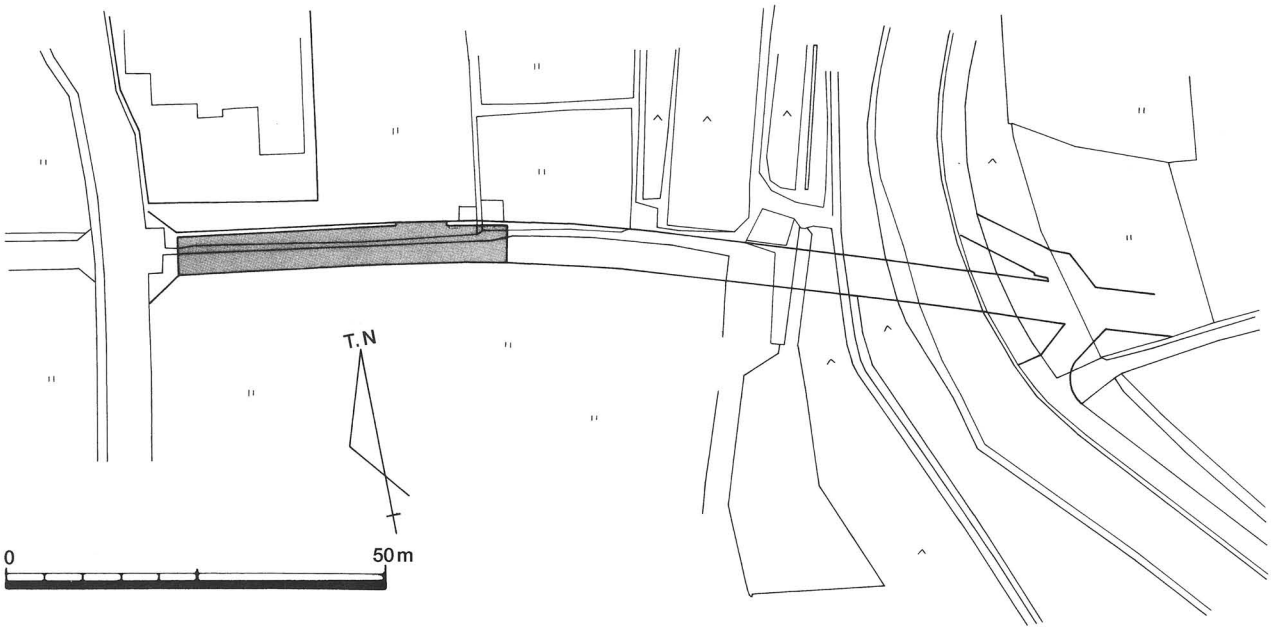
1　調査概要

a．場　所　　御厩町・中間町

b．期　間　　平成13年12月10日～20日

c．面　積　　約225㎡

d．担当者　　小川賢



第15図　津内・東井坪遺跡（檀紙町55号線）調査配置図（縮尺1/1000）

2　調査内容

a．調査の経緯（第15図）

工事は調査地の東を流れる古川の両岸に，５m幅の道路を設置し橋を渡すもので平成13年度は西岸部分が予定されていた。当区間が，新設工事であるため確認調査を行った。トレンチは工事範囲の北端に沿って東西方向に設定し，河川の断崖部付近までを確認した。結果，調査地の以西では遺構・遺物は確認されなかったが，調査地中央部では須恵器等の遺物がまとまって出土し，調査を実施することになった。また遺跡名については，当地が「津内」及び「東井坪」の字名の地に接することから津内・東井坪遺跡とした。なお東岸部の工事については，宅地が建ち込む矮小な範囲であることや，調査地以西と同様の状況が考えられたため，確認調査は行わなかった。

b．遺構の概要（第16図）

遺構面は２面確認された。第１面では大畦畔状の遺構が東西方向に認められ，南側に溝状遺構SD01が併走して検出された。またこの大畦畔状の遺構には，水戸と考えられるSD02・SD03が開削されている。第２面では遺存状態が悪いものの，直交する位置関係でSD04・SD05が認められた。SD04からは遺物が比較的まとまって出土している（第18図）。またトレンチ断面のみの確認となったが，第２面の下層部には調査地を蛇行する大溝（SD06）の存在が想定された。

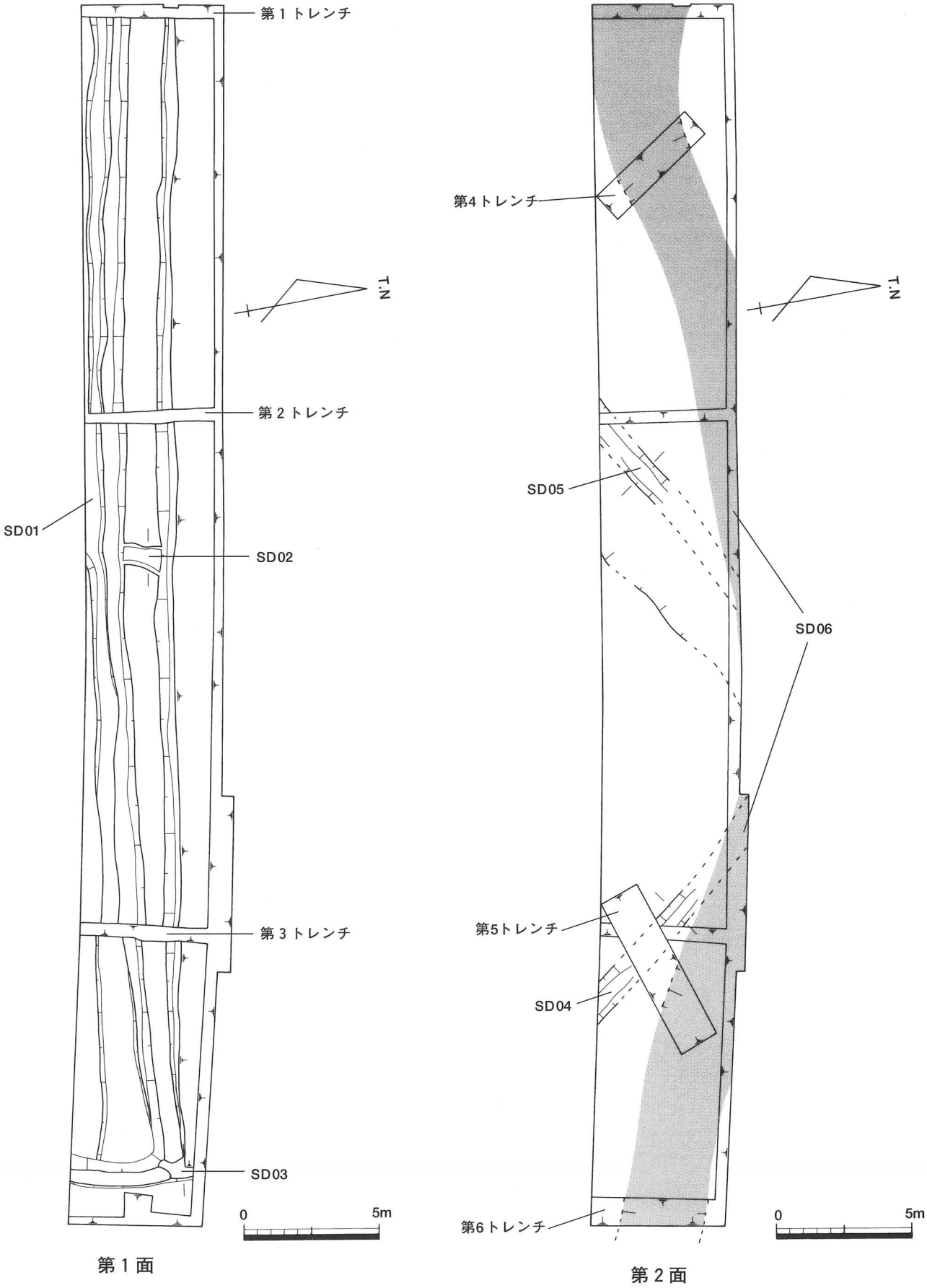
c．基本土層（第17図）

地山は⑦層の黄色シルト質粘土層で，この下位及び東部では砂礫⑧層が認められ，東を流れる河川の自然堤防状の地形が推定される。最下位と想定される大溝（SD06）は西部で⑦・⑧層を基盤とし，埋土④層及び⑤層の上半部で遺物が集中して出土した（第19図）。さらにSD04・SD05がこれに後出して開削されている。上位の堆積層では大畦畔を覆う②・⑨層が近世の陶磁器片を含んで見られ，当遺構の埋没時期を示すものと考えられる。

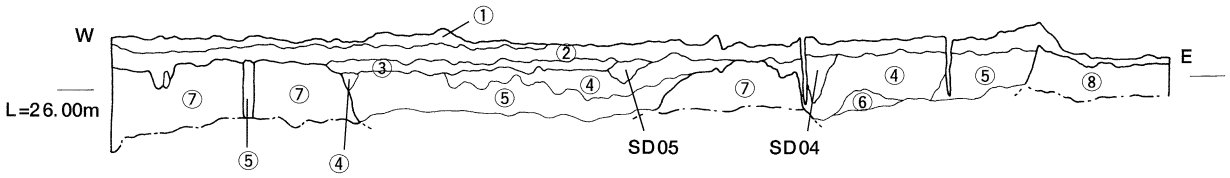
d．遺構・遺物

大畦畔（第16・17図）

推定条里界線上に位置し，香川郡10条12・13里界に相当する。東西方向に約42m検出された。約１m幅の

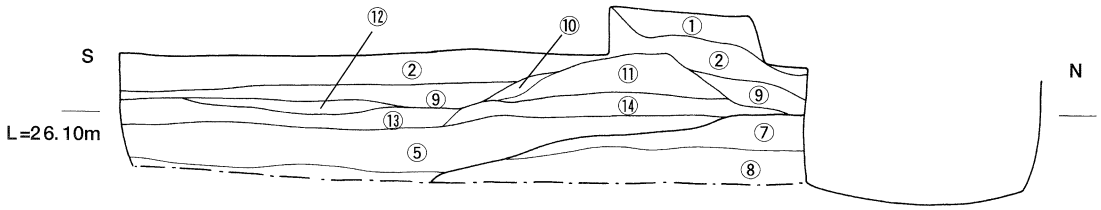


第16図　第１・２面遺構配置図（縮尺１/200）



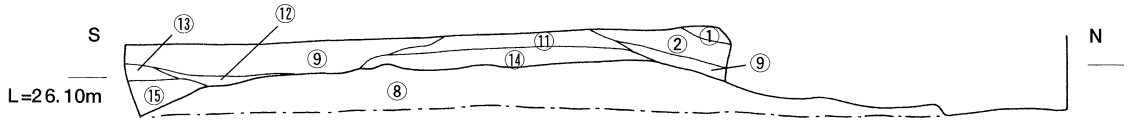
調査地北壁土層図（高さ：1/40，長さ：1/320）

①：現耕作土
②：10YR7/3にぶい黄橙色シルト質極細砂（Fe沈着）
③：7.5YR6/1褐灰色シルト質極細砂
④：7.5YR3/1 黒褐色シルト（SD06）
⑤：7.5YR3/1 黒褐色砂礫混シルト（SD06）
⑥：7.5YR5/1 褐灰色砂礫
⑦：5Y7/6黄色シルト質粘土
⑧：2.5Y6/6明黄褐色砂礫
⑦,⑧：地山



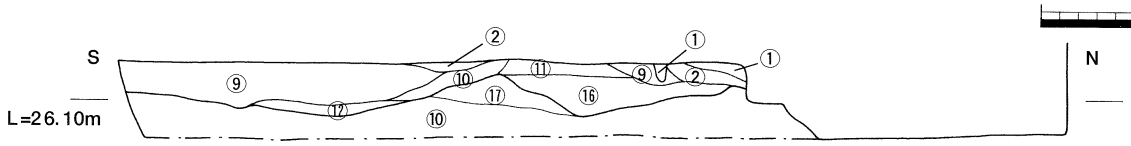
第1トレンチ西壁土層図（1/40）

①～⑧：上図と共通
⑨：2.5Y7/3 浅黄色シルト質極細砂
⑩：2.5Y8/1 灰白色細砂（固くしまる，畦畔）
⑪：2.5Y8/2 灰白色砂混シルト（畦畔）
⑫：2.5Y8/2 灰白色砂質シルト（黒色土を塊状に含むSD01）
⑬：7.5YR6/1 褐灰色シルト質極細砂
⑭：10YR4/1 褐灰色シルト（固くしまる，畦畔）



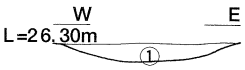
第2トレンチ西壁土層図（1/40）

①～⑭：上図と共通
⑮：7.5YR3/1 黒褐色シルト（地山⑧を含む，SD05）



第3トレンチ西壁土層図（1/40）

①～⑮：上図と共通
⑯：7.5YR2/1 黒色砂礫混シルト（SD04）



SD02 断面図（1/40）
①：2.5Y7/3 にぶい黄色シルト質極細砂

SD03 断面図（1/40）

第17図　調査地土層図・トレンチ土層図・遺構断面図

規模をもち直線的にのびるが，調査地の西端部で先細りやや北へ湾曲する。大概では，N－9°－W前後の方位を示し，現況の地割と合致する。畦は0.2～0.3mの高さをもち，褐灰色シルト（⑭層）を基盤に灰白色の砂質土（⑩・⑪層）を築き固め盛土としている。調査地の西端では直交する畦畔が認められ，その交点にSD03が開削されている。水戸と考えられるSD02・03は，約22.5mの間隔で認められる。時期は近世の堆積物（②・⑨層）により埋没していることや，併走するSD01が中世期と推定されることから，中～近世の長期にわたる時期が考えられる。

SD01（第16・17図）

調査地の南側を東西方向に走る溝である。幅0.6～0.8mの規模であるが，西側で幅広になり南北方向の畦で途切れる。検出高は26.10～26.16m，底面は26.05～26.08mを測る。埋土は黒色土を塊状に含む砂質土である。10cm程の浅い溝で，底面に高低差が見られず配水または排水溝として考えにくいが，大畦畔に併走することから大畦畔の盛土を得る目的で開削された可能性が想定される。出土遺物は小片だが，中世と考えられる土師質・須恵質土器片が認められた。

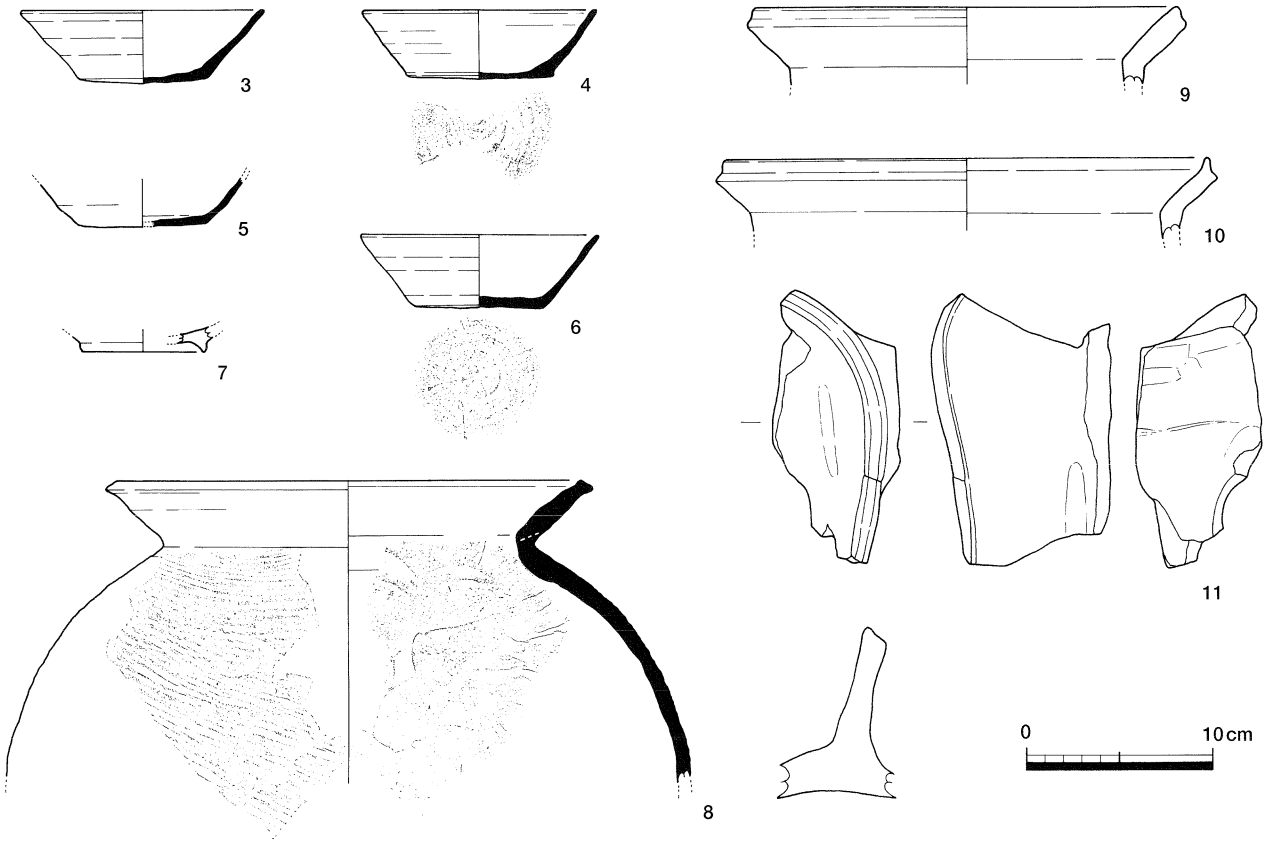
SD02・03（第16・17図）

大畦畔上に開削された溝状遺構である。幅0.9m程の規模をもち，深度は約10cmで畦畔の下端より浅く開削されている。SD03は畦畔の交点に接する箇所が狭くなっており，底面付近には拳大の石が集中していた。

SD04（第16・17・20図）

第２面で確認した溝である。検出した標高は22.26m前後，底面は26.05m前後を測る。大畦畔の盛土以下で認められ，畦の下端部では削平されている。N－36°－W前後の方位を示す。埋土は黒色砂礫混じりシルトの単層で，遺物が比較的まとまって出土している。所属時期は，出土遺物より平安時代後半と考えられる。

出土遺物（第18図）のうち，３～６は須恵器坏で，口径は12cm前後を示す。口縁部が外反する器形で，３・４は体部が内湾し底部が外方向に突出する。７は黒色土器椀底部。８は須恵質土器甕で，卵形の体部をもち頸部が「く」の字に折れる。口縁端部はやや外方に突出し，内面は沈線状に窪む。体部外面は平行叩き，内面はナデて仕上げている。９・10は土師器甕。11は竈の破片である。



第18図　SD04 出土遺物実測図（縮尺1/4）

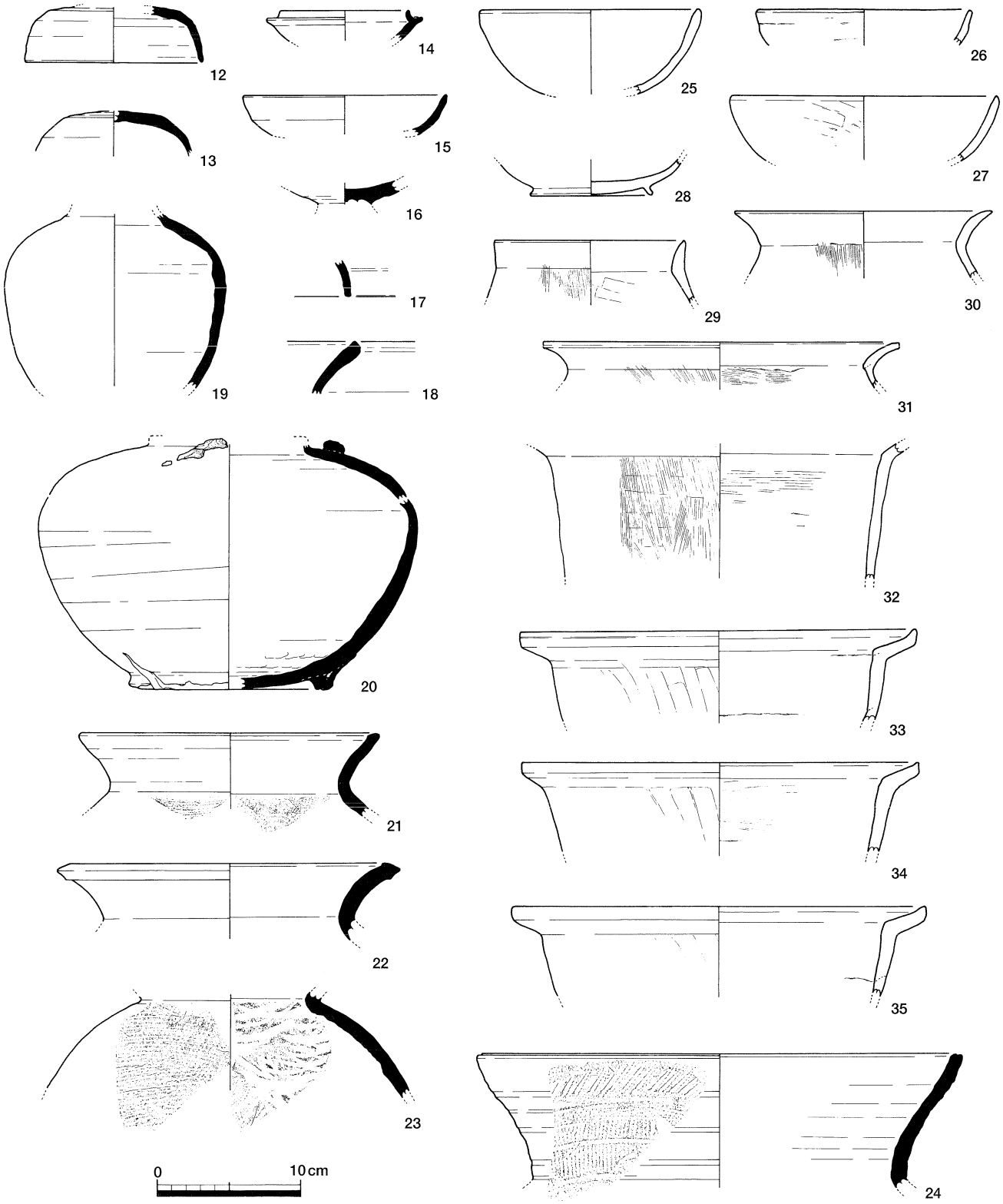
SD05（第16・17・20図）

第２面で確認した溝である。検出した標高は22.10m，底面は25.90m前後を測る。SD01大畦畔の盛土以下

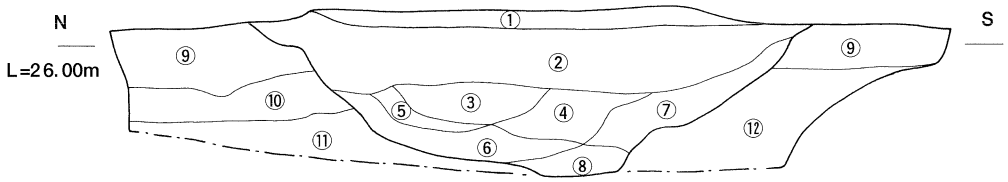
で認められた。大畦畔より北では削平され明確ではないが，SD04と直交する位置関係が推定される。埋土は黒褐色シルト～黒色砂礫混じりシルトである。出土遺物はないが，SD04とほぼ同時期の所属時期が推定される。

SD06（第16・19・20図）

第２面の下層に存在する溝である。確認調査時には自然流路として考えられたが，第４・６トレンチの断面観察によると壁面の立ち上がりが急傾斜であり，人為的な溝の可能性が考えられる。完掘を行えなかったが，各所に設けたトレンチより，幅３ｍ前後の規模をもち，調査地中央部において北方向へ湾曲すると推定



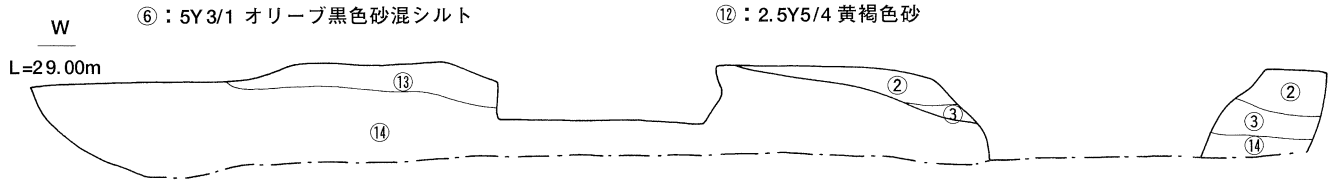
第19図　SD06 出土土器実測図（縮尺1/4）



第４トレンチ東壁土層図（1/40）

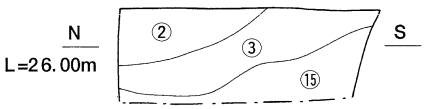
①：10YR4/1 褐灰色シルト
②：7.5YR3/1 黒褐色砂礫混シルト（しまる）
③：7.5YR3/1 黒褐色砂礫混シルト
④：10YR3/3 暗褐色砂礫混シルト
⑤：2.5Y5/1 黄灰色シルト
⑥：5Y3/1 オリーブ黒色砂混シルト
⑦：5Y7/4 浅黄色砂混シルト ②～⑧ SD06埋土
⑧：5Y4/1 灰色砂
⑨：5Y7/6 黄色シルト質粘土
⑩：2.5Y6/6 明黄褐色砂礫
⑪：7.5Y6/3 オリーブ黄色砂礫
⑫：2.5Y5/4 黄褐色砂

0　1m



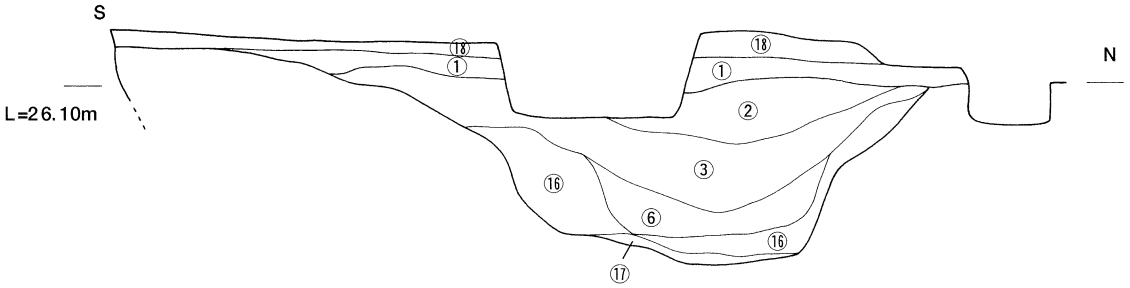
第５トレンチ北壁土層図（1/40）

①～⑫：上図と共通
⑬：5Y7/6 黄色砂混シルト
⑭：2.5Y7/6 明黄褐色砂礫
⑮：10YR3/3 暗褐色砂礫混シルト
⑬～⑮ SD06埋土



第５トレンチ東壁土層図（1/40）

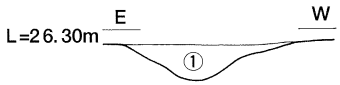
0　1m



第６トレンチ西壁土層図（1/40）

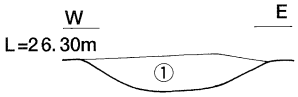
①～⑮：上図と共通
⑯：5Y7/4 浅黄色砂混シルト
⑰：5Y4/1 灰色砂
⑱：2.5Y7/3 浅黄色シルト質極細砂
⑯・⑰ SD06埋土

0　1m



SD04 断面図（1/40）

①：7.5YR2/1 黒色砂礫混シルト



SD05 断面図（1/40）

①：7.5YR2/1 黒色砂礫混シルト

0　1m

第20図　トレンチ土層図・遺構断面図

される。底面の標高は第４トレンチで25.32m，第６トレンチで25.16m前後を測り，緩やかに東方向へ下るものと考えられる。埋土は基本的には上部で黒褐色シルト質土，下部で砂質土が堆積するが，細分層した埋土の状況からは再掘削が行われている可能性が考えられる。出土遺物は第４～６トレンチではほぼ皆無であったが，確認調査及び調査地の北側溝掘りの際に，調査地中央部で溝が湾曲する地点の上層部において集中して認められた。所属時期は確認状況及び出土遺物から古墳時代終末期～平安時代後半までの時期幅をもって考えられる。

出土遺物（第19図）の大半が確認調査及び側溝掘りの際に取り上げたもので，他の遺構（SD04）のものを含む可能性がある。12～24は須恵器で，12～14は蓋及び坏，19・20は壺である。20は口縁端部を失うが，短頸壺と考えられ蔵骨器としてよく使用されるものである。頸部から肩部の外面には自然釉が付着しており，熔着痕が認められる。以下体部に回転ヘラケズリがなされ，高台部にも熔着痕がある。21～24は甕である。24の外面は，口縁部にハケ原体により列点状の刺突，頸部かけてはハケ原体による縦位の施文後，横位の沈線により区画が施されている。25～35は土師器で，25～27は鉢で，29は小形の短頸壺，30～32が甕で，32は長胴のものである。28は内黒の黒色土器椀である。33～35は器高の浅い鍋形の煮沸具と考えられる。

ｅ．まとめ

第１面では，香川郡十条12・13里界上と一致する大畦畔を確認した。当地は現況でも中間・御厩町の境界となっているが，この境界が中世まで遡って存在する可能性がある。第２面では，SD04・SD05が存在するが条里地割と一致しない。第２面より下位では，SD06の湾曲部に遺物が集中し認められることから，調査地中央の北側を中心に何らかの遺構の所在が想定される。

No.6 檀紙町27号線西区間

（平成13年度確認調査・工事立会）

１　調査概要

ａ．場　所　　檀紙町
ｂ．期　間　　平成13年10月23日～25日
ｃ．面　積　　約10㎡
ｄ．担当者　　小川賢

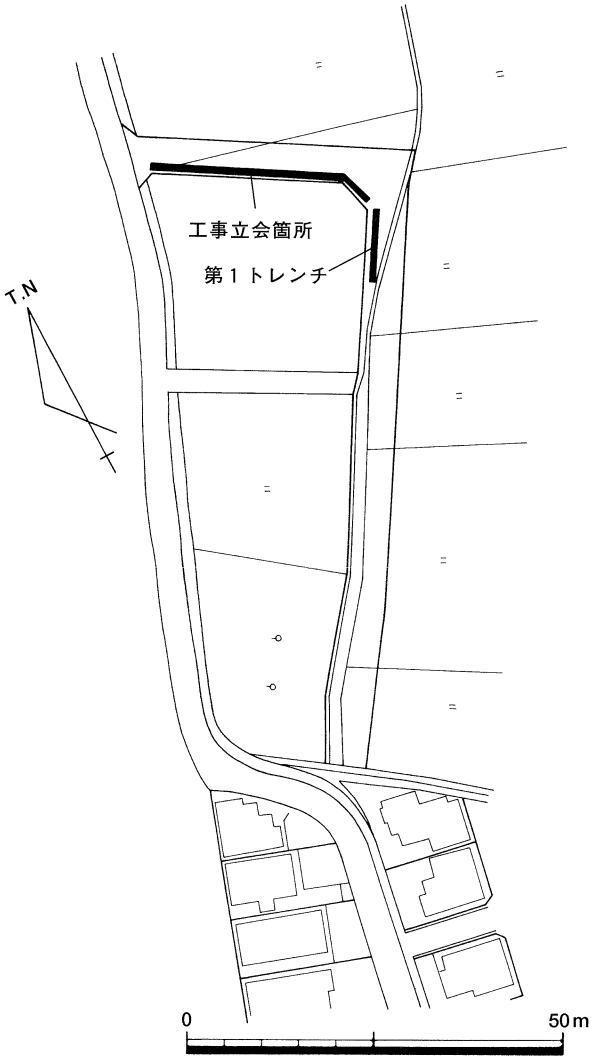
２　調査内容

当路線は，大半部が既存の道路を拡幅するものであったが，当地周辺部は後期旧石器時代及び中・近世の埋蔵文化財包蔵地となる中森遺跡，八幡遺跡が所在することから，新規工事部分で確認調査及び工事立会を行った。

住宅が建ち込み重機の搬入が不可能であったため，確認調査は人力によりトレンチを掘削した。結果，表土除去後0.2m程で黄色粘土層に達し，その上面で小規模な溝状遺構を確認した。遺物は出土していない。この粘土層を掘削し，旧石器の確認を行ったが，遺物は認められなかった。

随時行った工事立会では，掘削深度が粘土層より大きく下がらず，また上面での遺構は溝状遺構を１条確認したのみである。遺物は皆無であった。

以上の結果より，工事に先立つ保護措置と判断した。



第21図　檀紙町27号線（西区間）
トレンチ配置図・工事立会箇所（縮尺1/1000）

No.7 中森遺跡（檀紙町27号線東区間　平成13年度確認調査）

1　調査概要

a．場　所　　檀紙町

b．期　間　　平成13年11月26日～29日

c．面　積　　約57㎡

d．担当者　　小川賢

2　調査内容

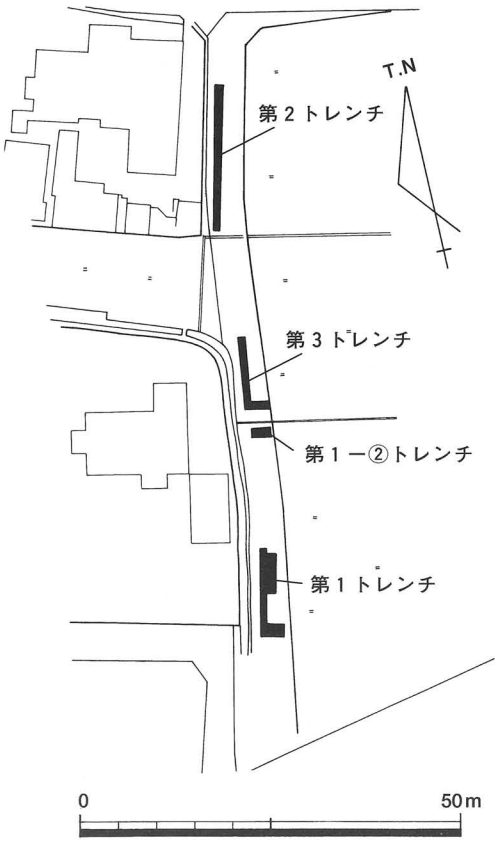
当路線については，西区間で確認調査及び工事立会を行ってきたが，東区間がほぼ新規の工事となることや南端部で中森遺跡に接することから確認調査を行った。

トレンチを３箇所設定し，遺構・遺物の確認を行った。結果，南部に設定した第１トレンチでは，現況に見られる条里地割に合致する溝を検出し，溝の最下層から中世の遺物が出土するとともに，集石を伴う遺構を確認した。

北部に設定した第２トレンチでは，条里地割に合致しない溝が数条検出されたが，遺物が皆無のため時期不明である。

中央部の第３トレンチでは，第１トレンチで確認した溝を検出したが下層部は存在せず，近世以降の陶磁器のみが認められた。また旧石器の包含層と想定される黄色粘土層を人力により掘り下げ，礫面まで確認したが遺物は出土しなかった。

以上の結果より，第１トレンチで認められた溝を除き，工事範囲については，同様の結果が想定されたため工事に先立つ保護措置は不要と判断し，第１トレンチの溝については，当確認調査で記録保存を行った。



第22図　檀紙町27号線（東区間）
トレンチ配置図（縮尺1/1000）

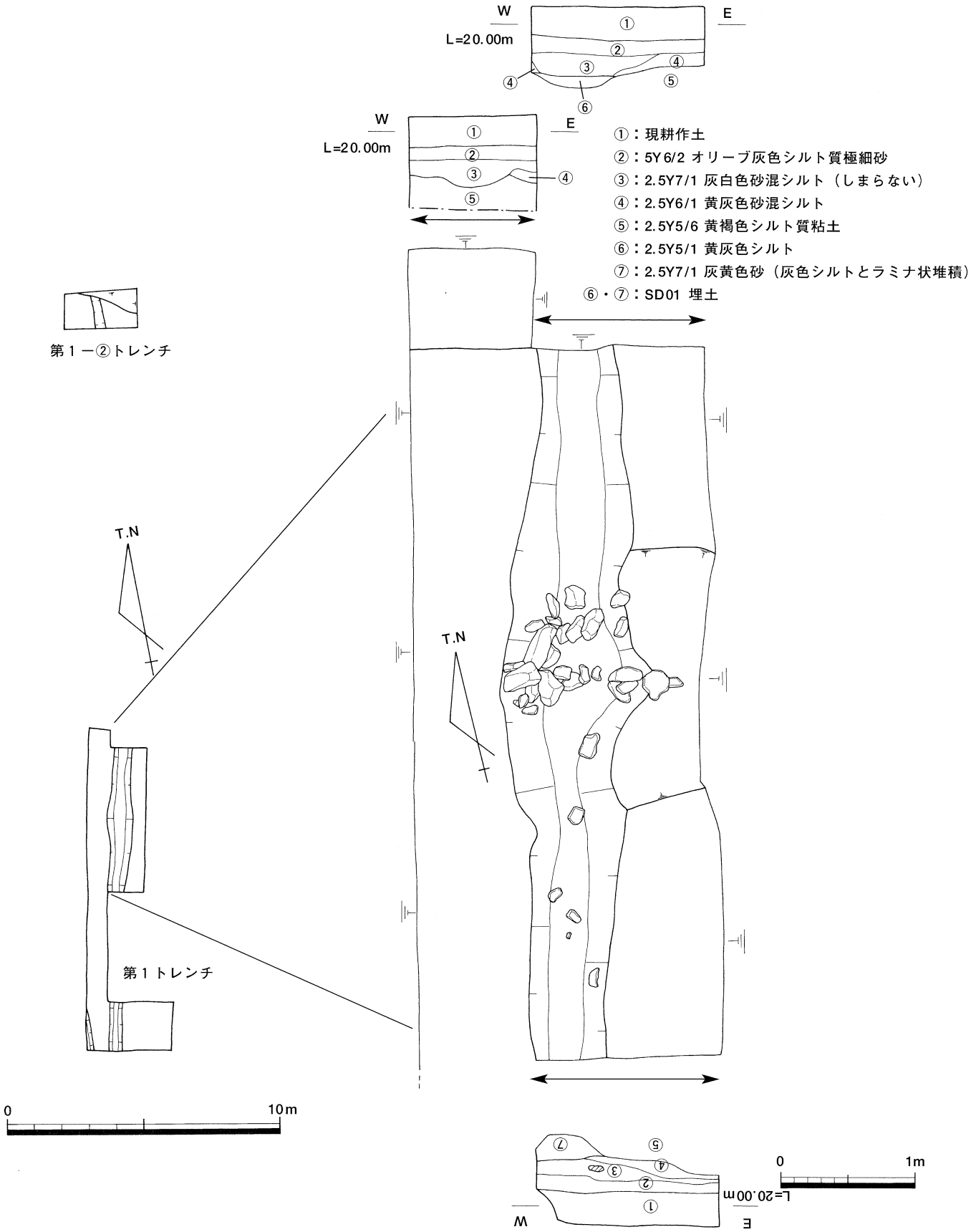
写真１　第２トレンチ掘削状況

写真２　第３トレンチ掘削状況

SD01（第23図）

第１トレンチで確認した溝である。検出した標高は19.55～19.65mで，黄褐色シルト質粘土⑤層上面で検出した。この上位面でも④層を基盤に③層の落ち込みが同位置で認められたが，明らかに近世以降の遺物を包含するため，上位の遺構面については調査対象から外している。また以北の第１－②及び第３トレンチでも延長部を確認しているが，埋土がすべて③層で充填されており下層部⑤層は認められなかった。

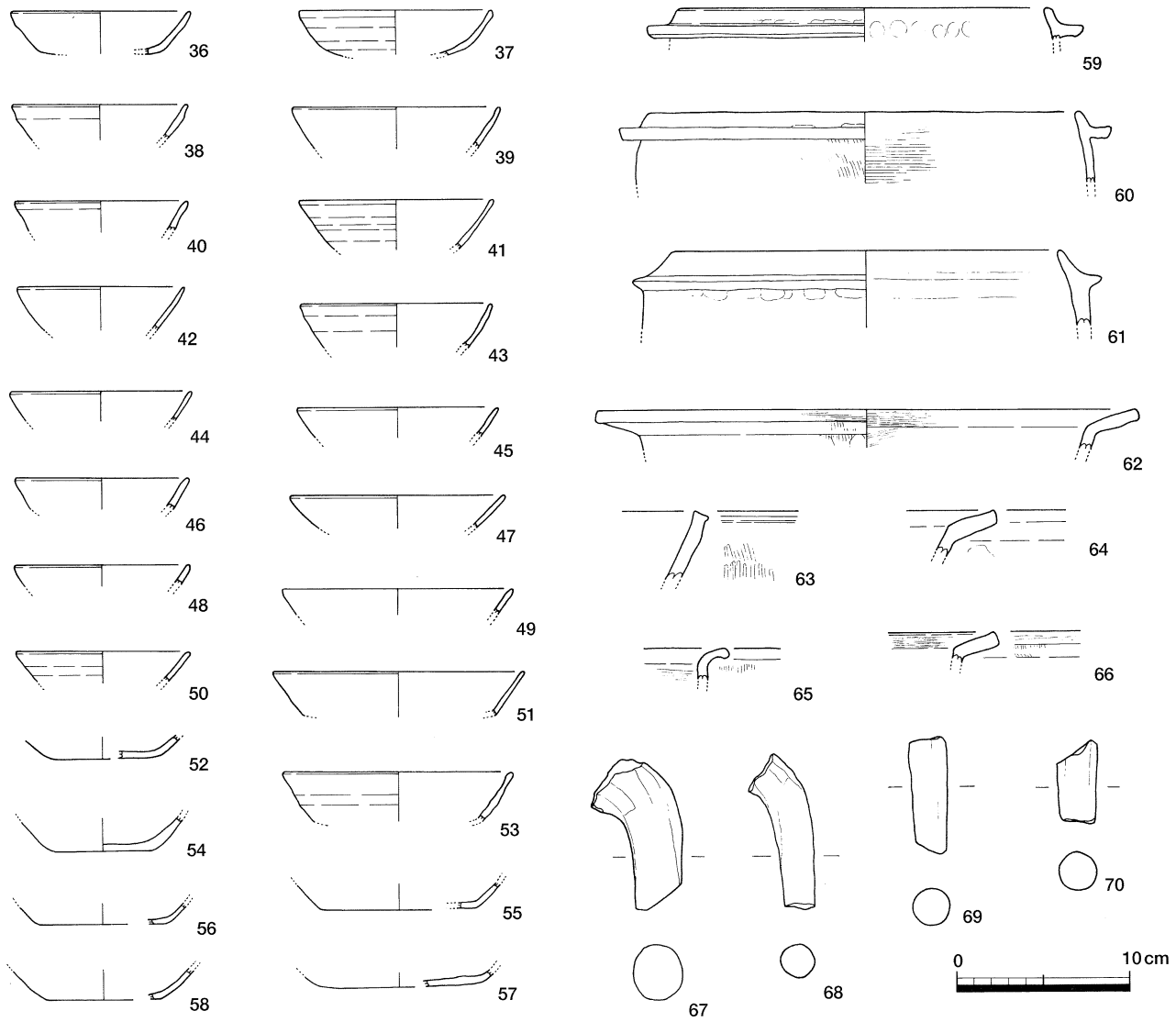
下層遺構は検出幅で約0.7～1mの規模をもち，中央に見られる集石部付近でやや幅広になる。溝の底面は19.5～19.53mの標高を測るが，中央に見られる集石部付近では19.46m前後で若干深くなっている。中央部では底面に人頭大の河原石が散在する状態であるが，配置状況をみると溝を横断して積まれていた可能性が



第23図　第１トレンチ遺構平・断面図（縮尺1/200・1/40）

推定される。また調査地の北及び南壁に見られる埋土は，北側でシルト，南側で砂質土のラミナで堆積物が異なっており，集石を境に水流の状態が変わっていたことが分かる。集石部の東面が③層で壊されており明確にならないが，当箇所で東へ水流を分岐していた可能性がある。集石部付近では皿，鍋といった日常雑器が集中して認められており，生活に密着した施設があったのかもしれない。所属時期は，出土遺物より中世と考えられる。

以下，出土遺物（第24図）を報告するが，土器形式・年代観は佐藤編年（佐藤2000）を参考とした。36～57は，土師質土器坏である。口径が10～12cmでやや器高が高く，薄手のものが大半を占めるが，口径14cm前後の大振りのものも認められる（51・53等）。底部の調整は明瞭ではないが，小形のものは器形及び法量から坏ＤⅡ－６型式に相当すると考えられる。59～61は，土師質土器足釜の口縁部である。59・60は鍔部が水平方向に伸び，口縁部と共に端面が明瞭で足釜ＡⅠ型式に相当する。60は鍔の下方にもハケ調整が明瞭に認められ，体部を折り曲げ鍔を作り出したと考えられる。61は鍔部が垂れ気味で端部は丸く納まり，足釜Ｂ－Ⅱ以降の型式が考えられる。62は土師質土器鍋である。口縁部が水平方向に近く外方に伸び，内外面にハケ調整が認められ，鍋ＡⅠ型式に該当する。63は瓦質土器鉢の口縁部である。口縁部端面が外方に突き出し，鉢Ｅ－３型式とみられる。64～66は土師質土器鍋の口縁部。65は足付鍋かもしれない。67～70は土師質土器煮沸具類の脚部である。以上より，中世Ⅱ－４～５期（13世紀第３四半期～14世紀前葉）の時期が想定される。



第24図　SD01 出土遺物実測図（縮尺1/4）

No.8 中間町15号線（平成14年度確認調査）

1　調査概要

a．場　所　　中間町

b．期　間　　平成14年10月25日

c．面　積　　約60㎡

d．担当者　　小川賢

2　調査内容

当路線は，古墳時代を中心とした中間・西井坪遺跡に近接するため確認調査を実施した。路線の西半分は既存の道路が存在し確認不可能のため，ほぼ新規の工事区間である東半分でトレンチを３箇所設定し確認調査を行った。

すべてのトレンチにおいて，ほぼ表土直下で地山と考えられる黄色シルト質粘土層となり，第１・２トレンチで溝及びピットが数箇所において認められた。溝は一定の規模を有するが，出土遺物は土器細片１点のみであった。出土遺物はトレンチ全体でもこれのみであり，埋蔵文化財の希薄な状況が考えられ，工事に先立つ保護措置は不要と判断した。

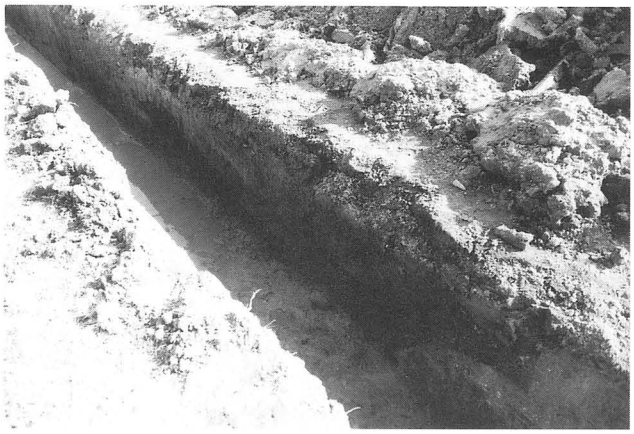
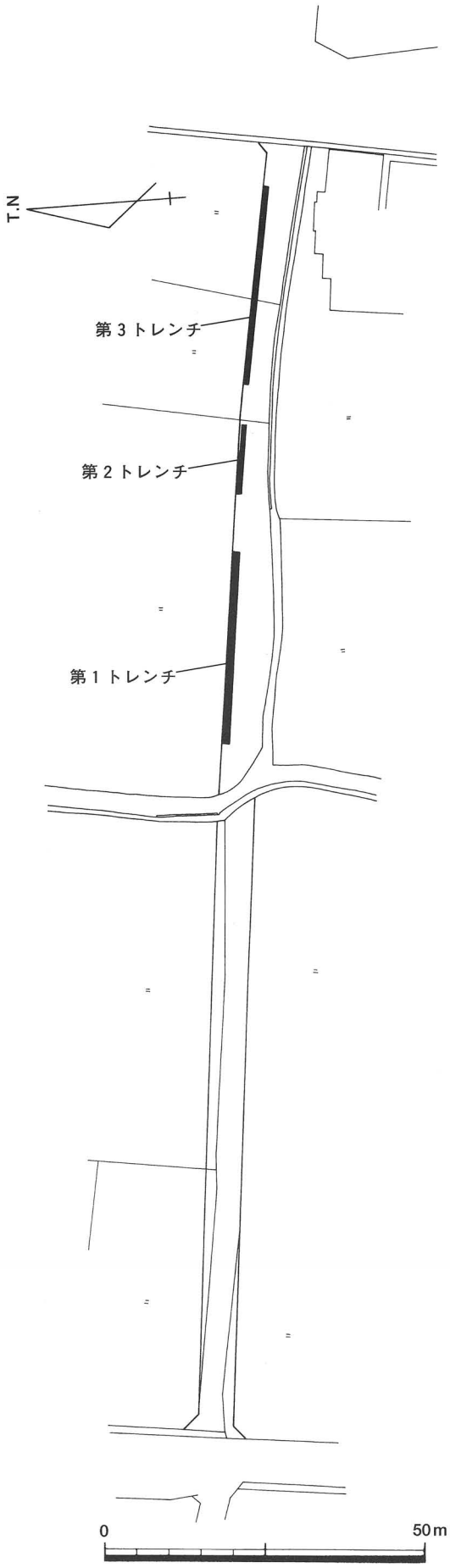


写真３　第１トレンチ南壁土層堆積状況

写真４　第２トレンチ南壁土層堆積状況



第25図　中間町15号線トレンチ配置図
（縮尺1/1000）

六条・林地区

No.9　林さこ遺跡（林町61号線　平成８年度調査）

１　調査概要

ａ．場　所　　林町

ｂ．期　間　　平成９年２月28日～平成９年３月３日

ｃ．面　積　　約107㎡

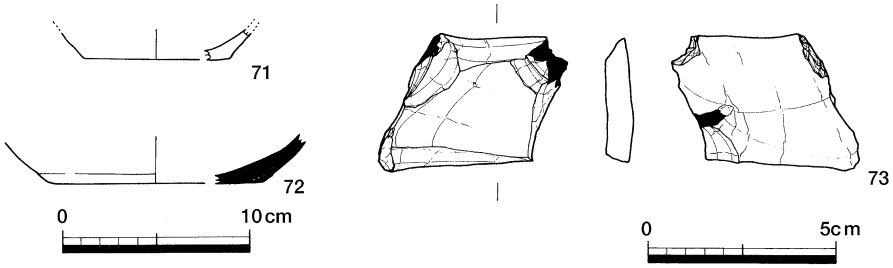
ｄ．担当者　　山本英之・末光甲正

２　調査内容

現在の里道や畦道を拡幅整備するもので，事実上調査可能な部分は現道沿いに２ｍ程度と狭い範囲だった。

都市計画道路福岡三谷線西側にあたる市道林町61号線は，全体が微高地上に位置しており，そのため粘土採取や水田の水量確保のために全体が削平されていた。この結果，確認した遺構は，西端で東西方向に伸びる条里地割に沿った溝１条のみであった。この溝は，幅2.5ｍ以上，深さ20～30㎝を測り，調査区の西端から緩やかに蛇行しながら東へ伸び，西端から約20ｍの地点で調査区の北へ伸びている。上層に薄い乳白色細砂層，下層は灰褐色シルト層が堆積し，埋土から須恵器片が若干出土した。

出土遺物（第26図）のうち，71は，土師器底部である。72は須恵質ないし瓦質土器の底部である。73はサヌカイト片である。



第26図　SD03 出土遺物実測図（縮尺：1/4，石器1/2）

No.10　林下所遺跡（林町60号線　平成８年度調査）

１　調査概要

ａ．場　所　　林町

ｂ．期　間　　平成９年２月26日～３月31日

ｃ．面　積　　約372㎡

ｄ．担当者　　山本英之・末光甲正

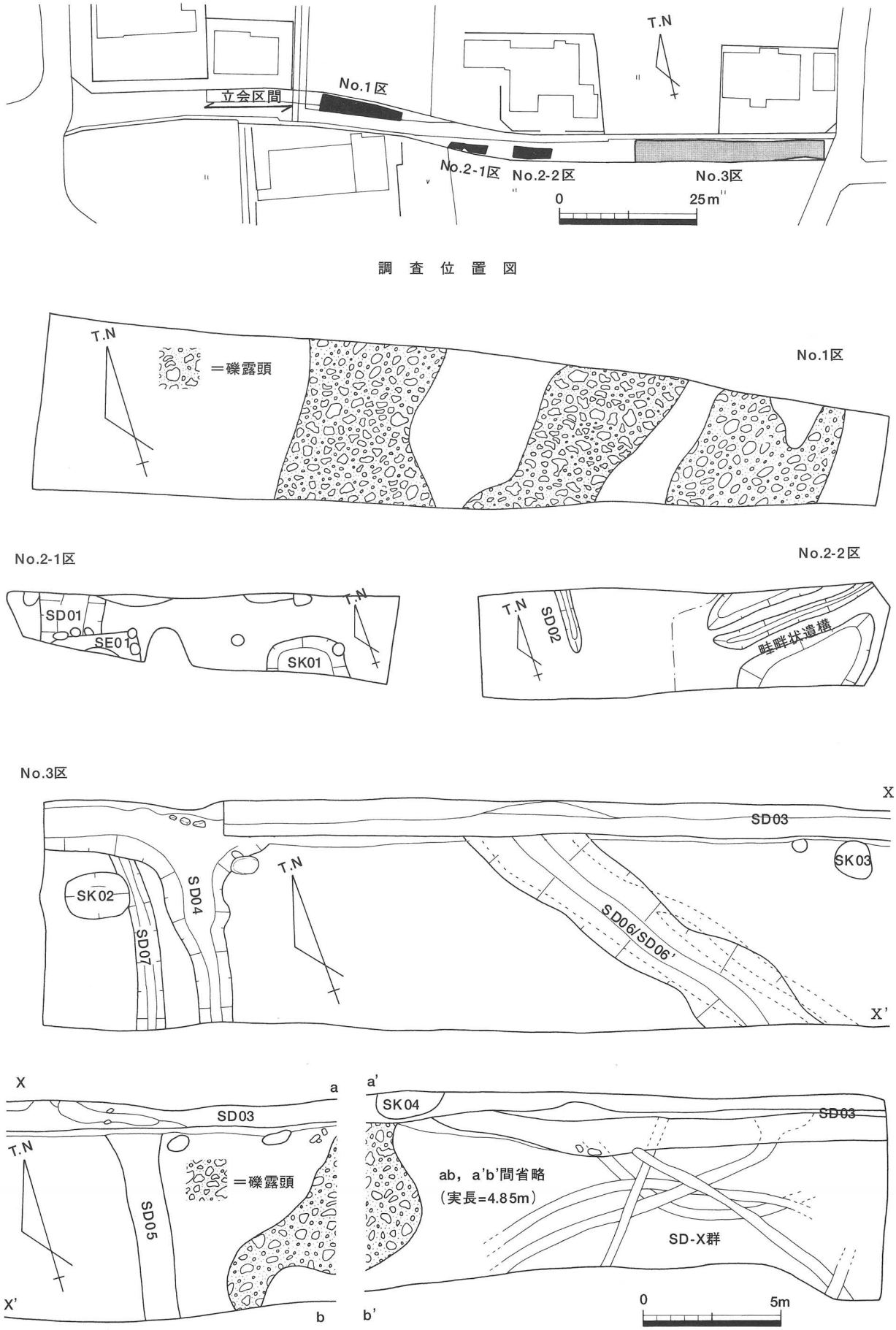
ｅ．調査原因　林町60号線工事

２　調査内容

現地は，調査区東端に近来の分譲団地が接する点を除き，文化15年(1818)作成『山田郡下林村順道絵図』に描かれた近世後期に近い景観が残り，住居・農耕地の配置・筆界等がほぼそのまま踏襲されている。

調査区は，高松市林町2063～2064番地の境界部分を東西方向に走行する市道林町60号線のうち約96.0m区間の現用道路敷を除いた拡幅予定部分である。道路現況は西半53.5mで幅員1.8～2.8m程度，東半42.5mで幅員1.0m程度であり，これを5.0～6.25m程度(側溝含む)に拡幅する。

拡幅予定部分表土（甘土）除去工事に立会し，遺構が検出された部分について発掘調査を実施した。立地と工程の便宜上，調査区を№1～№3区に分割・設定した。なお，『順道絵図（下林村下所免の冊）』には，2063番地は「十三番同所（立原ノ町）北之町」，2064番地は「十四番原開之町」の坪名称で収載されている。



第27図　林下所遺跡（林町60号線）平成８年度調査位置図・遺構配置図

No. 1 区

遺構・遺物は検出されず，現地表面下0.3～0.8mの深さに，和泉層群起源とみられる幅２～３mでSSW→NNEに併走する礫堆積（径10cm前後の大礫）の頂部が検出された。なお，この頂部はNo.２区～No.３区西端部の範囲では地表面１m以浅では検出せず，当該区間は，自然河川状の凹地をなしていたと考えられる。

No. 2 区

①2-1区　狭小な範囲であるが，南北方向の溝SD01，井戸SE01，水利（?）土坑SK01及びピット列が検出された。遺物は小片のみで正確な時期比定は難しいが，SD01，SK01は近世後半のものであろう。何れも農業水利関連の施設と想定される。SE01は，聴き取りにより大正14年（1925）旱害時には活用され，戦後の住宅改築時に廃棄土坑として埋め立てられたものと確認された。杉板を竹箍で桶状に組んだ径1.2m，深さ１m余の井戸側を持つ浅井戸で，内面に側板近似の形状の板材を打ち込み副木として支持している。

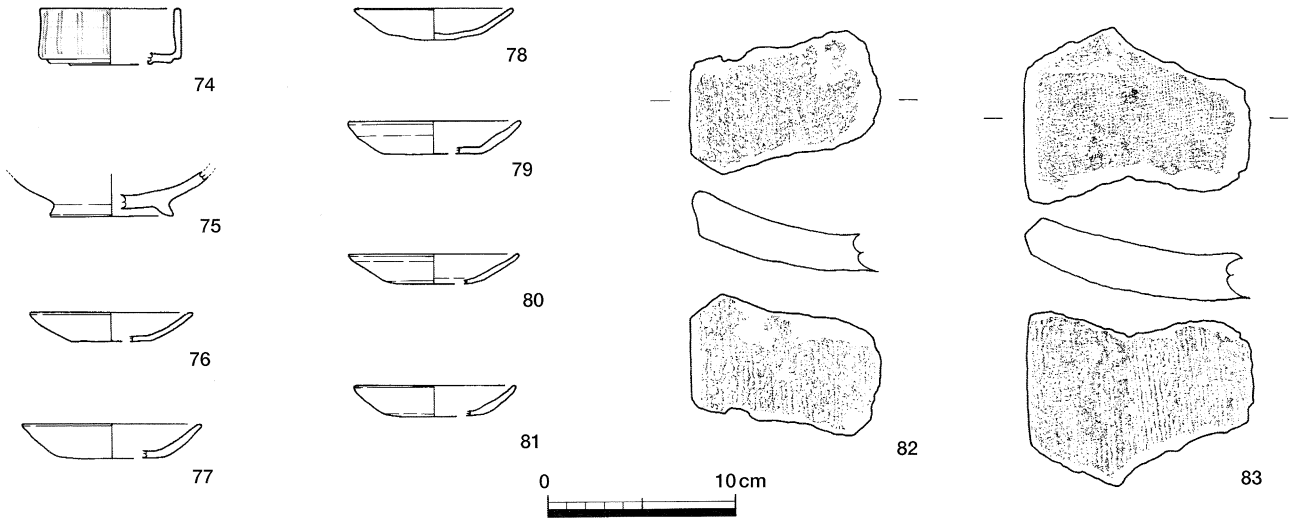
②2-2区　西半は，現地表面－0.5～0.6m付近で埋土の性状・色調等から中世頃の農耕土の可能性が窺われる面を確認した。やや高燥とみられる比較的堅緻な黄灰色砂質シルト面があり，畝たてに伴い形成されたとみられる幅15cmの溝状遺構SD02を検出した，一方東半では，東北東の方位をもつ水田畦畔もしくは給排水路状のやや不明瞭な遺構がみられた。土質・土色から古代以前の層位である可能性も指摘できる。

No. 3 区

本区は，先述『順道絵図』図示の坪界線がほぼそのまま踏襲されている可能性が高く，幅約１mの農道に接した東西方向42.5mに亘る区間である。農道南側水田（2063番地）は本区間及び西接部分が連続した１筆となっている。

農道南沿いに幅70cm（以上）の坪界線に相当する溝SD03を検出したが，更にこれに直交して南へT字状に分岐する２条の南北方向溝が接続し，2063番地水田は東西に三分されていたことが判明した。しかも，現地形図及び『順道絵図』では，条里型区画が乱れた状態での坪界区分が図示されているが，検出したSD04/SD05を南に延長して2063番地坪南東角に接続すると，本来の方格坪の形状が復元できることが確認された。出土した土師質土器小皿等からも，中世末頃まで方格の条里型坪区画が現存し，それが文化15年(1818)『順道絵図』作成に到る間に埋没し，乱れが固定化して現在に至る事が明らかとなったわけである。又，SD04，SD05の埋没後，その中間にSE→NW方向に斜行するSD06が布設されており，現状に固定する以前に不安定な状況があったことを推測させる。なお，本区東端のSD-Xは，極めて短期間に形成・消滅したと考えられる狭小溝群であるが，これは本市春日町「川南・西遺跡」E区の「溝状遺構」群に酷似の性状を示し，近世後半の所産と考えられる。

出土遺物（第28図）のうち図化したのは，下記10点である。74は染付小丸段重である。口縁端と微細な砂目がある底面外周は無釉。SD03埋没段階の埋土で出土。76～81は土師質土器小皿である。いずれも，調査区東端のSD03最下層の出土であり，溝の成立時期を示すと考えられる。82・83は布目平瓦片である。SD03でSD04との分岐点から出土した。凹面は６本／cm程度の格子状布目で，凸面は４本／cm程度の縄目平行タタキ痕をもつ。75は土師質土器椀底部片である。高台は斜めに外反・拡張する。No.3区東接の次期工区包含層出土である。



第28図　林下所遺跡（林町60号線　平成８年度調査）出土遺物実測図（縮尺1/4）

No.11 林下所遺跡（林下所墓地　平成８年度調査）

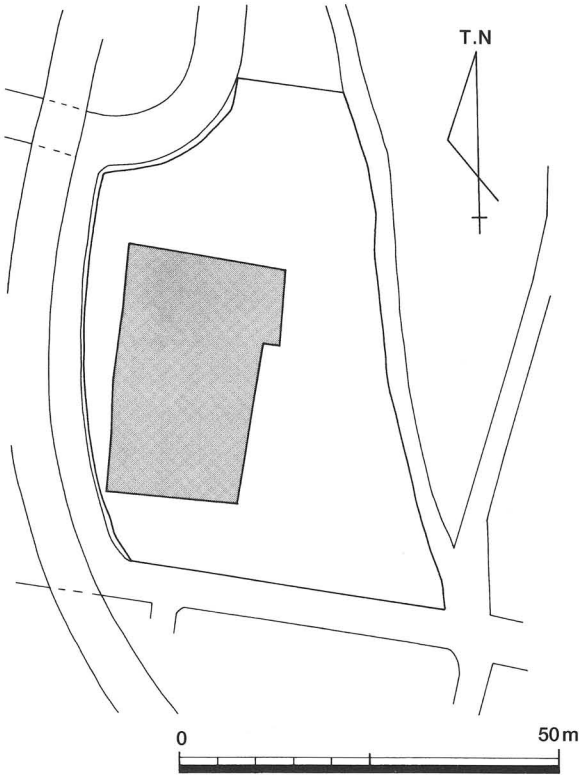
１　調査概要

ａ．場　所　　林町

ｂ．期　間　　平成10年6月15日～７月21日

ｃ．面　積　　約632㎡

ｄ．担当者　　小川賢



第29図　林下所遺跡（林下所墓地）調査位置図
（縮尺1/1000）

２　調査内容

ａ．調査の経緯（第29図）

高松中央インター周辺整備に伴い墓地造成工事が行われた。当工事について，造成範囲が一定範囲に及ぶことや，縄文時代晩期からの埋蔵文化財包蔵地であり弥生時代の周溝墓が複数確認された林・坊城遺跡にほぼ北接するため確認調査を行うこととした。

トレンチは調査対象とした範囲の西面に沿って，設定した。結果，現地表面の約0.9mで溝，ピットが検出され，また包含層より弥生土器（第31図84）が出土したため，事前調査を実施した。

ｂ．遺構の概要（第30図）

弥生時代前期と考えられる溝が検出されている他，調査地の北東部で，近世・近代期の埋甕及び土坑が見られた。

ｃ．基本土層（第30図）

①～④層までは現代の所産であり，⑤～⑧層までが近世～近代の堆積層である。⑨～⑪が自然堆積層と考えられ，この直上で遺構確認を行った。当遺構面では東半部を中心に礫層（⑩層）が広範囲に認められ微高地であることが分かると共に，直上部までを近・現代の堆積が覆うことから相応の削平された状況が想定される。

ｄ．遺構・遺物

SD01（第31図）

調査地西半部で確認した溝である。検出した標高は9.20～9.28m，底面は9.10～9.22ｍを測り北東方向へ下る。直線的にＮ－37°－Ｅ方向へと伸びるが，両端部は削平されている。検出幅は0.5～0.7m前後である。断面は船底形を呈し，埋土は黒褐色土の単層である。遺物は弥生時代前期と考えられる土器底部（第31図86）が出土した。所属時期は，出土遺物より弥生時代前期と考えられる。

SD02（第31図）

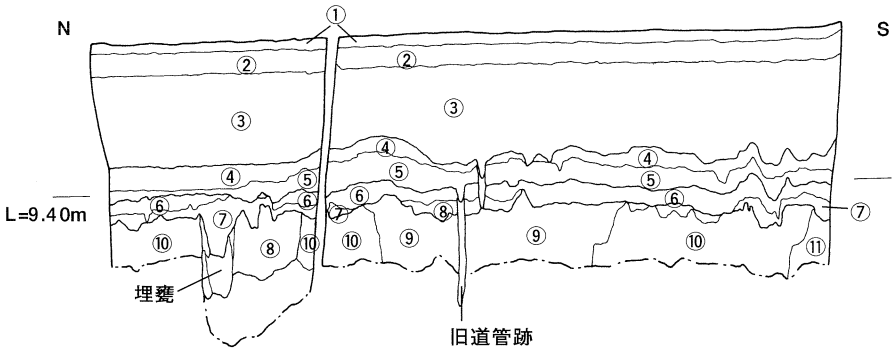
調査地西半部で確認した溝である。検出した標高は9.20m前後，底面は9.0m前後を測る。やや蛇行気味に北東へと伸びるが，東端部で削平されている。検出幅は0.4～0.5m前後である。断面はやや深いＵ字形を呈し，埋土は黒褐色土の単層である。遺物は弥生時代前期と考えられる壺底部（第31図85）他，若干量認められた。所属時期は，出土遺物より弥生時代前期と考えられる。

SD03（第31図）

調査地西半部で確認した溝である。検出した標高は9.25m前後，底面は9.18m前後を測る。直線的に北東へと伸びるが，東端部で削平されている。検出幅は0.3～0.5m前後である。断面はＵ字形 を呈し，埋土は黒褐色土の単層である。出土遺物はないが，埋土及び周辺部の状況から弥生時代のものと考えられる。

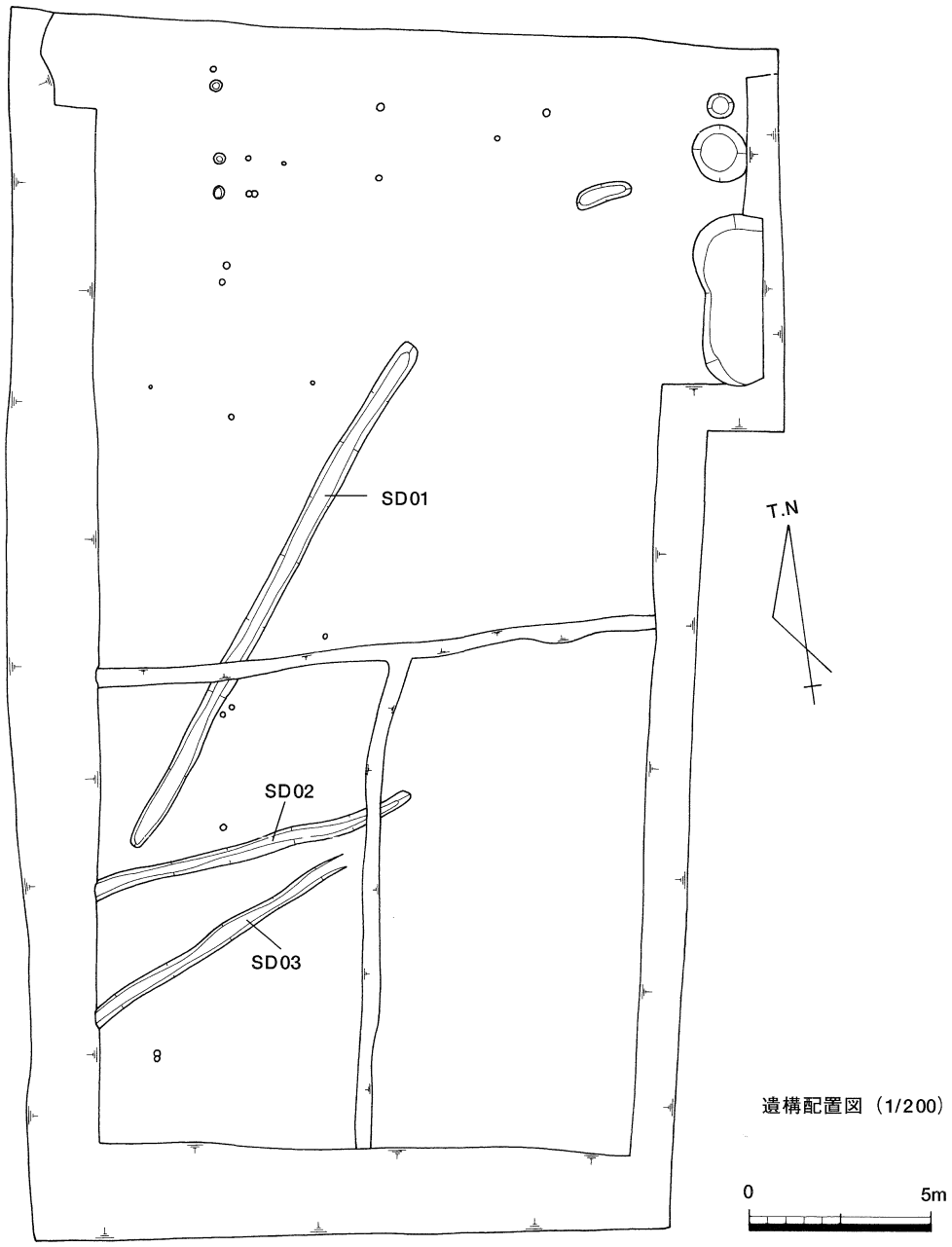
ｅ．まとめ

当地区は，林・坊城遺跡で認められている埋没河川の自然堤防上に位置する微高地と考えられる。調査地中央部を横断する近・現代の土管跡を境とし，かなりの削平を受けた状態であったが，弥生時代前期を中心とする遺構が当微高地上に存在することが確認された。



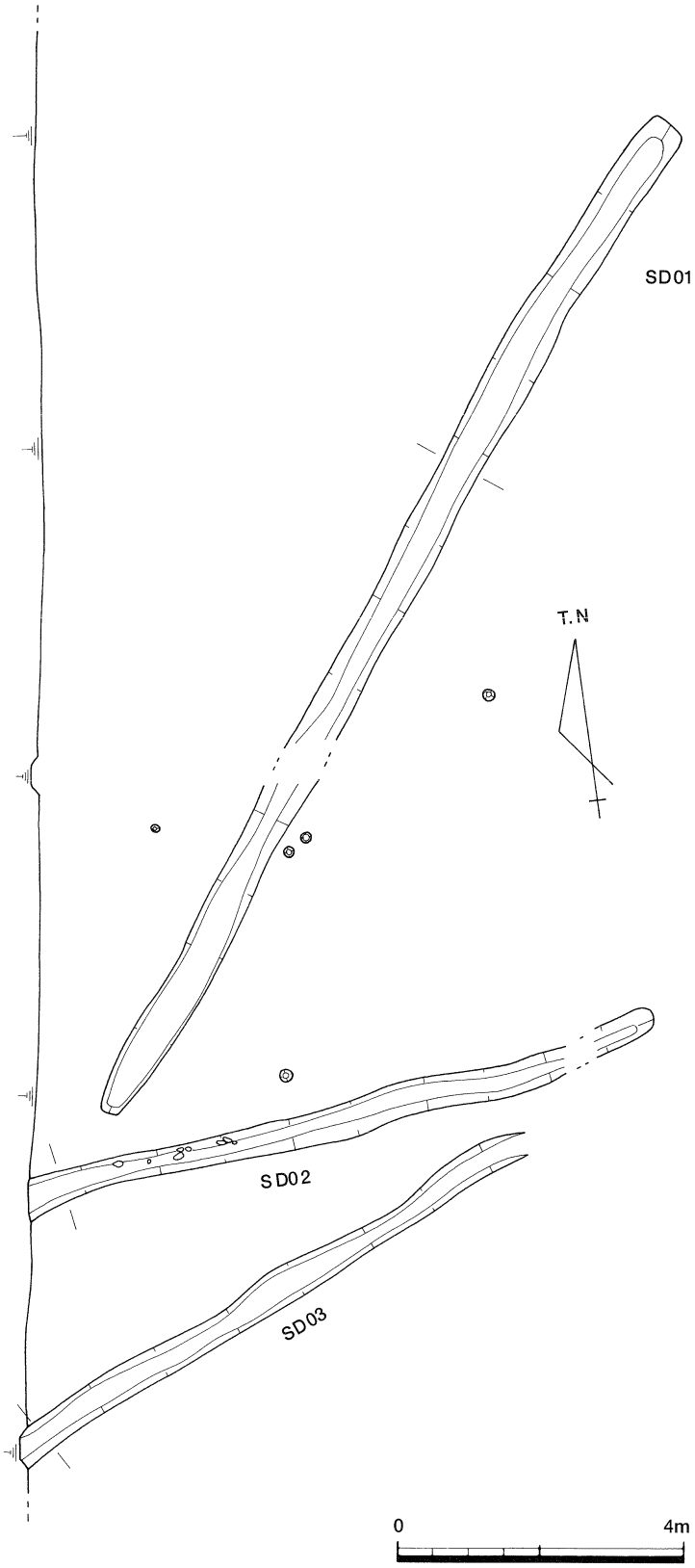
①：アスファルト舗装
②：バラス
③：花崗土
④：旧耕作土
⑤：2.5Y4/1 黄灰色シルト質極細砂
⑥：2.5Y6/2 灰黄色シルト質極細砂
⑦：10YR6/8 明黄褐色シルト質極細砂
⑧：10YR2/2 黒褐色シルト（5Y6/3オリーブ黄色シルト質極細砂を塊状に含む）ー近世・近代堆積物
⑨：2.5Y6/4 にぶい黄色シルト
⑩：5Y5/1 灰色礫
⑪：5Y4/1 灰色砂

調査地東壁土層図（高さ：1/40，長さ：1/320）

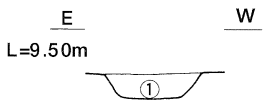


遺構配置図（1/200）

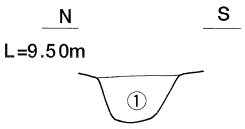
第30図　調査地土層図・遺構配置図



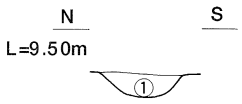
SD01・02・03 平面図（1/40）



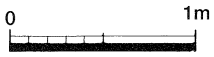
SD01 断面図（1/40）
①：10YR3/2 黒褐色シルト

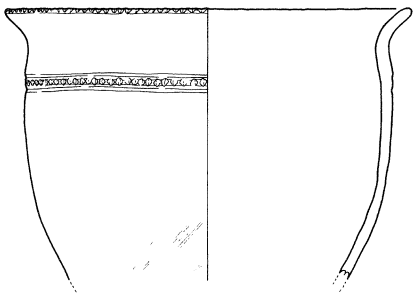


SD02 断面図（1/40）
①：7.5YR3/1 黒褐色シルト



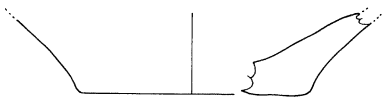
SD03 断面図（1/40）
①：7.5YR3/1 黒褐色シルト





84

試堀



85

SD02

86

SD01

第31図　遺構平・断面図，出土遺物実測図（縮尺1/4）

No.12　林下所遺跡（林町８号線　平成10年度調査）

１　調査概要

ａ．場　所　　林町

ｂ．期　間　　平成10年11月26日～30日

ｃ．面　積　　約400㎡

ｄ．担当者　　山元敏裕

２　調査内容

ａ．調査の経緯（第32図）

当路線については道路拡幅工事であるが，既に埋蔵文化財包蔵地となっている林下所遺跡に近接していることから工事立会を実施した。立会当初の段階で黒色の埋土をもつ溝を確認したことから，工事範囲全域で遺構確認を行った。遺構面精査の結果，複数の溝及び土坑が検出されたことから，工事を一時中断し調査を実施することとなった。

ｂ．遺構の概要（第33図）

調査地の北端部で弥生時代と考えられる溝SD01及び土坑SK01を確認した。その他，広範に認められる土坑及び溝は調査結果より近世のものである。

ｃ．基本土層

ほぼ現況の耕作土直下で地山と想定できる黄色系粘土層となり，この上面で遺構検出を行った。

ｄ．遺構・遺物

近世の遺構については，特筆すべきものが認められず本報告では略した。

SD01（第33図）

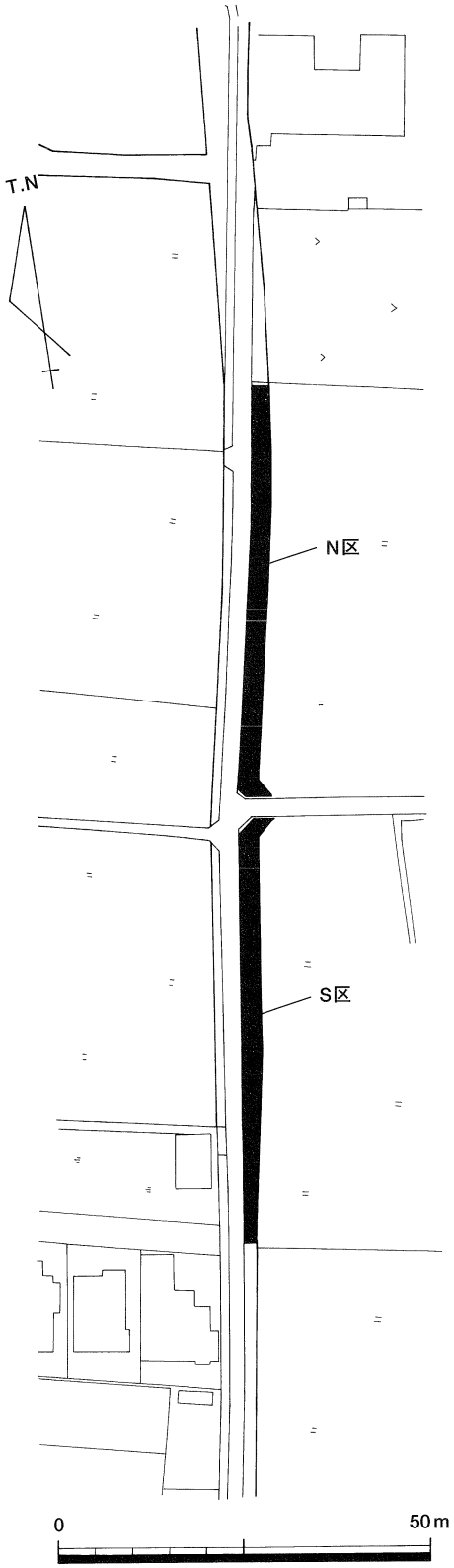
調査地（Ｎ区）北端部で確認した溝である。検出した標高は8.40ｍ前後，底面は8.00ｍ前後を測る。幅１.0～1.2ｍの規模を有し，北東方向へと伸びる。断面はＵ字形を呈し，埋土は３層である。遺物は細片ながら，弥生時代前期と考えられる土器片が出土している。

SK01（第33図）

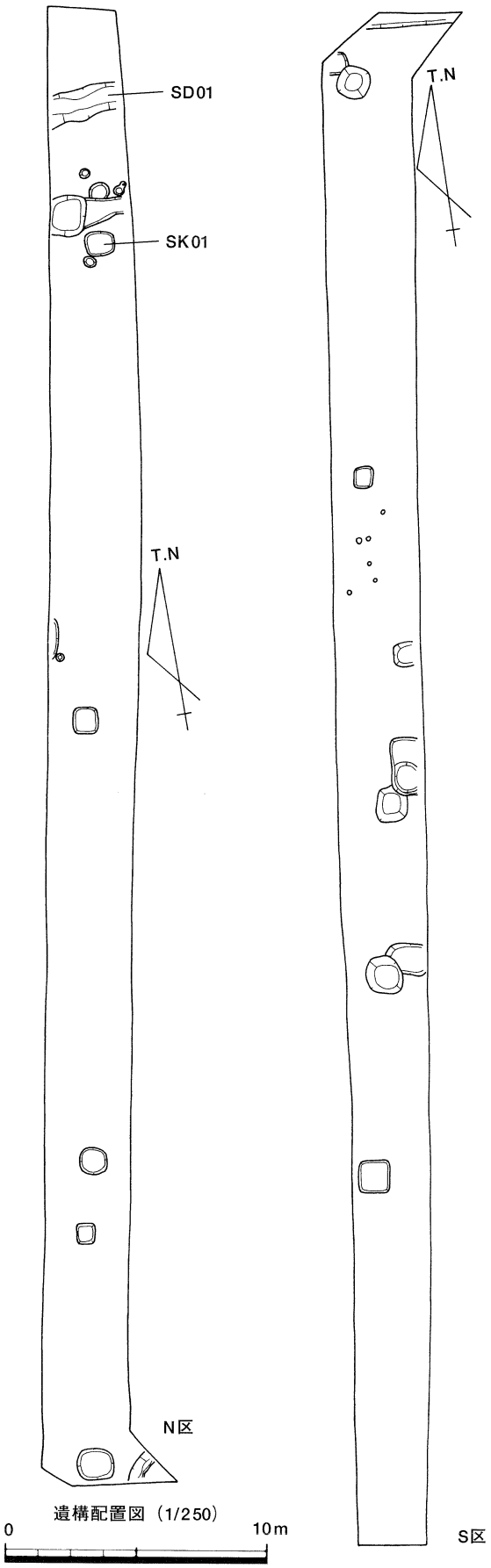
調査地（Ｎ区）北端部で確認した土抗である。検出した標高は8.38ｍ前後を測る。平面の形状はやや丸みを帯びた方形で，長軸方向に約1.0ｍ，短軸方向で約0.7ｍを測る。断面は浅い船底形を呈するが，底面に著しい凹凸面が認められる。埋土は２層である。遺物は認められなかったが，埋土はSD01と同様であることから，弥生時代前期を中心とした時期が考えられる。

ｅ．まとめ

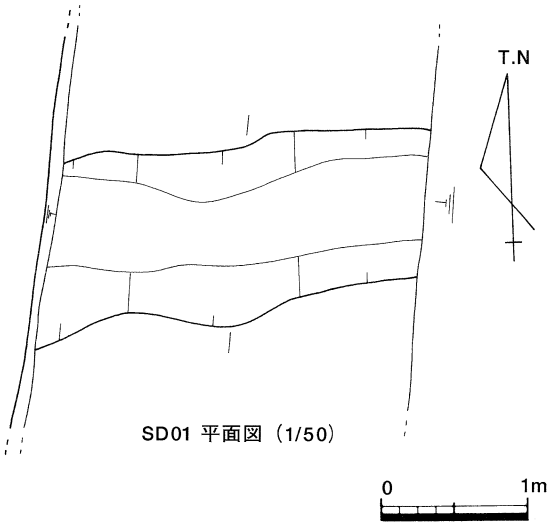
林下所墓地造成地区と同様に，弥生時代前期と考えられる遺構を確認することができた。溝は一定の規模をもち，同時期と想定される土坑も近接し確認されていることから，周辺部で遺構が所在する可能性が考えられる。



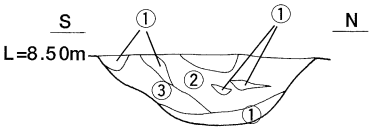
第32図　林下所遺跡（林下町８号線）
調査位置図（縮尺1/1000）



遺構配置図（1/250）

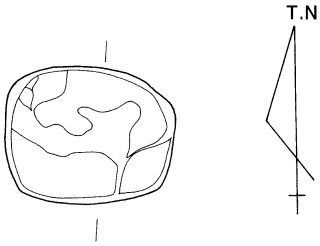


SD01 平面図（1/50）

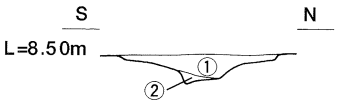


SD01 断面図

①：7.5YR3/1 黒褐色シルト質極細砂
②：2.5Y6/2 灰黄色シルト質極細砂
③：2.5Y6/2 暗灰黄色シルト質極細砂



SK01 平面図（1/50）



SK01 断面図（1/40）

①：2.5Y6/2 灰黄色極細砂
②：7.5YR4/1 褐灰色シルト質極細砂

第33図　遺構平・断面図

No.13　林下所遺跡

（林町65号線　平成11年度調査）

1　調査概要

a．場　所　　林町

b．期　間　　平成11年12月3日～22日

c．面　積　　約308㎡

d．担当者　　小川賢

2　調査内容

a．調査の経緯（第34図）

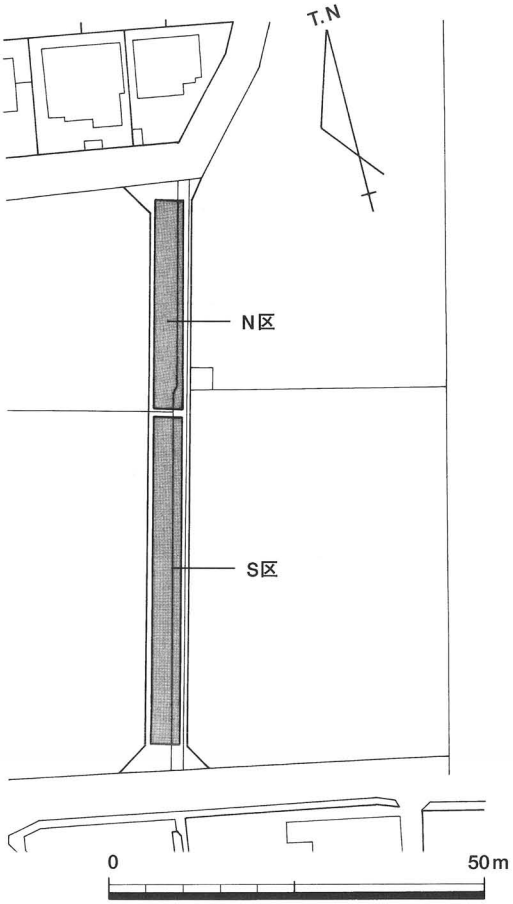
調査地周辺部において，当年度までに既に３地点で調査を行っている。当路線についても，ほぼ新規となる工事であるため確認調査を実施した。この結果，溝，柱穴等の遺構を確認するとともに，弥生時代から古代にかけての遺物が認められたため，調査を実施することになった。

b．遺構の概要（第36図）

調査地は，現状で中央部の東西方向の畦を境に高低差があり，これにより以南をＳ区，以北をＮ区としている。Ｓ区では溝が密集し，Ｓ区の北部では，調査地を東西方向に横断する落ち込み状の包含層があり，この下位でSD03～06を検出している。一方，Ｎ区では，掘立柱建物（SB01）及び北東方向に蛇行する溝（SD07）が検出されている。

c．基本土層（第37・38図）

Ｓ区では，現況の耕作土である①・②層のほぼ直下で地山④・⑤層となり，間層に近世期の堆積層③・⑪層が堆積する。北部では，弥生時代～古代の遺物を包含する落ち込み（⑩層）が認められた。Ｎ区では④・⑤層が北方向に下がり，やや砂質となる⑫・⑭層が被覆する。遺構は④層及び⑭層上面で検出した。



第34図　林下所遺跡（林下町65号線）
平成11年度調査位置図（縮尺1/1000）

d．遺構・遺物

SD01（第36図）

Ｓ区中央部を南北方向に走る溝である。検出幅は0.5m前後を測り，Ｎ－11°－Ｅ前後の方位を示す。遺構の切り合い関係で，SD02・SD03，SE01より後出する。出土遺物は，近世と推定される土師質土器の細片が認められた。

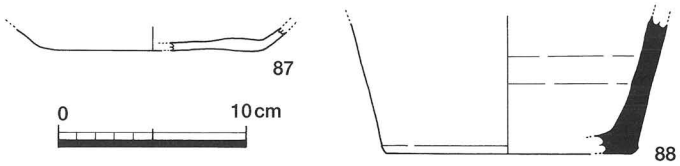
SD02（第36図）

Ｓ区南部で確認した溝である。検出幅は約0.9mを測り，北東方向にほぼ直線的に伸びる。埋土は暗赤褐色土の単層である。出土遺物はなく時期不明だが，埋土の特徴及び遺構の方向より弥生時代～古墳時代の時期が推定される。

SD03（第36図）

Ｓ区南部で確認した溝である。検出幅は約0.2mを測り，Ｎ－６°－Ｅ前後の方位を示す。Ｓ区北部では包含層の下位遺構として検出しているが，南部の上位面では東肩部が削平されている。出土遺物より古代ものと考えられる。

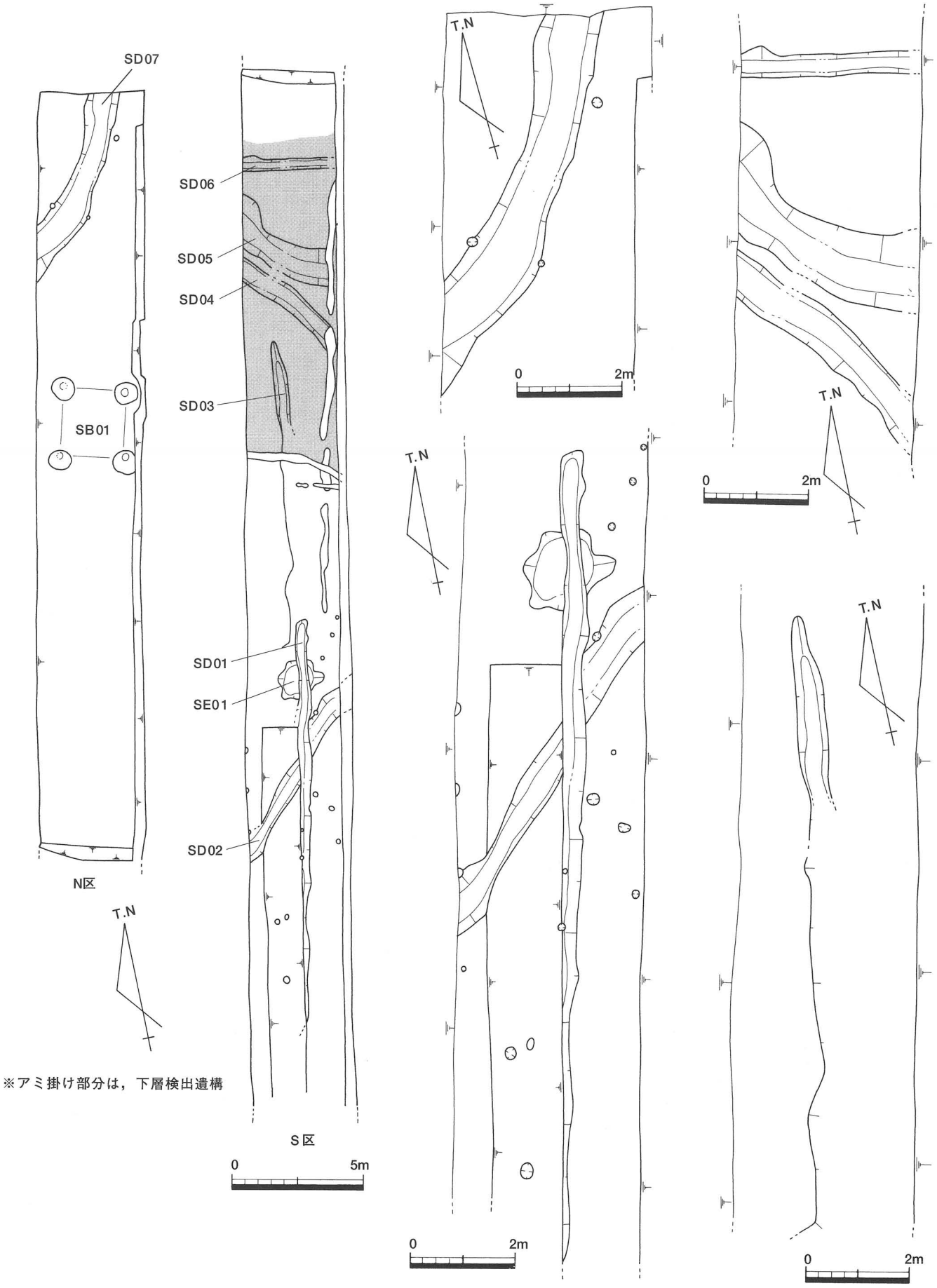
出土遺物（第35図）のうち，87は土師器坏の底部。88は須恵器壺の底部である。



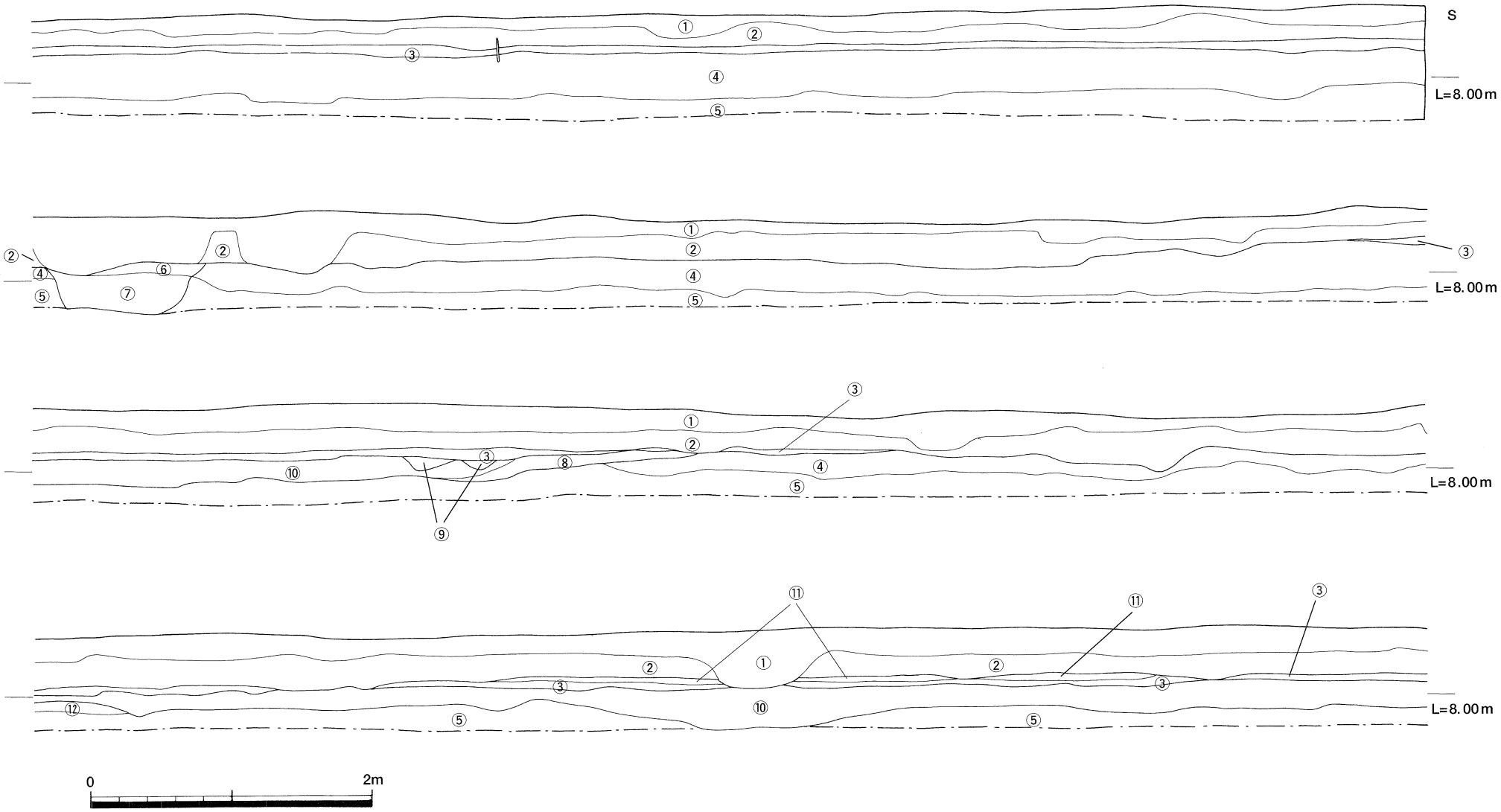
第35図　SD03 出土遺物実測図（縮尺1/4）

SD04（第36図）

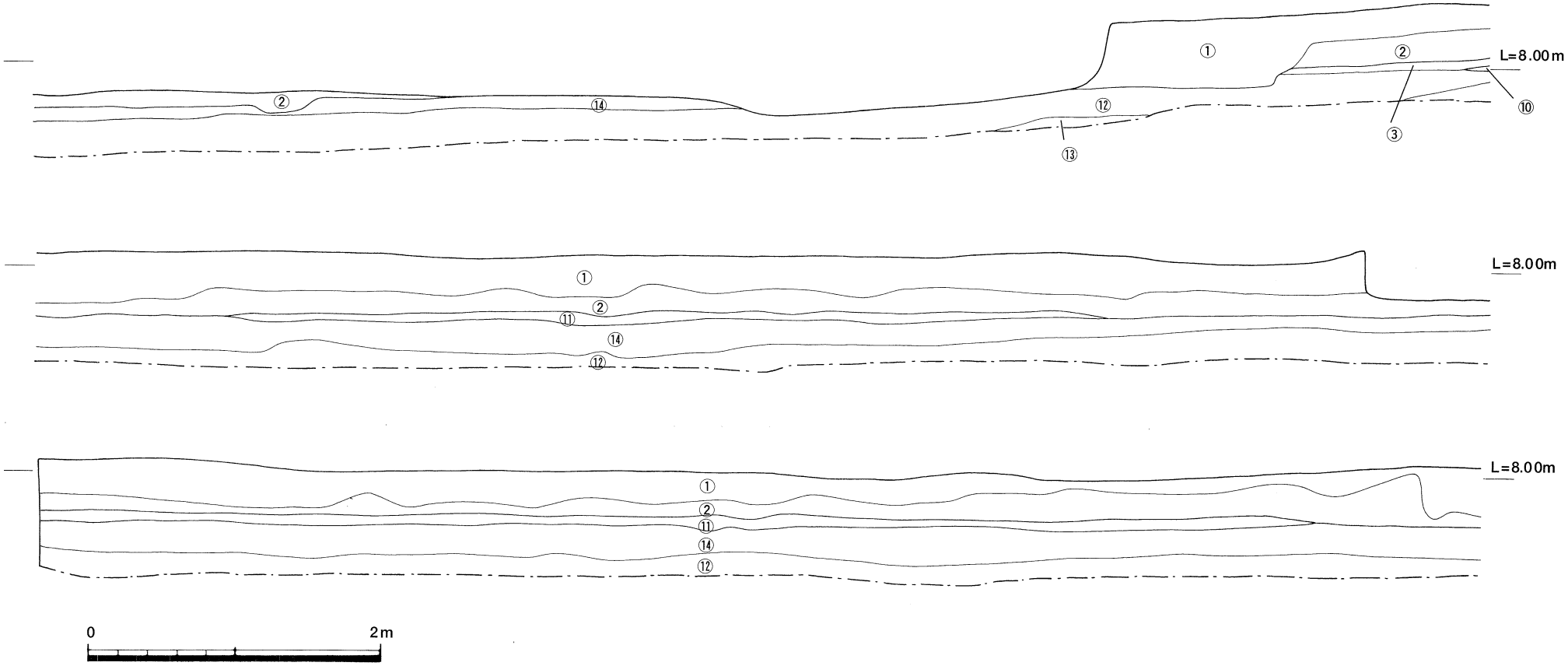
Ｓ区北部，包含層の下位で確認した溝である。検出幅は約0.7mを測り，南東方向へ走る。出土遺物がなく時期不明だが，検出状況及び遺構の示す方向よりSD05と同様の時期が推定される。



第36図　遺構配置図（縮尺1/200）・遺構平面図（縮尺1/100）



第37図　調査地東壁土層図①（縮尺1/40）



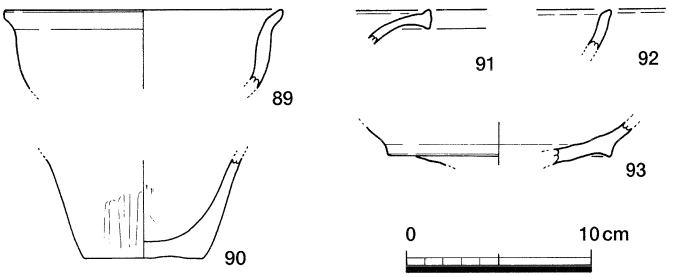
①：表土
②：盛土
③：10YR7/6 明黄褐色細砂（灰白色細砂まじる）
④：10YR7/3 にぶい黄橙色微砂粘質土
⑤：10YR7/6 明黄褐色粘土
⑥：5YR3/4 暗赤褐色細砂粘質土
⑦：5YR3/3 暗赤褐色細砂粘質土
⑧：5YR3/2 暗赤褐色細砂粘質土
⑨：2.5YR7/1 明赤灰色細砂
⑩：2.5YR3/3 明赤褐色微砂粘質土（灰白色微砂をブロック状に含む）
⑪：10YR7/4 にぶい黄橙色細砂
⑫：10YR5/6 黄褐色微砂粘質土
⑬：10YR7/6 明黄褐色微砂粘質土
⑭：10YR7/6 明黄褐色細砂

第38図　調査地東壁土層図②（縮尺1/40）

SD05（第36図）

S区北部，包含層の下位で確認した溝である。検出幅は1.0～1.5mを測り，南東方向へ走る。出土遺物より，弥生時代後期～古墳時代前期の時期が考えられる。

出土遺物（第39図）のうち，89は弥生土器鉢である。90は弥生土器甕底部である。93は土師器高坏である。坏部の外面下端部に突出部が認められる。



第39図　SD05 出土遺物実測図（縮尺1/4）

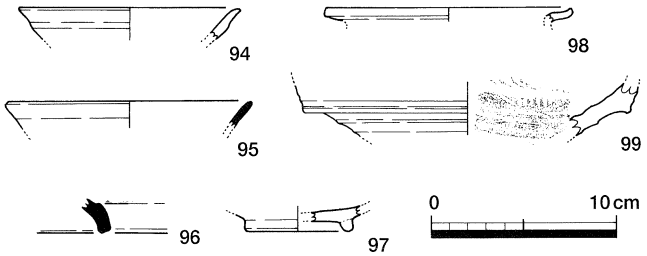
SD06（第36図）

S区北部，包含層の下位で確認した溝である。検出幅は0.5m前後を測り，N－97°－E前後の方位を示す。遺物が出土していないため所属時期は不明だが，SD03とほぼ直交する方位をとり，また同様の検出状況から古代のものと考えられる。

SD07（第36図）

N区北端部で確認した溝状遺構である。検出幅は1.0～1.3mを測り，北東方向へ走る。遺構が示す方向では，古墳時代以前の時期が想定されるが，出土遺物では近世の所産と考えられる。

出土遺物（第40図）のうち，94は肥前系陶器皿である。95・96は須恵器。97は黒色土器椀である。98は陶器口縁部片で，99は備前擂鉢である。



第40図　SD07 出土遺物実測図（縮尺1/4）

SE01（第36図）

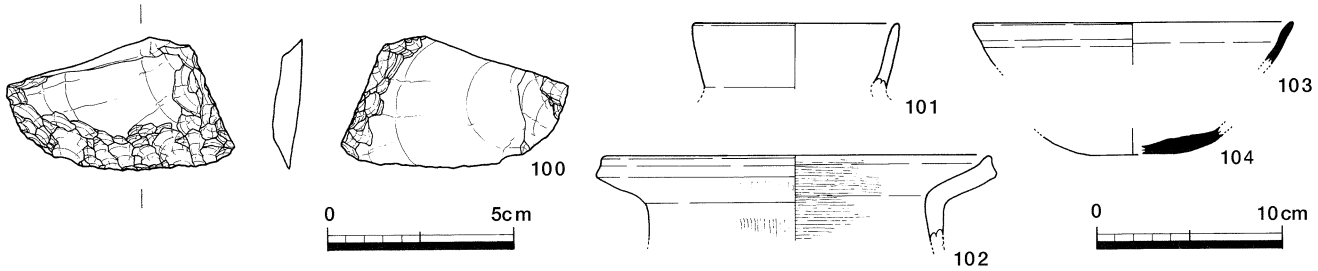
S区南部で確認された井戸である。1.5m前後の範囲で，歪な不整形に検出されている。埋土は砂礫で充填されていた。出土遺物はなく，SD01に先行することから近世以前のものと考えられる。

SB01（第36・42図）

N区北端部で確認した掘立柱建物である。1×1間で確認しているが，調査地外となる東西方向に桁行として伸びる可能性がある。柱間距離は東西方向で2.3m，南北方向で2.5mを測る。主軸は，N－107°－Eの方位を示す。また平・断面の観察では，径25cm程の柱痕が認められている。出土遺物はなく詳細な時期は不明だが，主軸方位が古代及び近世のものと異なり，弥生～古墳時代を中心とした時期が考えられる。

遺構外出土遺物（第41図）

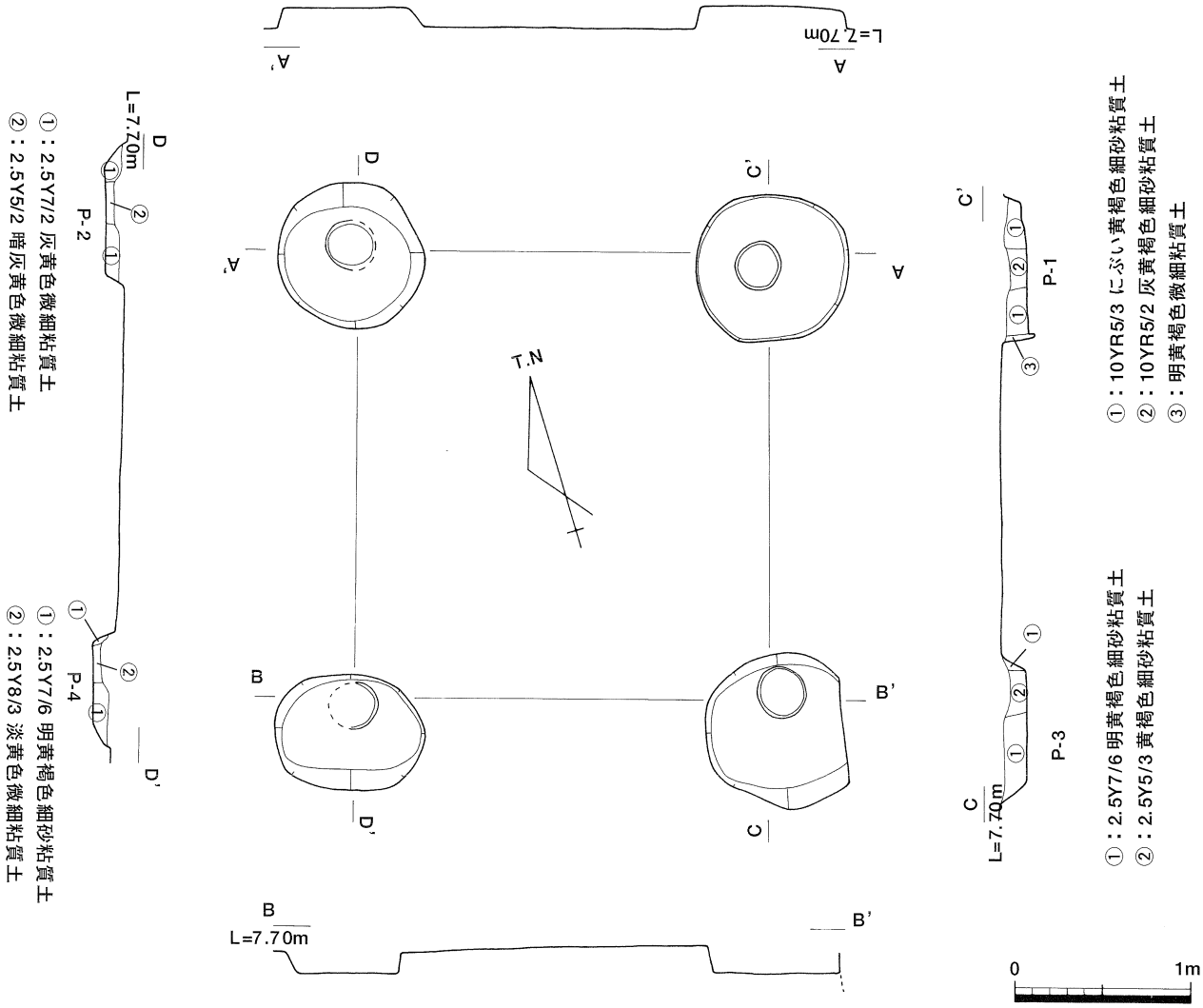
100はサヌカイト製の刃器である。101は土師器壺である。102は土師器甕である。103・104は須恵器。101・102・103が⑩層より出土している。



第41図　遺構外出土遺物実測図（縮尺1/4）

e．まとめ

弥生時代～古代にかけての遺構・遺物が確認できた。調査地の中央部を境に微高地が北方向にやや下り，その末端部に東西方向となる流路状の落ち込みが認められた。この落ち込みは当該期間において存続していたと考えられ，溝状遺構が集中している。また一定規模の柱穴をもつSB01は，平成14年度調査となった林下所・木太今村上所遺跡との関連が想定される。

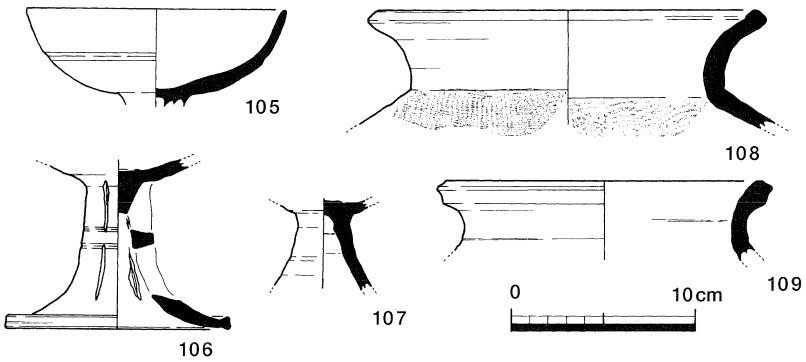


第42図　SB01 平・断面図（縮尺1/40）

No.14 林下所遺跡（林町60号線　平成10年度工事立会）

1　調査概要

a．場　所　　林町
b．期　間　　平成11年1月27日
c．面　積　　約200㎡
d．担当者　　小川賢



第43図　工事立会時出土遺物実測図（縮尺1/4）

2　調査内容（第44図）

既存の道路拡幅工事であったが，同路線は平成８年度に林下所遺跡として調査が行われているため，当年度も工事立会を実施し，土坑を確認した。遺構は撹乱で大半を消失していたが，まとまって須恵器が出土した。古墳時代終末期のものと考えられ，当該期の集落である林下所・木太今村上所遺跡に属するものと考えられる。

No.15 林下所・木太今村上所遺跡
（林町８号線　平成14年度調査）

１　調査概要

ａ．場　所　　林町・木太町

ｂ．期　間　　平成14年11月25日
　　～12月27日

ｃ．面　積　　約600㎡

ｄ．担当者　　小川賢

２　調査内容

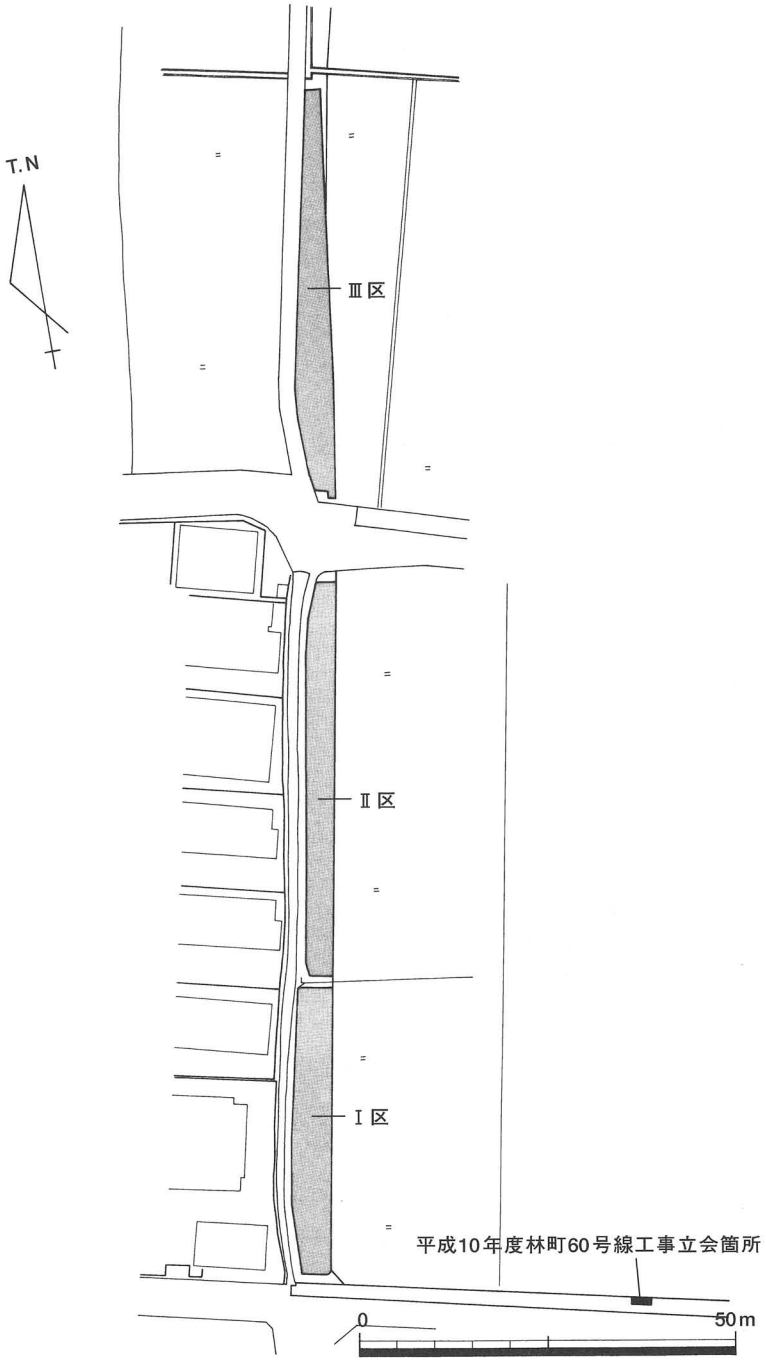
ａ．調査の経緯（第44図）

当路線はほぼ新規工事であり，林下所遺跡（林町60号線・65号線）に近接するため，確認調査を行った。その結果，溝・畦畔等の遺構を確認するとともに須恵器・土師器が出土したため，調査を実施した。

ｂ．遺構の概要（第45図）

調査地は現有の畦畔・道路により３分割され，南からⅠ～Ⅲ区を設定した。Ⅰ区では上層部と下層部に分かれ，上層の遺構では水田と考えられる大・小畦畔を検出している。下層の遺構としてSD01，SK01～03が認められる。Ⅱ区では，１面のみで遺構を確認している。掘立柱建物SB01，これを巡るSD01・SD02等の溝や土坑SK01～03を検出した。Ⅲ区は，現状の地割と合致するSD01～04があり，これに先行する遺構として掘立柱建物SB01，及びこれを巡る溝状遺構SD10～14や東西方向の溝SD05等を検出した。

主要遺構の所属時期別では，弥生時代後期（Ⅰ区SK03，Ⅱ区SK01），古墳時代後期～終末期（Ⅰ区SD01，Ⅲ区SB01，SD05・SD07等），古代～近世（Ⅰ区畦畔，Ⅲ区SD01）が認められる。また近世以後の所産として，Ⅱ・Ⅲ区で認められる円形状の土坑及び井戸がある。



第44図　林下所・木太今村上所遺跡（林町８号線）
調査位置図（縮尺1/1000）

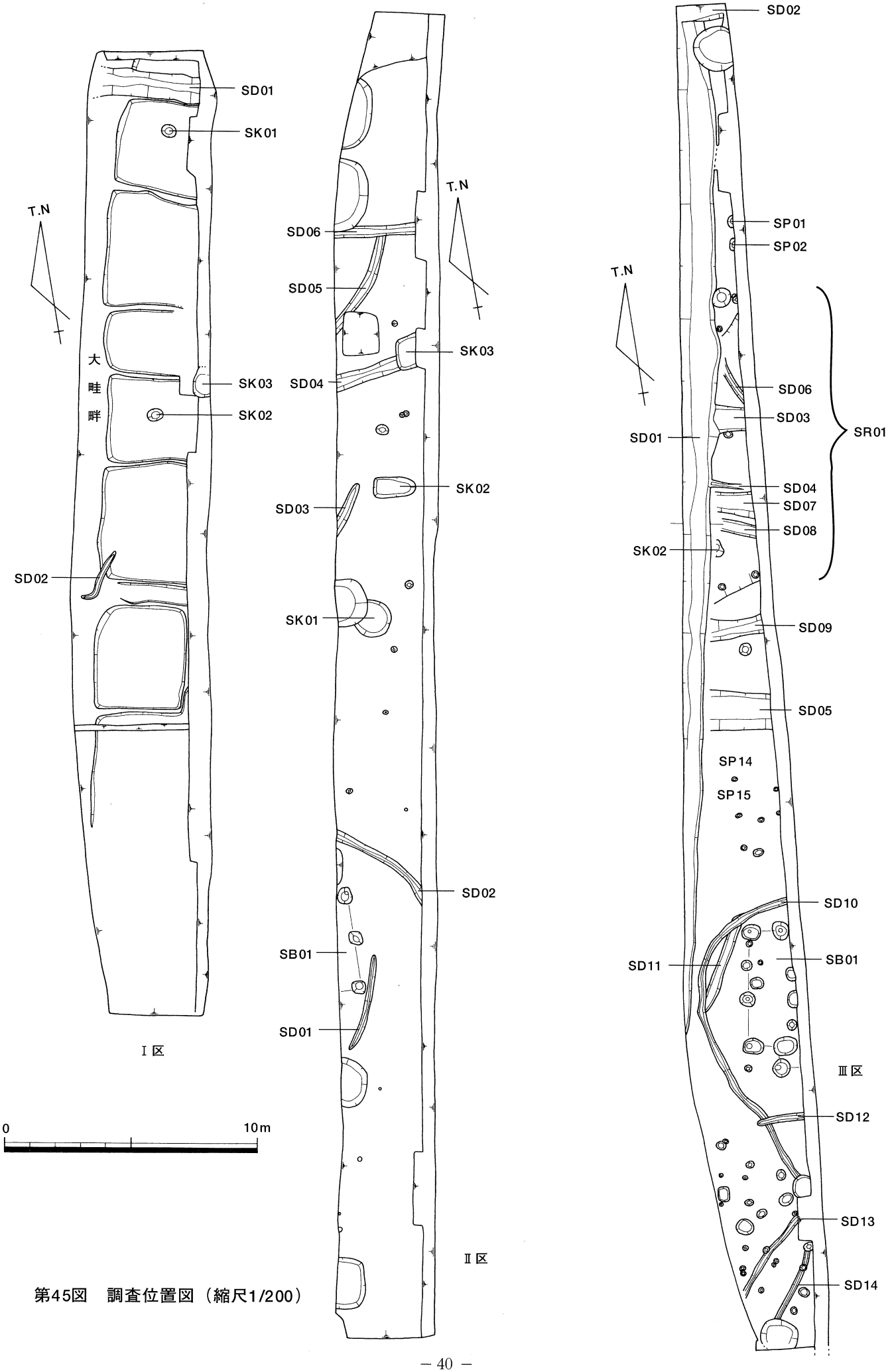
ｃ．基本土層（第46図）

調査地は現況で北方向に下がる地形で，調査区毎に現有の耕作土～地山とした自然層との間で堆積状況が異なる。Ⅰ区では自然層の上位に土壌化した黒褐色土①が水平堆積し，畦が検出されたため水田層と想定し，これを境に上層・下層遺構とした。Ⅱ区では現況の耕作土直下が自然層となり，Ⅰ区で認められた土壌層は，削平を受けたものと考えられる。Ⅲ区は南部では耕作土直下が自然層となり，中央部に黒褐色土②が堆積する流路状の落ち込みが認められ，以北が砂層となっている。確認調査でも調査地の北側に厚い砂礫層が認められており，埋没河川の存在が想定される。この流路の南岸部にSB01が位置し，流路の埋没時期にSD05・SD07～09の東西方向の溝が認められる。

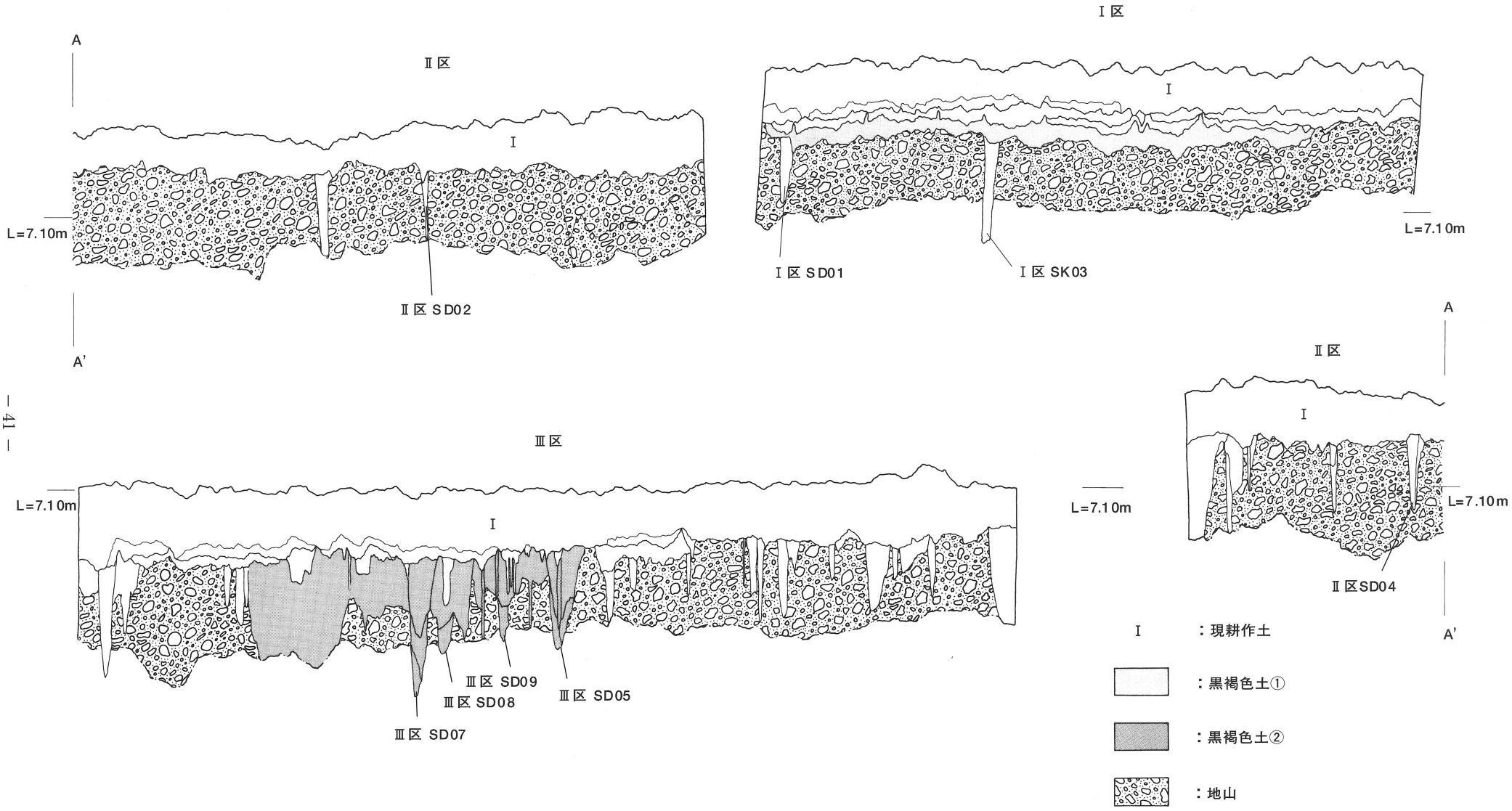
ｄ．遺構・遺物

畦畔状遺構（第53図）

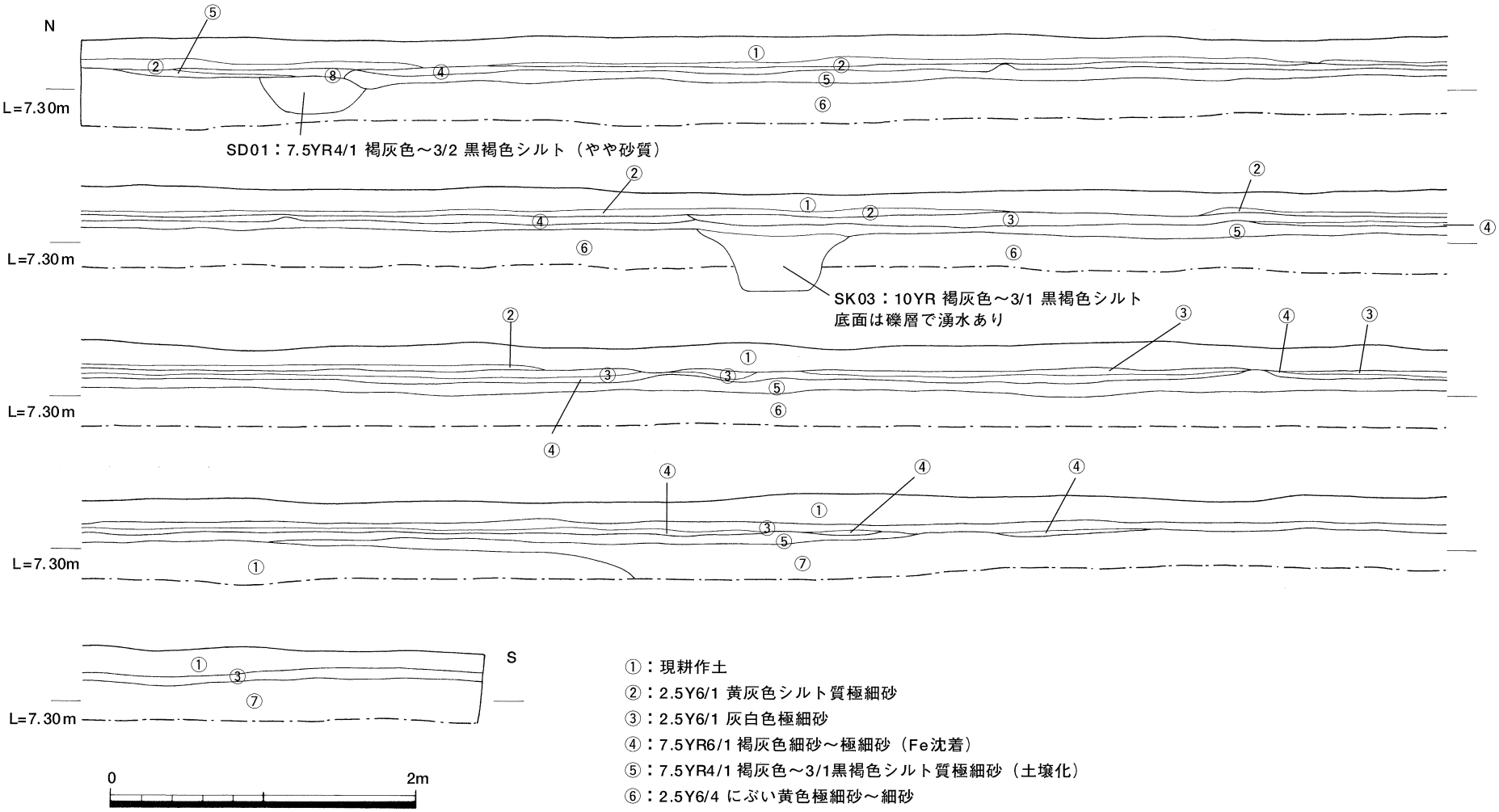
Ⅰ区で確認した遺構である。南北方向の大畦畔及び，東西方向の小畦畔を検出した。大畦畔はほぼ表土の直下標高7.44～7.47ｍで認められた。検出長は約30ｍで，主軸方位は現状の地割にほぼ合致するＮ－11°－Ｅを示す。



第45図　調査位置図（縮尺1/200）

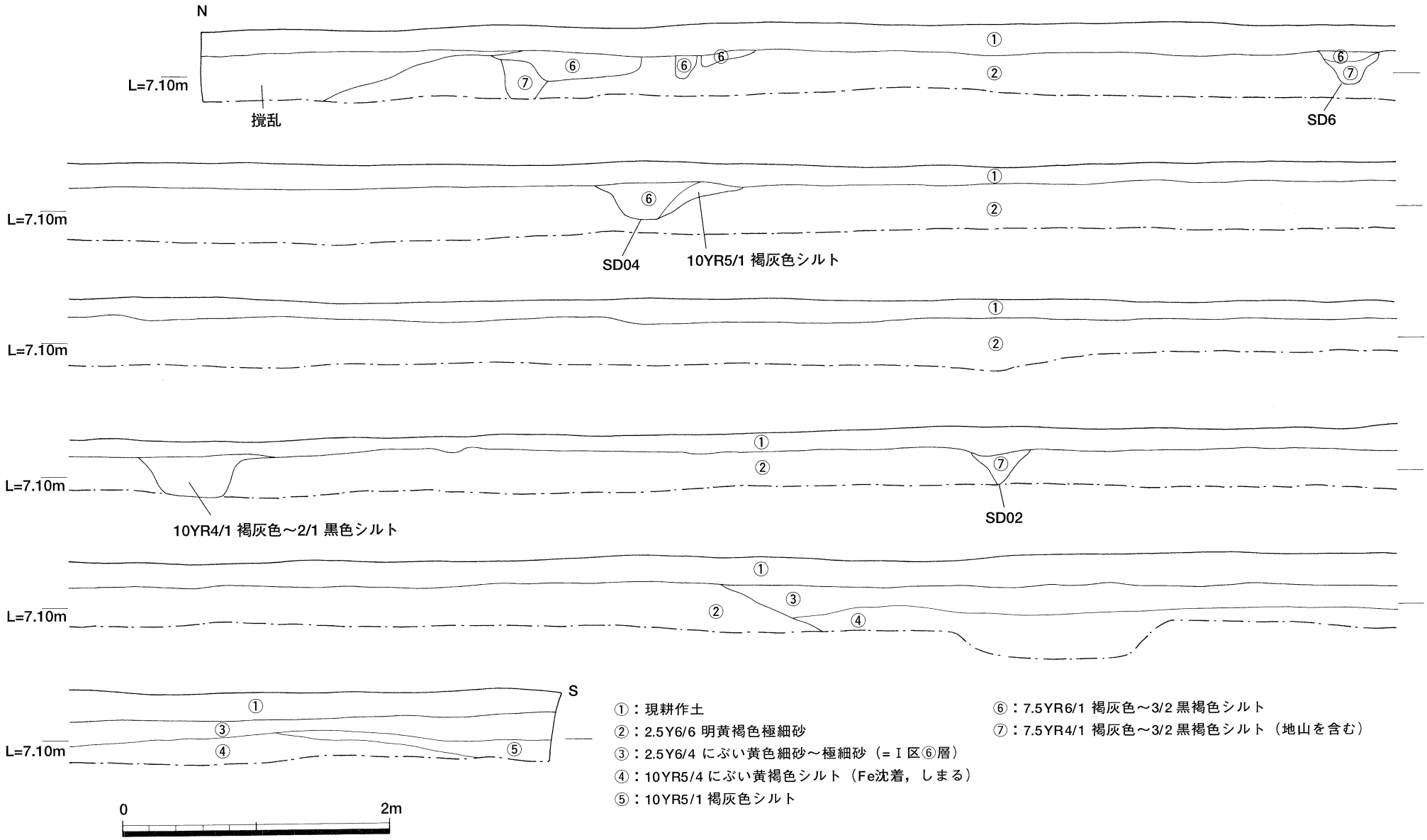


第46図　調査地東壁基本土層図②（縮尺 高さ１/40・長さ1/320）



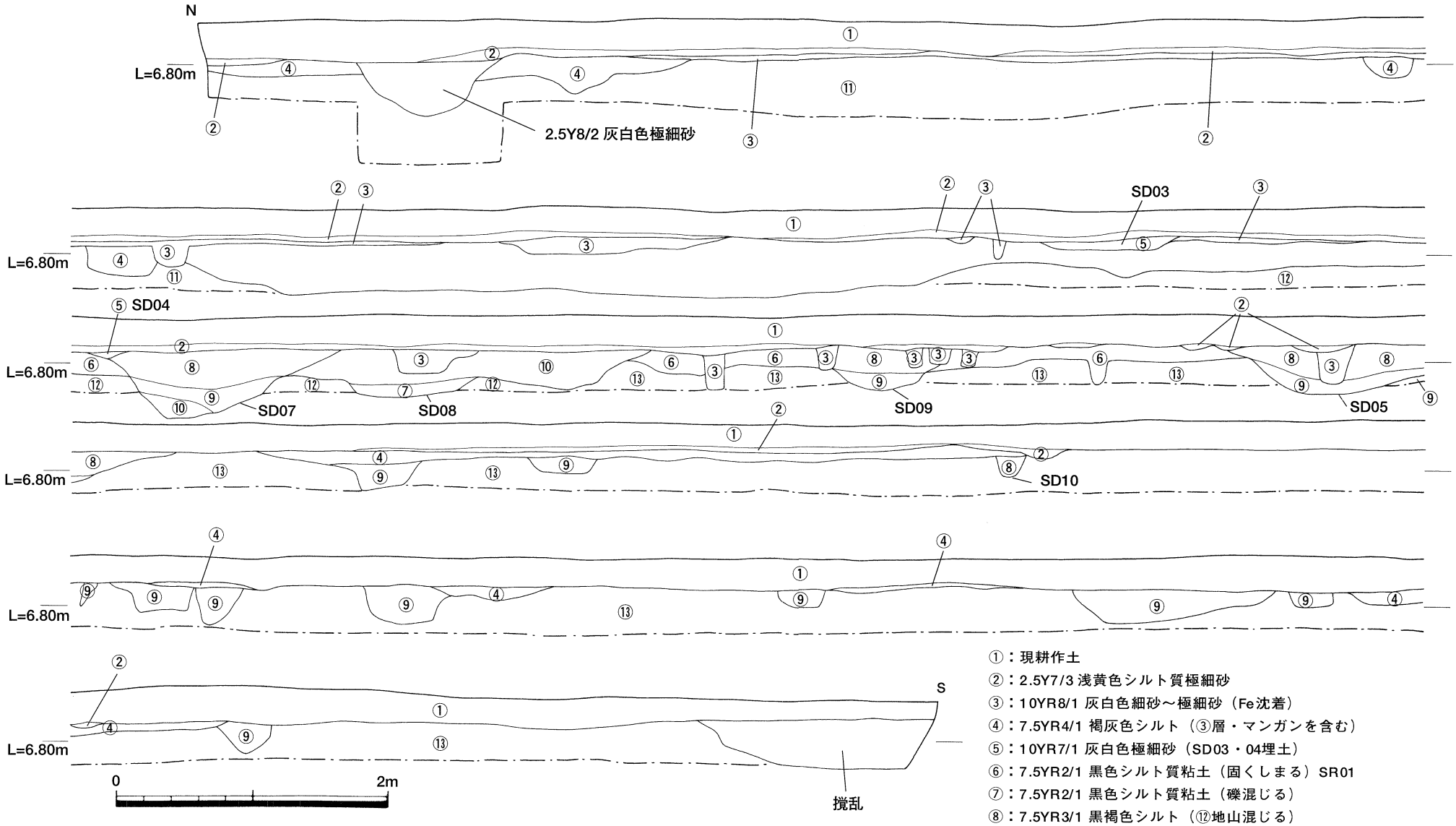
①：現耕作土
②：2.5Y6/1 黄灰色シルト質極細砂
③：2.5Y6/1 灰白色極細砂
④：7.5YR6/1 褐灰色細砂～極細砂（Fe沈着）
⑤：7.5YR4/1 褐灰色～3/1黒褐色シルト質極細砂（土壌化）
⑥：2.5Y6/4 にぶい黄色極細砂～細砂
⑦：2.5Y6/2 灰黄色細砂～粗砂（しまらない）

第47図　Ⅰ区東壁土層図（縮尺1/40）



①：現耕作土
②：2.5Y6/6 明黄褐色極細砂
③：2.5Y6/4 にぶい黄色細砂～極細砂（＝Ⅰ区⑥層）
④：10YR5/4 にぶい黄褐色シルト（Fe沈着，しまる）
⑤：10YR5/1 褐灰色シルト
⑥：7.5YR6/1 褐灰色～3/2 黒褐色シルト
⑦：7.5YR4/1 褐灰色～3/2 黒褐色シルト（地山を含む）

第48図　Ⅱ区東壁土層図（縮尺1/40）



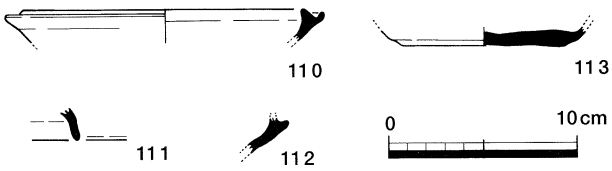
①：現耕作土
②：2.5Y7/3 浅黄色シルト質極細砂
③：10YR8/1 灰白色細砂～極細砂（Fe沈着）
④：7.5YR4/1 褐灰色シルト（③層・マンガンを含む）
⑤：10YR7/1 灰白色極細砂（SD03・04埋土）
⑥：7.5YR2/1 黒色シルト質粘土（固くしまる）SR01
⑦：7.5YR2/1 黒色シルト質粘土（礫混じる）
⑧：7.5YR3/1 黒褐色シルト（⑫地山混じる）
⑨：7.5YR4/1 褐灰色～3/1黒褐色砂混シルト
⑩：7.5YR3/1 黒褐色シルト質粘土
⑪：7.5YR7/1 明褐灰色細砂
⑫：2.5Y6/6 明黄褐色シルト
⑬：5Y6/4 オリーブ黄色細砂

第49図　Ⅲ区東壁土層図（縮尺1/40）

検出幅は最大で1.2mを測るが，調査地外に接するため規模は不明である。大畦畔の構成土は固く締まる黒色土だが盛土した様には見られず下層に相当する弥生土器の包含層（第54図）と同一であることから，むしろ耕作から取り残された部分と考えられる。小畦畔は地山⑥を含んだ締まった土が，土壌化層⑤層より数cm程度だが隆起したもので，検出幅は約15cmを測る。区画５・６間の畔は２つの小畦畔状に見られるが，中央部が足跡等により窪むもので元来幅１m程の規模をもつと考えられる。また下層遺構に相当するSD01上面も大畦畔同様，固く締まって認められ，埋没後幅１m程の畦となった可能性も考えられる。これらは小区画の水田と考えられるが，面積が推定できるものは区画６のみで約14㎡を測る。水田面は地形に沿い緩やかに北東方向へ下がり，区画５の南西部に同方向を向く取水口SD02が付けられている。所属時期は被覆する④層が薄いため詳細は不明だが，遺構面から古代以降で近世までのものと考えられる。

５層出土遺物（第50図）

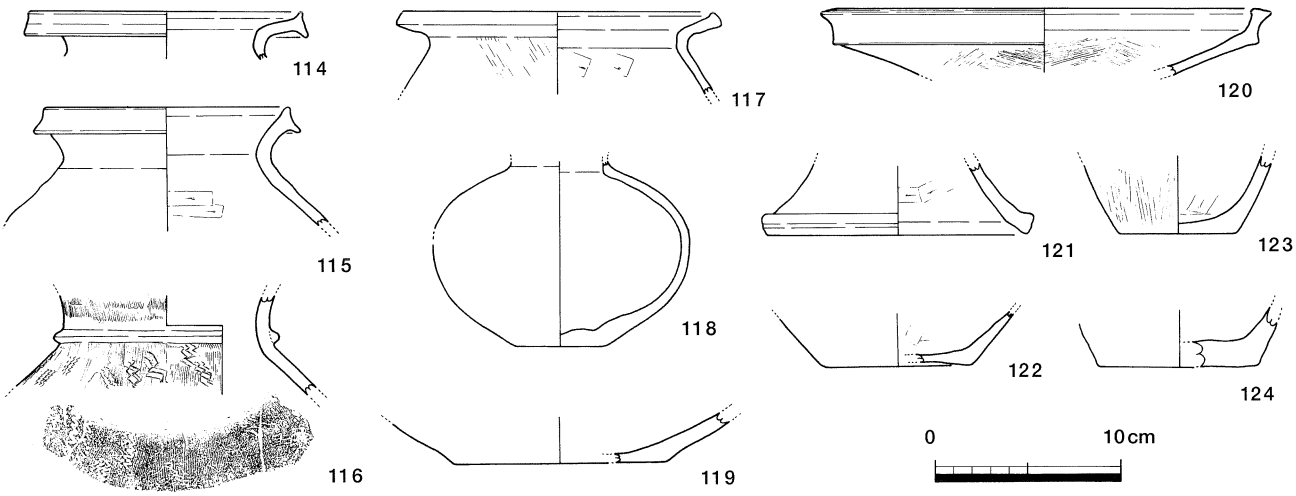
110～113は須恵器坏身及び蓋である。110は口縁部の立ち上がりが短く，受け部の退化が著しい。113の底面は，平坦となっている。



第50図　Ⅰ区⑤層出土遺物実測図（縮尺１/4）

大畦畔出土遺物（第51図）

114～124は弥生土器で，概ね後期初頭の所産と考えられる。114・115は壺で，口縁端部を上下方向に拡張する。116は頸～体部片で壺と考えられる。体部との境に貼付けの突帯を巡らし，ハケ調整後体部上半部に櫛描き波状文を縦位に施す。117は甕で，内面は体部上端までケズリ調整を行う。118は細頸壺体部。119は壺底部。120は高坏。口縁端部を内外方に拡張し，退化した凹線を施す。121は脚部で，端部がやや開き，丸みを帯びた端面に退化した凹線を施す。122～124は甕の底部である。

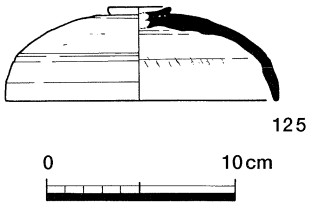


第51図　Ⅰ区大畦畔出土遺物実測図（縮尺１/4）

Ⅰ区SD02（第53図）

Ⅰ区大畦畔上に開削された溝である。検出した標高は7.40～7.45m前後を測り，底面は7.38～7.40mを測る。検出幅は0.2m前後である。断面は船底形で，埋土は灰白色砂層の単層である。区画５へと流れ込む砂粒の痕跡が残っていた。

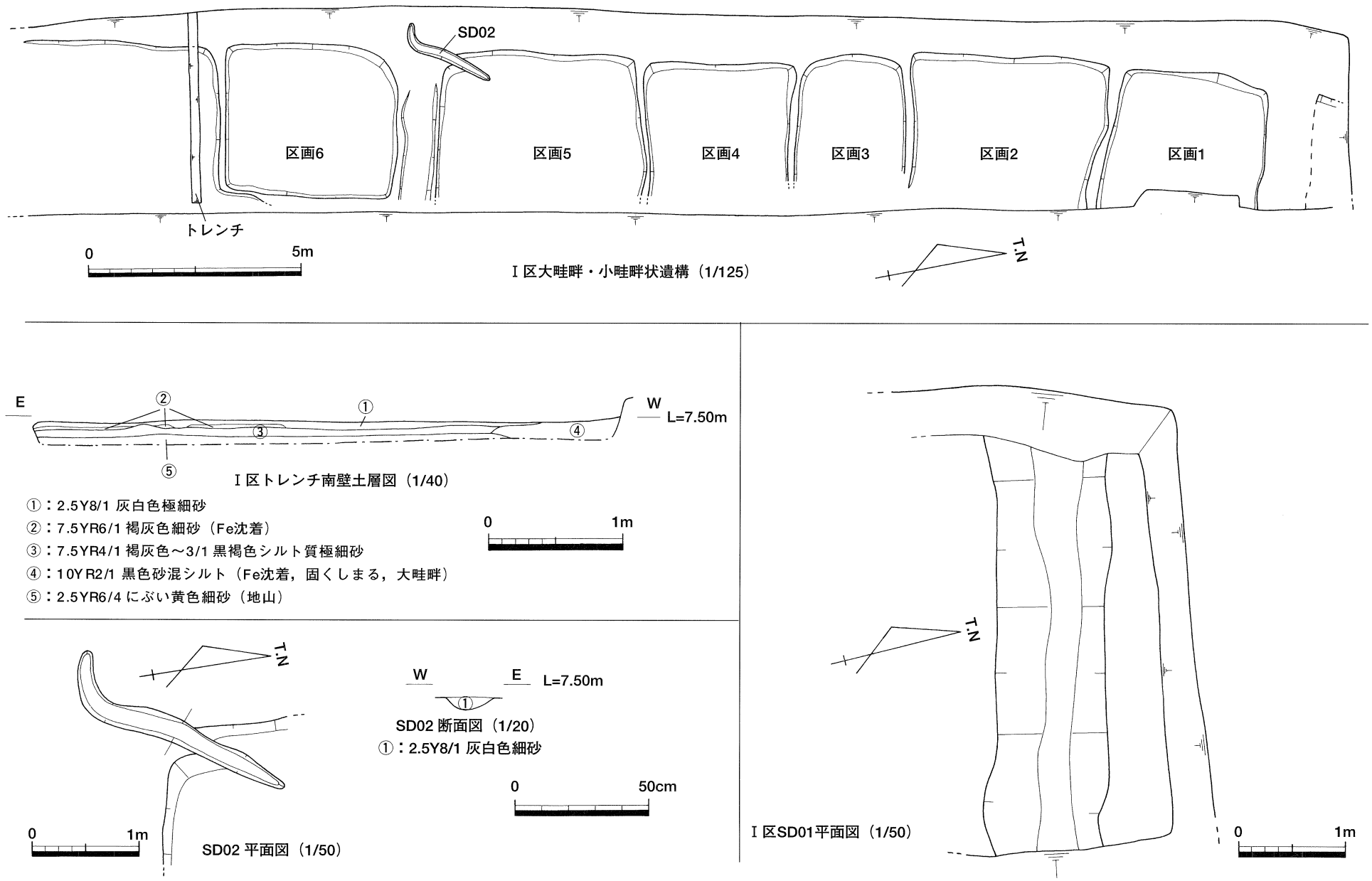
出土遺物（第52図）は，125の有蓋高坏蓋である。天井部に器高の1/2程回転ヘラケズリが認められる。



第52図　Ⅰ区 SD02 出土遺物実測図（縮尺１/4）

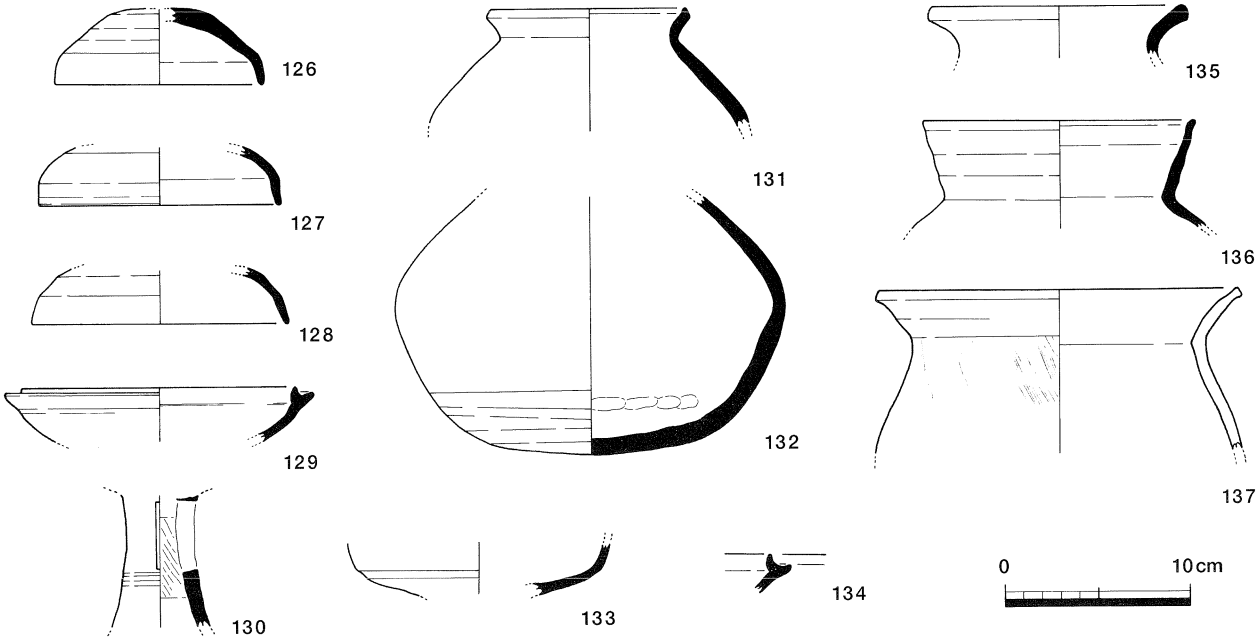
Ⅰ区SD0Ⅰ（第47・53図）

Ⅰ区北端部で確認した溝である。検出した標高は7.40m前後，底面は7.05～7.10m前後を測り，西方が深くなっている。N－102°－E前後の方位を示す。断面は船底形を呈し，埋土はやや砂質の褐灰色～黒褐色シルト単層である。遺物が比較的まとまって出土している。出土遺物より，古墳時代終末期の埋没時期が考えられる。



第53図　Ⅰ区東遺構平・断面図

出土遺物（第54図）のうち，126～136は須恵器である。126～128は蓋である。126は小振りのもので，天井部が深く口縁部で屈曲する。天井部外面に器高の1/3程回転ヘラケズリが認められる。129は坏身で，口縁端部の立ち上がりは低い。130は高坏脚部。中位に沈線を施し，その上方にスカシが認められる。131・132・135・136は壺。131は頸部で「く」に屈曲し，口縁端部を摘み上げる。132は体部の中位でやや丸みを帯び屈曲する。下半部に回転ヘラケズリが認められる。136は器壁の薄い直口壺で，強い回転ナデを行う。137は土師器甕である。薄い器壁で卵形の体部より，「く」に屈曲しやや長い口縁を有する。



第54図　Ⅰ区 SD01 出土遺物実測図（縮尺1/4）

Ⅰ区SK01（第56図）

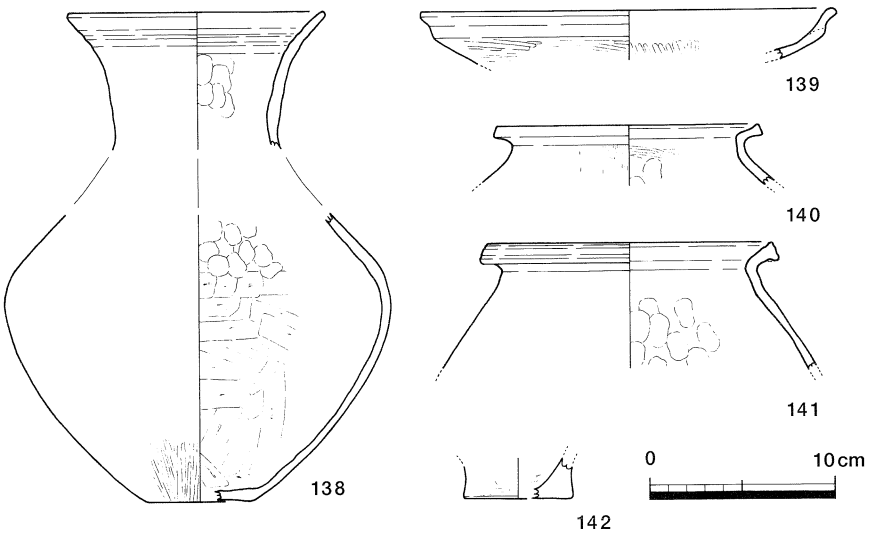
Ⅰ区北端部，⑤層の下位で確認した遺構である。検出した標高は7.35m前後で，底面は7.2m前後を測る。長さは0.5～0.6mで，東西方向にやや長い楕円形を呈する。柱穴の可能性を考えたが，対応するものは確認できなかった。出土遺物はない。

Ⅰ区SK02（第56図）

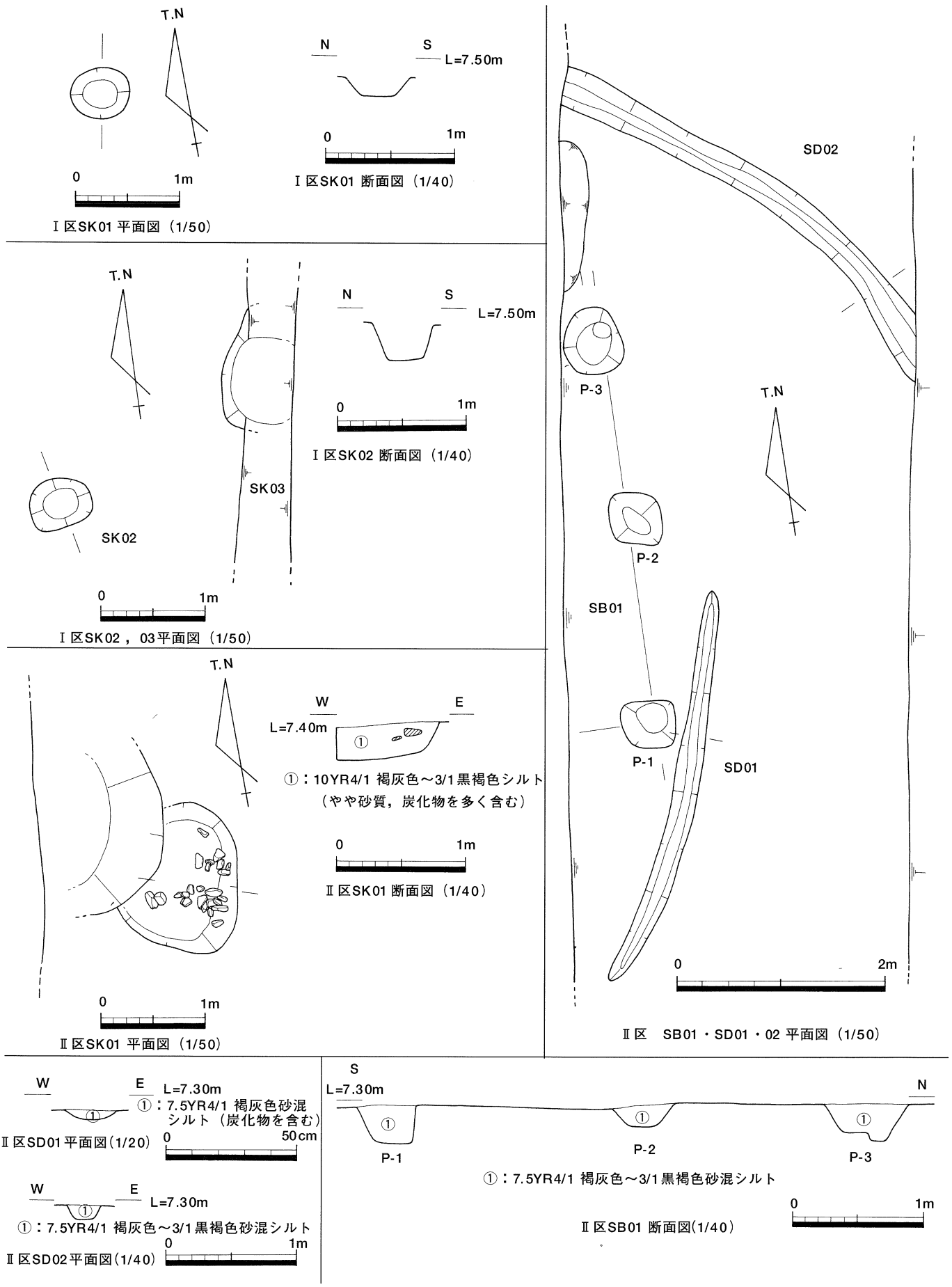
Ⅰ区北端部，⑤層の下位で確認した遺構である。検出した標高は7.38m前後で，底面は7.1m前後を測る。長さは0.5～0.6mで，東西方向にやや長い楕円形を呈する。柱穴の可能性を考えたが，対応するものは確認できなかった。出土遺物はない。

Ⅰ区SK03（第47・56図）

Ⅰ区北端部，⑤層の下位で確認した遺構である。底面付近で礫層に達しており，湧水が認められたため井戸の可能性が考えられる。検出した標高は7.38m前後で，底面は6.93m前後を測る。検出長約1mを測り，隅丸方形状の平面形態と考えられるが，東半が調査地外であるため詳細は不明である。断面の形状は，上半部が開き下半はほぼ垂直に落ちる。埋土は褐灰～黒褐色土の単層であ



第55図　Ⅰ区 SK03 出土遺物実測図（縮尺1/4）



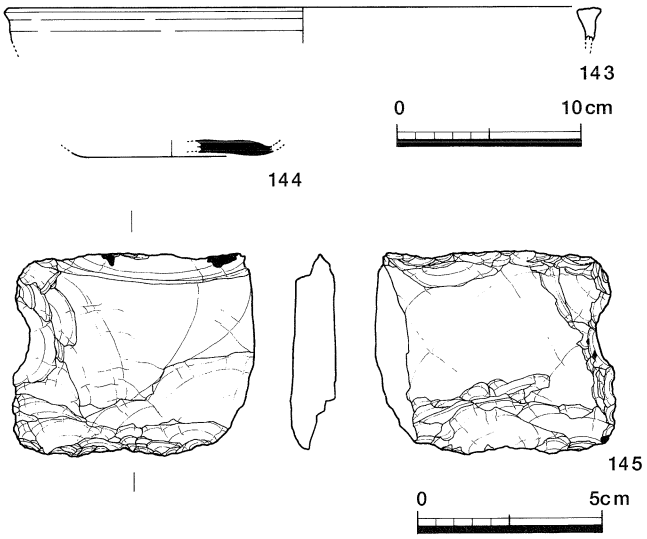
第56図　Ⅰ・Ⅱ区遺構平・断面図

る。出土遺物から，弥生時代後期初頭のものと考えられる。

出土遺物（第55図）のうち，138は長頸壺である。口縁部が緩やかに開き，下端に退化した凹線を数条巡らす。体部は中位で最大径になるとみられ，なで肩で丸みを帯びた器形に復元できる。139は高坏坏部である。坏部の内面より口縁部を接合し，端部を短く折り曲げる。140・141は甕で，端面の拡張は大きくなく，141には退化した凹線が認められる。142は甕底部である。

Ⅰ区人力掘削時出土遺物（第57図）

すべて表土直下から，⑤層上面までに出土した遺物である。143は弥生土器鉢口縁部である。口縁端部を外方向に突出させる。144は須恵器坏底部である。平坦な底面をもつ。145はサヌカイト製の打製石庖丁である。



第57図　Ⅰ区人力掘削時出土遺物実測図
（縮尺：土器１/4，石器1/2）

Ⅱ区SB01（第56図）

Ⅱ区南部で確認した掘立柱建物である。柱穴が直線的に並んでおり，柱穴の規模より調査地外となる西方向に展開する建物と考えられる。柱間距離は約2.5mを測る。主軸はほぼ真北を示す。規模は不明だが確認状況からは，東西の側壁が２間であると考えられる。柱穴はP-１・２が約0.5mの隅丸方形であり，やや大きく楕円形に検出したP-３の底面には，柱が据わっていたとみられる径20cm程の円形の窪みが認められている。出土遺物はなく詳細な時期は不明だが，小規模な溝状遺構SD01・SD02との配置関係が，Ⅲ区SB01と共通しており同様の所属時期が考えられる。

Ⅱ区SD01（第56図）

Ⅱ区南部で確認した溝である。検出した標高は7.24～7.26mを測り，底面は7.19m前後を測る。検出長は約４mで，若干湾曲し南北方向に伸びるが途中で途切れる。検出幅は0.2m前後である。断面は船底形で，埋土は褐灰色土の単層である。遺物は出土していない。

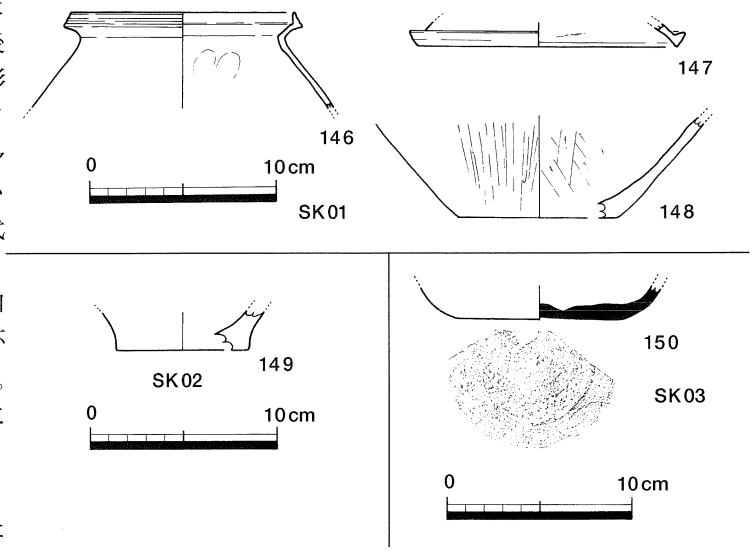
Ⅱ区SD02（第56図）

Ⅱ区南部で確認した溝である。検出した標高は7.25m前後を測り，底面は7.13～7.16mを測る。若干湾曲しながら東西方向に伸びる。検出幅は0.3～0.4mを測る。断面はU字形で，埋土は褐灰色土の単層である。遺物は出土していない。

Ⅱ区SK01（第56図）

Ⅱ区中央部で確認した土坑である。検出した標高は7.20～7.24mを測り，底面は6.95m前後を測る。長軸方向に約1.38mを測りやや不整形な長方形を呈するが，西側を近世の土坑に壊されている。断面は船底形で，埋土は炭化物を多く含む砂質土で拳大の石が中位～底面付近にかけて密集し認められた。出土遺物から弥生時代後期初頭のものと考えられる。

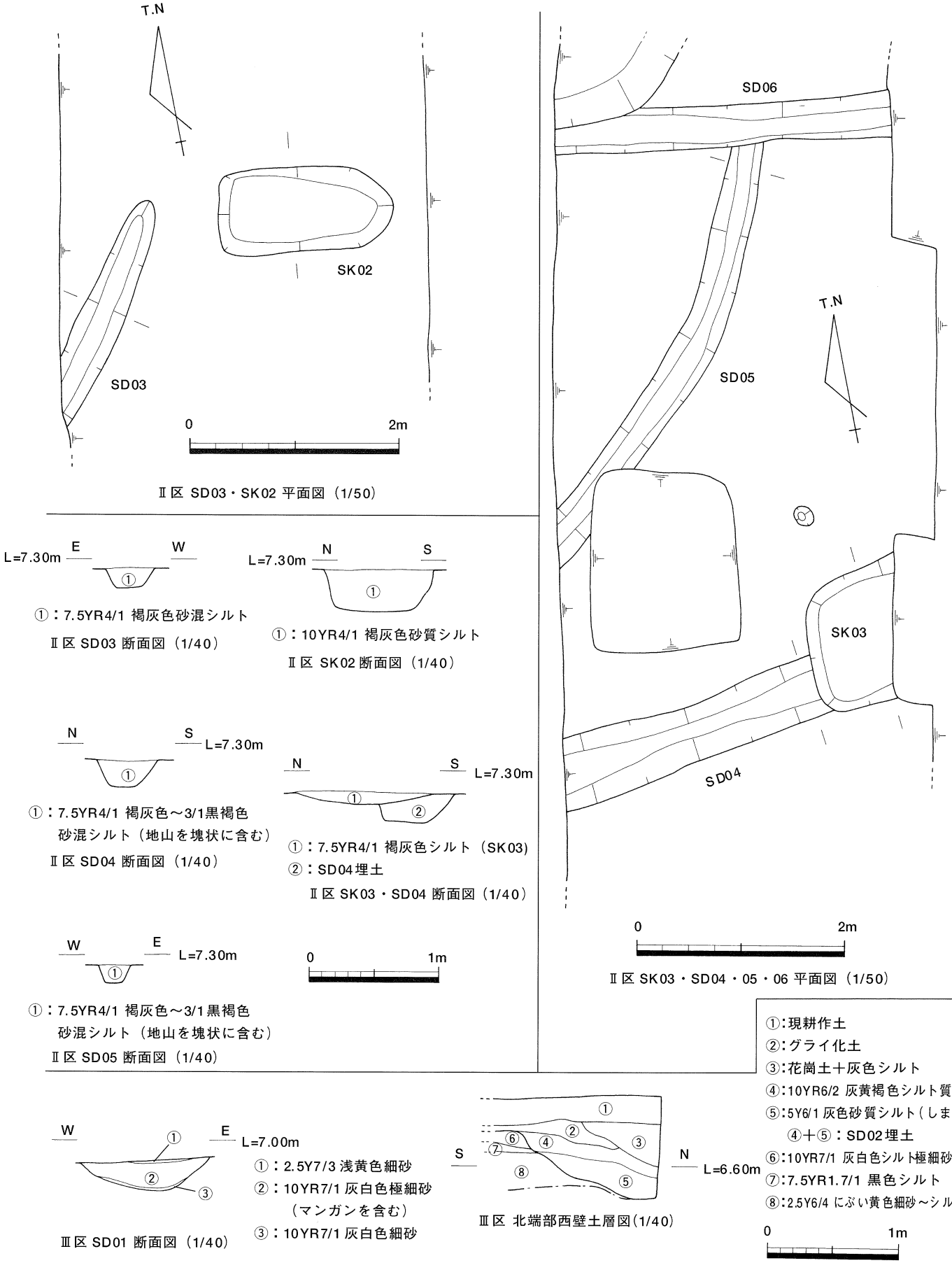
出土遺物（第58図）のうち，146は甕で，口縁端部を上方に拡張し凹線を施す。147は高坏脚部で，裾端部を跳ね上げ退化した凹線を施す。148は壺底部である。外面にヘラ磨き，内面にケズリ調整が認められる。



第58図　Ⅱ区 SK01・02・03出土遺物実測図（縮尺１/4）

Ⅱ区SK02（第59図）

Ⅱ区中央部で確認した土坑である。検出した標高は7.23m前後を測り，底面は6.80～6.90m前後を測る。長軸方向に約1.70m，短軸方向に



第59図　Ⅱ・Ⅲ区遺構平・断面図

約0.8mを測る。平面の形状は墓の可能性がある長方形のもので，東端は先細る。長軸の方位はN－100°－Eを示す。断面は箱形で，埋土は褐灰色の砂質土で充填される。出土遺物からは弥生時代前期の可能性が考えられる。

出土遺物（第58図）は1点のみである。149は弥生土器底部である。胎土中に砂粒を多量に含む。

Ⅱ区SK03（第59図）

Ⅱ区北部で確認した土坑である。検出した標高は7.23mを測り，底面は7.02m前後を測る。平面形状は約1.2mの方形と推定される。断面は船底形で，埋土は褐灰色土の単層である。出土遺物から古代ものと考えられる。

出土遺物（第58図）は1点のみである。150は須恵器坏底部である。底面が平坦になっている。

Ⅱ区SD03（第59図）

Ⅱ区中央部で確認した溝である。検出した標高は7.22m前後を測り，底面は7.07～7.13mを測る。検出長は約2mで，西側の調査地外より北東へと伸びるが途中で途切れる。検出幅は約0.4mである。断面はU字形で，埋土は褐灰色土の単層である。遺物は出土していない。

Ⅱ区SD04（第59図）

Ⅱ区北部で確認した溝である。検出した標高は7.22m前後を測り，底面は約7.02mを測る。西側の調査地外より東へと伸びるが途中でSK03に壊される。検出幅は0.5～0.7m前後である。断面はU字形で，埋土は褐灰色土の単層である。遺物は出土していない。

Ⅱ区SD05（第59図）

Ⅱ区北部で確認した溝である。検出した標高は7.22m前後を測り，底面は7.09～7.12mを測る。西側の調査地外より北東へと伸び，SD06と接続する。検出幅は0.5～0.7m前後である。断面はU字形で，埋土は褐灰色土の単層である。遺物は出土していない。

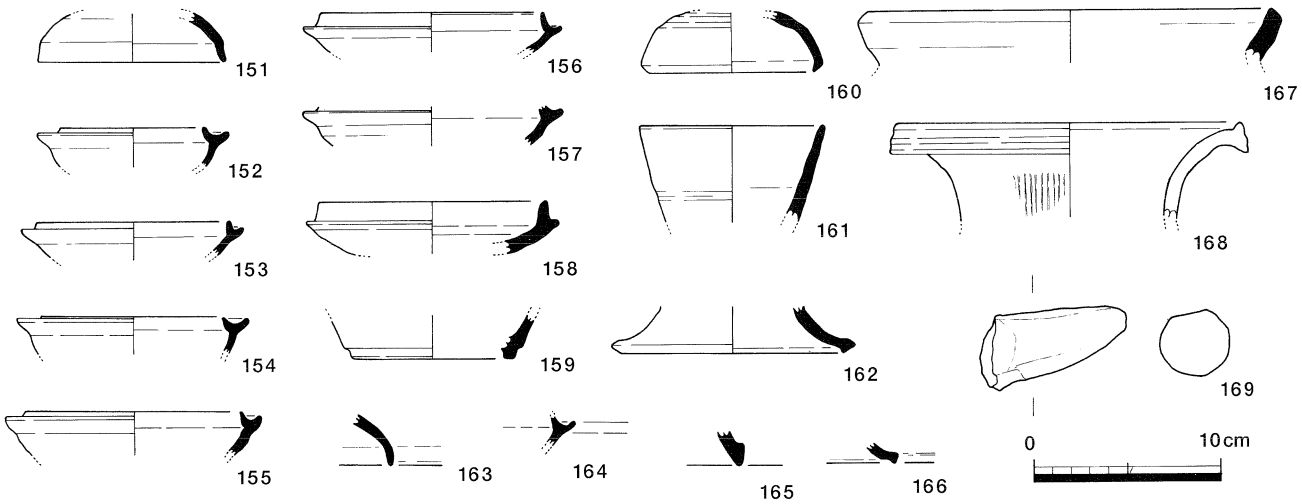
Ⅱ区SD06（第48・59図）

Ⅱ区北部で確認した溝である。検出した標高は7.22m前後を測り，底面は7.00～7.04mを測る。N－98°－Eの方位を示し，西側の調査地外より東側の調査地外へと伸びる。検出幅は0.5～0.7m前後である。断面はU字形で，埋土は褐灰色土の単層である。遺物は出土していない。

Ⅲ区SD01（第45・59図）

Ⅲ区東端部，条里坪界線上に位置し確認した溝である。検出した標高は6.82～6.87mを測り，底面は6.50～6.65mで緩やかに北へ下がる。検出長は約40mで，N－10°－E前後の方位を示す。検出幅は最大で約0.9mである。断面は船底形で，埋土は灰白色極細砂及び最下層部に砂層が認められる。遺物は弥生～古墳時代のもので占められるが，遺構の切り合い関係及び検出面の状況より古代～近世のものと考えられる。

出土遺物（第60図）のうち，151～167は須恵器である。蓋（151・160・163）・坏身（152～157・164））・脚部（162・165・166）・甕（167）等がある。168は弥生土器壺口縁部である。169は土師器把手部である。

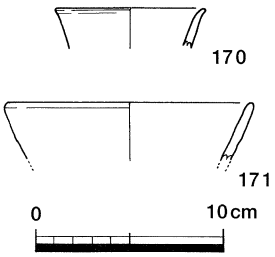


第60図　Ⅲ区 SD01 出土遺物実測図（縮尺1/4）

Ⅲ区SD02（第45・59図）

Ⅲ区北端部で確認された東西方向の溝である。検出した標高は6.80m前後を測り，底面は6.31～6.63mで急激に西へ下がる。検出長は約２mで，検出幅は最大で約0.7mである。SD01にほぼ直交し開削され，これに後出している。断面は船底形と考えられ，埋土は灰黄色土及び最下層部に砂層が認められる。所属時期は出土遺物より，近世頃と考えられる。

出土遺物（第60図）のうち，170は陶器小坏，171は青磁碗である。



第61図　Ⅲ区 SD02 出土遺物実測図（縮尺１/4）

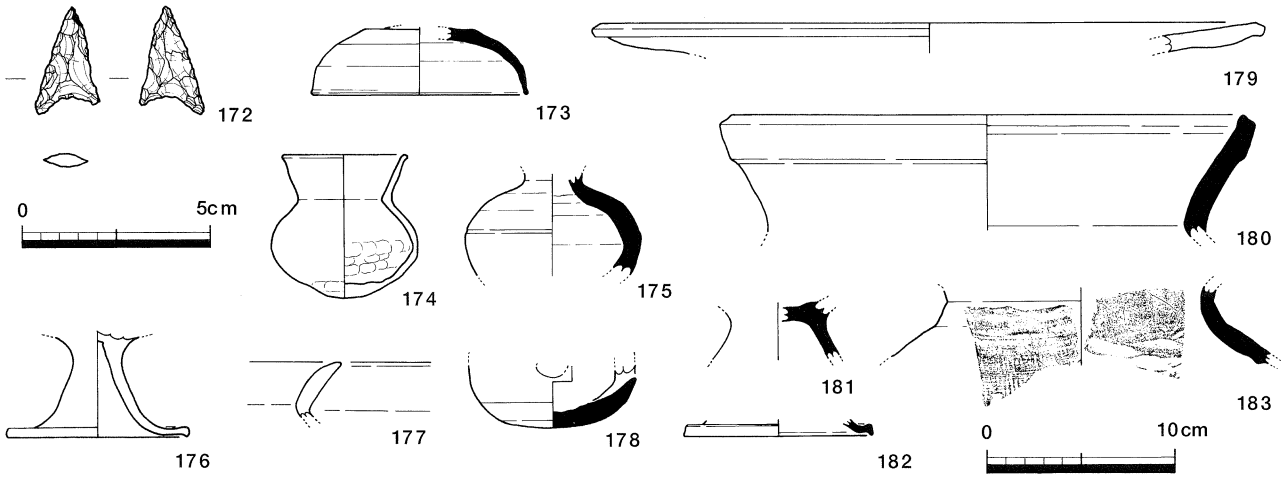
Ⅲ区SD03・SD04（第45・49図）

Ⅲ区中央部東半で確認した東西方向の溝である。何れも検出した標高は6.88m前後で，深度は５cm程度である。遺物が出土していないため詳細な時期は不明だが，確認面からは古代～近世と想定される。

Ⅲ区SR01（第45・49図）

Ⅲ区中央部東半で確認した東西方向の流路である。埋土である黒色の粘質土が最深部で0.4m程度認められた。以北は砂質土となっており，本来の河川の規模は更に北方向まで広がるものと考えられる。埋土の特徴より緩慢な埋没であったとみられ，埋没の最終段階においてSD05～SD09が開削されたと考えられる。平面の検出では，これらの溝跡の上層部との判別が難しいことから，溝が明瞭になるまで当埋土を掘り下げ検出した。このため出土遺物には，本来溝の遺物も含まれる可能性がある。所属時期は周辺部の状況から弥生時代以前に遡るものと想定されるが，当出土遺物及び溝の出土遺物から，概ね古墳時代後期～終末期にかけて埋没した流路と考えられる。

出土遺物（第62図）のうち，172は凹基式の石鏃である。173は須恵器蓋で，小振りだが丸みを帯びた体部で，外面には自然釉が認められる。天井部に器高の1/3程回転ヘラケズリを行う。174は土師器壺である。小形のもので，下膨れの体部で底部は厚く尖り気味である。口縁部は「ハ」の字に長く伸び，端部を短く外に摘み出す。確認調査時に完形で出土した。178は碗底部。外面に回転ヘラケズリを行う。円孔部が僅かに認められる。176は大形の土師器高坏で，脚の下端で大きく屈曲し，裾部は水平方向に開く。裾端部は僅かに下方に摘み，爪状となっている。179は土師器壺で，水平方向に開く口縁部となる。180は須恵器甕で，口縁下端に平坦面をもつ。上端部はやや内側に突出させ，内面に沈線状となる強いナデを施す。183は須恵器甕の体部で，外面には格子目状の叩き成形後，カキ目を施す。内面には当て具痕を残している。

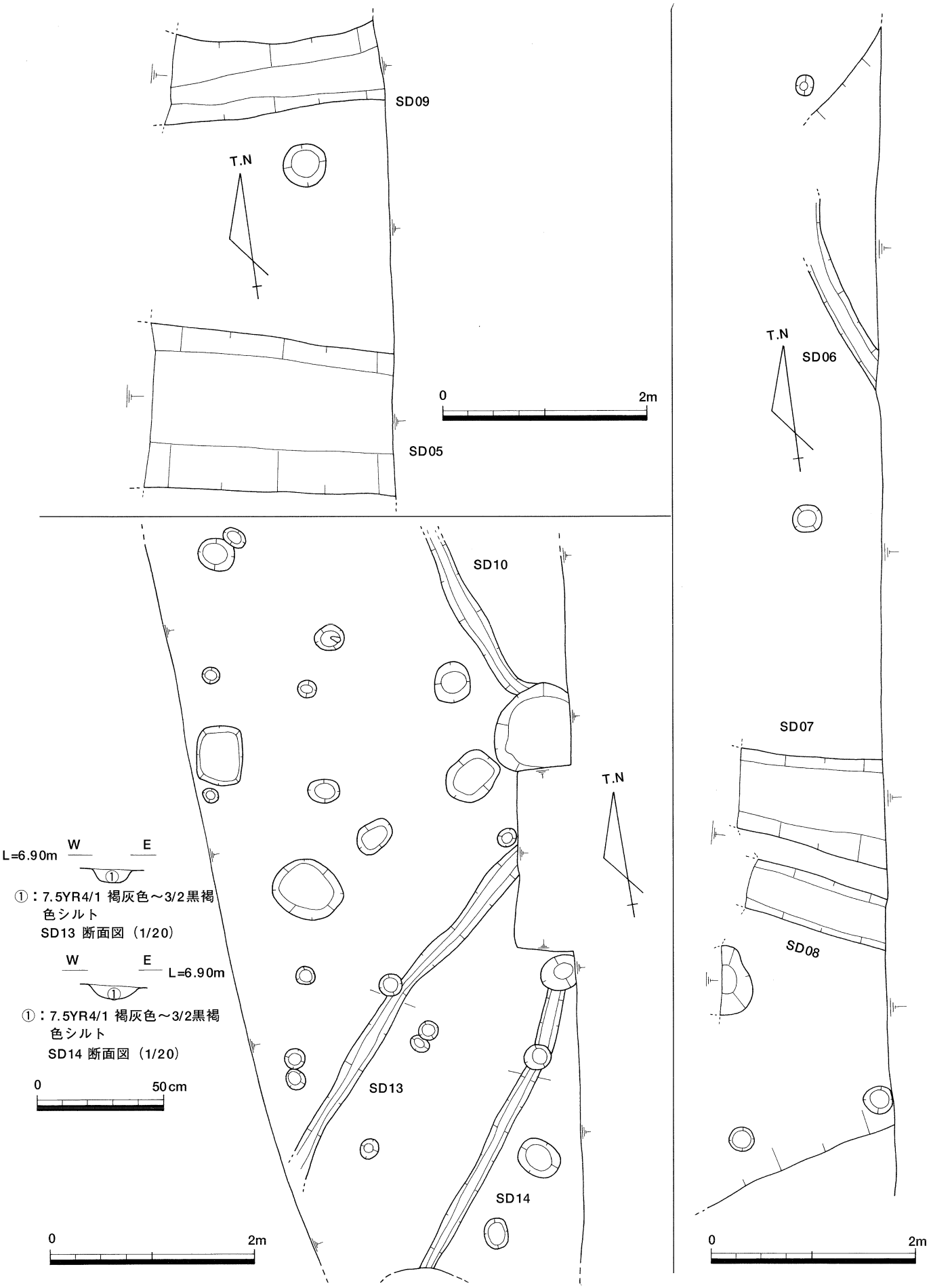


第62図　Ⅲ区 SR01 出土遺物実測図（縮尺：土器１/4，石器1/2）

Ⅲ区SD05（第49・63図）

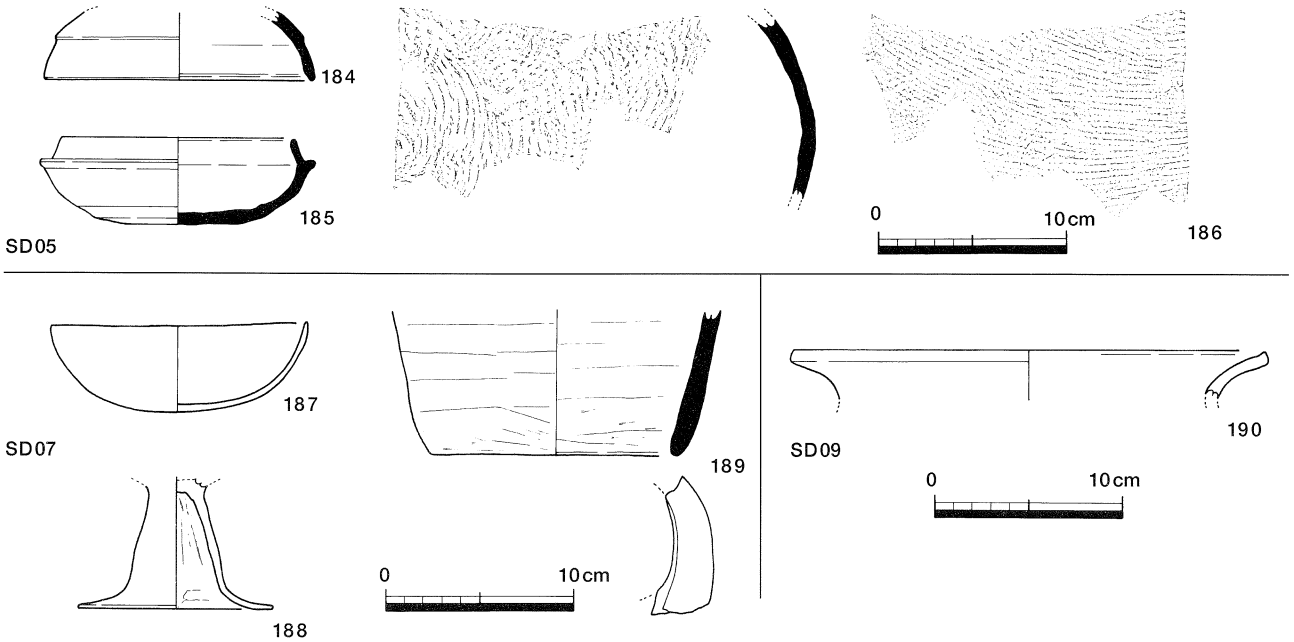
Ⅲ区中央部東半で確認した東西方向の溝である。西側をSD01に壊される。上述の様に断面観察ではSR01の上層部より認められたが，平面の検出ではほぼSR01の底面で検出している。検出した標高は6.80m前後を測り，底面は6.54～6.60mで西へ下がる。検出長は約2.6mで，N－100°－E前後の方位を示す。検出幅は約1.8mである。断面は船底形で，埋土は黒褐色土である。出土遺物はすべて下層のものである。所属時期は，SR01との関係及び出土遺物から古墳時代後期～終末期と考えられる。

出土遺物（第64図）のうち，184・185は須恵器蓋・坏である。184は小片のため法量は明確ではないが，天井部との境の稜が明瞭で口縁端部の内面に段をもつ。185は口径14.6cmを測る。立ち上がりは内傾し，1.2



第63図　Ⅲ区遺構平・断面図（縮尺1/50・1/20）

cmの高さをもつ。受け部は水平方向よりやや上を向き，体部下半に回転ヘラケズリが認められる。6世紀前葉のものと考えられる。86は須恵器の体部片で，外面に格子目状の叩き痕，内面に同心円状の当て具痕が認められる。



第64図　Ⅲ区 SD05・07・09 出土遺物実測図（縮尺 1/4）

Ⅲ区SD06（第63図）

Ⅲ区北部で確認した溝である。SR01の底面で検出した。検出した標高は6.71m前後を測り，底面は6.54～6.50mで緩やかに北へ下がる。検出長は約1.5mで，検出幅は約0.2mである。SD10に類似し，やや湾曲し弧を描く様に検出された。遺物は出土していない。SR01との前後関係は不明だが，検出面より古墳時代後期～終末期と考えられる。

Ⅲ区SD07（第49・63図）

中央部東半で確認した東西方向の溝である。西側をSD01に壊される。上述の様に断面観察ではSR01の上層部より認められたが，平面の検出ではほぼSR01の底面で検出している。検出した標高は6.72m前後を測り，底面は6.38m前後である。検出長は約1.5mで，検出幅は約1.0mである。断面は台形で，埋土は上層・下層部が黒褐色土で，中位はやや褐色で砂質土となっている。所属時期は，SR01との関係及び出土遺物から古墳時代後期～終末期と考えられる。

出土遺物（第64図）のうち，187・188は土師器鉢・高坏である。最下層で出土した。189は須恵器底部である。底面に円孔をもつと考えられ，甑とみられる。内外面の下位にヘラケズリを行う。

Ⅲ区SD08（第49・63図）

Ⅲ区中央部東半で確認した東西方向の溝である。西側をSD01に壊される。検出した標高は6.73m前後を測り，底面は6.52m前後である。検出長は約1.5mで，検出幅は約0.5mである。断面は船底形で，埋土は黒色の粘質土である。出土遺物はない。所属時期はSR01底面で認められることから，古墳時代後期と考えられる。

Ⅲ区SD09（第49・63図）

Ⅲ区中央部東半で確認した東西方向の溝である。西側をSD01に壊される。検出した標高は6.78m前後を測り，底面は6.54～6.59mで緩やかに東へ下る。検出長は約2.0mで，検出幅は約0.8mである。断面は船底形である。所属時期はSR01底面で認められることから，古墳時代後期と考えられる。

出土遺物（第64図）は1点のみである。190は土師器甕の口縁部である。

Ⅲ区SD13（第63図）

Ⅲ区南端部で確認した溝である。SB01を巡るSD10と同様相を呈し，ほぼ直交する位置関係で検出された。検出した標高は6.82m前後を測り，底面は6.72～6.78mで緩やかに北へ下る。検出長は約3.9mを測り，検出幅は約0.2mである。断面はU字形で，埋土は褐灰色～黒褐色土である。時期の判明する遺物は出土していなが，SD10との関連より古墳時代終末期と考えられる。

Ⅲ区SD14（第63図）

Ⅲ区南端部で確認した溝である。SD13と併走し，同様相を呈するSD10とほぼ直交する位置関係で検出された。検出した標高は6.82m前後を測り，底面は6.72～6.75mである。検出長は約2.9mを測り，検出幅は約0.2mである。断面はU字形で，埋土は褐灰色～黒褐色土である。時期の判明する遺物は出土していながが，SD10との関連より古墳時代終末期と考えられる。

Ⅲ区SD10（第66図）

Ⅲ区南部で確認した溝である。南部では北方向に伸びるが，SB01付近で東方に湾曲し検出された。検出した標高は6.82m前後を測り，底面は6.64～6.75mで緩やかに北へ下がる。検出幅は0.2～0.3mで，断面はU字ないし船底形である。埋土は褐灰色～黒褐色土である。所属時期は，出土遺物より古墳時代終末期と考えられる。

出土遺物（第65図）のうち，191は須恵器坏である。小振りで，口縁の立ち上がり低く受け部の退化が著しい。192・193は須恵器片である。192は蓋の可能性がある。194は鉄錆に覆われているが，椀形の鍛冶道具と考えられる。

Ⅲ区SD11（第66図）

Ⅲ区南部で確認した溝である。SD10に先行し，これに接続して検出された。検出した標高は6.75m前後を測り，底面は6.70mである。検出幅は0.3～0.4mで，断面はU字ないし船底形である。埋土は褐灰色の砂質土である。時期の判明する遺物は出土していながが，SD10との関連及び周囲の遺構から古墳時代後期～終末期と考えられる。

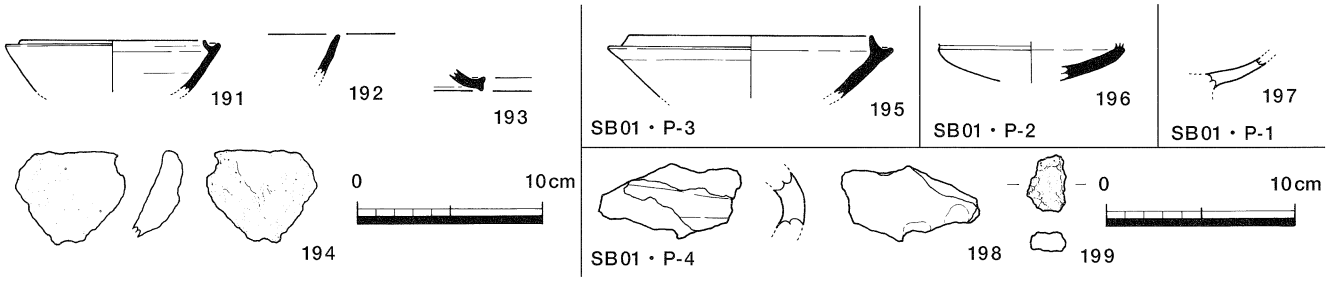
Ⅲ区SD12（第49・66図）

Ⅲ区南部で確認した溝である。SD10に直交して途切れる。検出した標高は6.81m前後を測り，底面は6.68～6.65mである。検出幅は0.3m前後を測る。N－92°－Eの方位を示す。断面はU字で，埋土は黒褐色土である。時期の判明する遺物は出土していながが，SD10との関係から古墳時代終末期と考えられる。

Ⅲ区SB01（第66図）

Ⅲ区南部で確認した掘立柱建物である。SD10に囲まれた範囲には一定の規模を有する柱穴が多数確認され，またSD10・11との関連から少なくとも1度の建替が想定される。柱穴の配置状況からは，南北方向に2ないし3間で東西方向に2間以上の規模で復元でき，また南面には廂を伴う可能性が考えられる。柱間距離は東西方向では1.25mを測る。南北方向では2.7m及び1.8mを測るが，P-1・P-2の中間1.35mにSP31が並び，建物を構成する柱穴とも考えられる。主軸はN－11°－Eの方位を示している。また身舎の南面より0.9m外に廂の可能性があるSP22・P-6が並ぶが，SP22の埋土は他のものとは異なる灰色土であり規模も小さいため，当建物に伴わない可能性が高いと考えられる。隅の柱穴を欠くことから，身舎の屋根と独立した廂の可能性も推定される。各柱穴はいずれも褐灰色～黒褐色土を埋土とし断面で柱痕は認められなかったが，底面において柱を据えていたと考えられる約0.2mの円形の窪みが検出された。出土遺物及びSD10との関係から，古墳時代後期～終末期のものと考えられる。

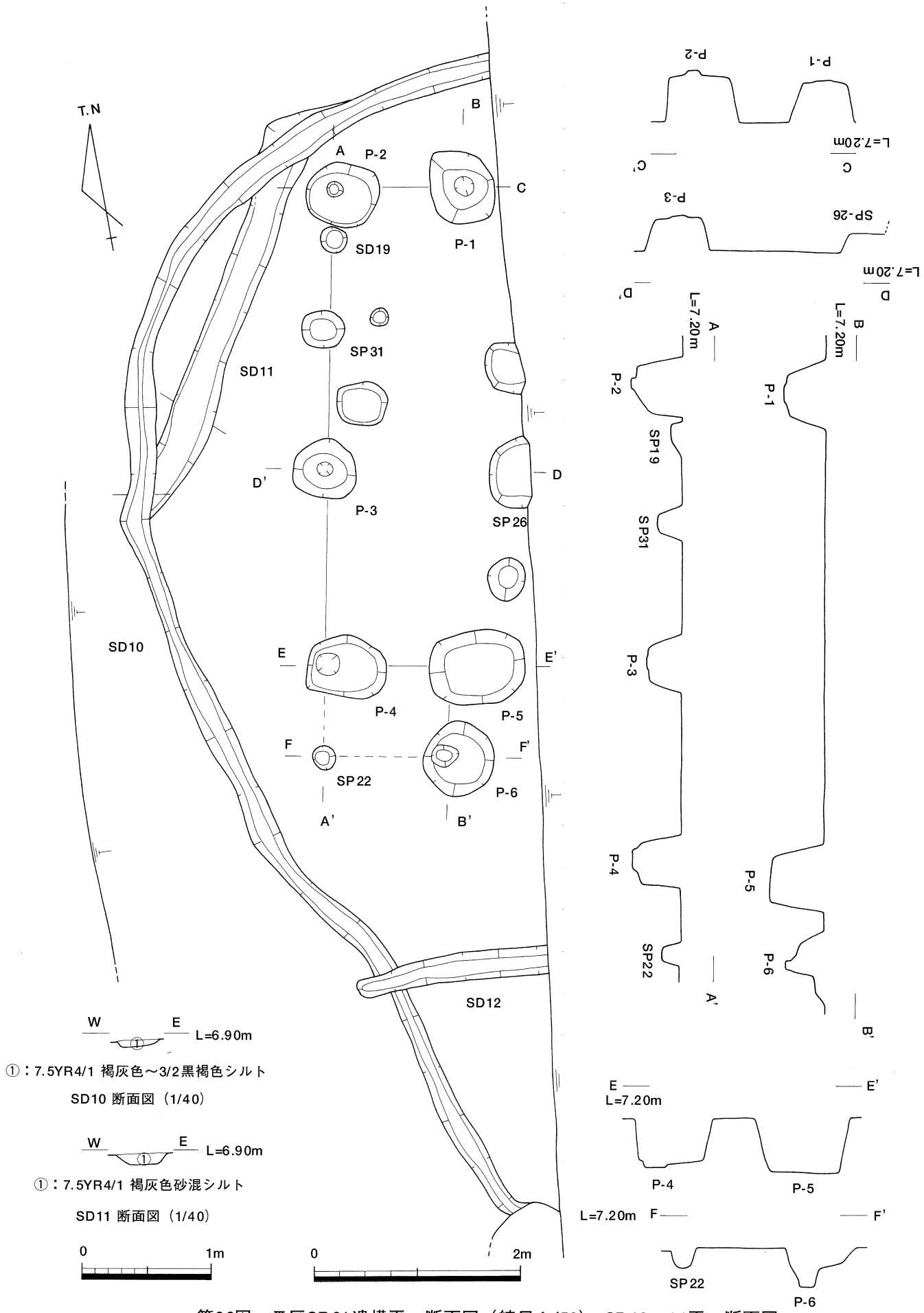
出土遺物（第65図）のうち，195は須恵器坏である。やや小振りで立ち上がりも高くないが，受け部の境はまだ明瞭である。196・197は高坏坏部と考えられる須恵器及び土師器片である。198は高坏脚の可能性もあるが，鉄滓の付着が認められ鞴の羽口部と考えられる。199は鉄滓片である。



第65図　Ⅲ区SB01・SD10 出土遺物実測図（縮尺1/4）

Ⅲ区SP02（第45図）

Ⅱ区北部で確認したピットであるが，東半分を失う。検出した標高は6.8m前後を測り，底面は6.50m前後を測る。長軸方向に約0.5mを測り，平面の形状は円もしくは隅丸方形と推定される。調査範囲の制限のため明確さに欠けるが，SD06との配置関係からは同規模を有するSP01と合わせ，SB01と同様の遺構が存在する可能性も考えられる。出土遺物及び周囲の遺構との関連から，古墳時代後期～終末期のものと考えられる。



第66図　Ⅲ区SB01遺構平・断面図（縮尺1/50），SD10・11平・断面図

出土遺物（第67図）のうち，200は須恵器坏蓋である。201は土師器甕口縁部である。202は土師器鉢である。203は土師器片で，大形壺の頸体部と考えられる。

Ⅲ区SK02（第45図）

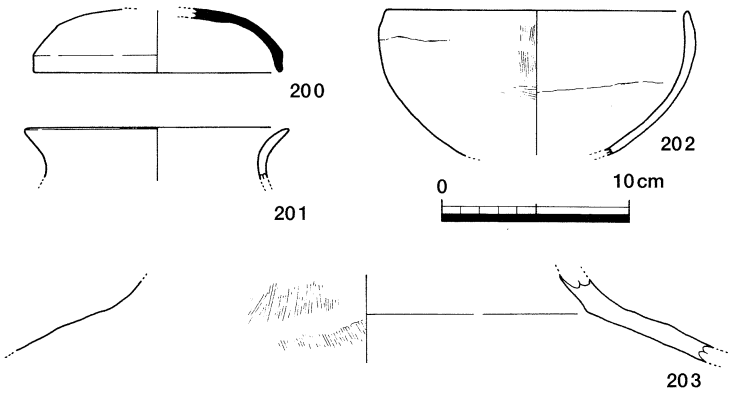
Ⅲ区中央部で確認した土抗である。検出した標高は6.82m前後を測る。平面の形状は0.1～0.2mの楕円形であり，深度は0.1～0.15mを測る。西半分をSD01に壊される。

出土遺物（第68図）は1点のみで，206は須恵器底部である。

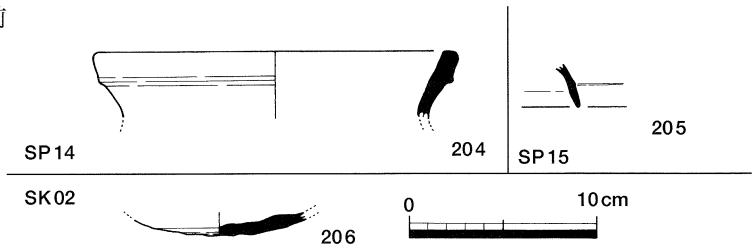
Ⅲ区SP14・SP15（第45図）

Ⅲ区中央部で確認したピットである。検出した標高は6.73m前後を測り，底面は6.5m前後である。

出土遺物（第68図）のうち，204は須恵器甕である。205は須恵器蓋である。



第67図　Ⅲ区 SP02 出土遺物実測図（縮尺 1/4）



第68図　Ⅲ区 SK02，SP14・15 出土遺物実測図（縮尺 1/4）

e．まとめ

当調査地はⅡ・Ⅲ区間が現況の林町と木太町との境となるが，弥生時代から近世に至る遺構・遺物を確認し，林下所遺跡が調査地の北東部を中心に広がることが想定される。調査対象となった範囲は，遺構のごく一部であると考えられることから不明な点を残すが，現状で以下の様な変遷が考えられる。

【弥生時代前期】

微高地であったと考えられるⅡ区中央部で，墓の可能性があるSK02が確認された。遺構はこれのみだが，Ⅰ区の遺構外の出土遺物に当該期に推定されるものが認められる。南部で調査された林下所遺跡に当該期の遺構が散見され，当地まで遺構の散在する状況が想定される。

【弥生時代後期】

微高地であったと考えられるⅠ・Ⅱ区で，井戸状の遺構Ⅰ区SK03及び土坑Ⅱ区SK02の他，Ⅰ区の出土遺物（大畦畔）に当該期のものがまとまって認められ，集落が所在した可能性が考えられる。

【古墳時代後期～終末期】

当調査地の主要となる遺構群である。Ⅱ区及びⅢ区で確認した掘立柱建物を中心に，小規模な溝状遺構が認められる。また，東西方向に一定規模を有する溝が，Ⅰ区(SD01)及びⅢ区（SD05他）で認められる。この東西方向の溝（Ⅰ区SD01 SD05）及びⅢ区SB01は，現況の地割りとほぼ同様の方向性をもち，一方で建物を巡る小規模な溝の方向とは異なり特徴的にみられる。調査した範囲では，竪穴住居はなく掘立柱建物が中心の集落である可能性が想定される。また，当集落の特徴として鍛冶を行っていた可能性が挙げられる。特にⅢ区では遺構面に多くの鉄分の沈着を認め，周辺部に鍛冶に伴う遺構の所在が推察される。出土遺物を概観すると7世紀前葉までのもので占められ，これ以降に想定されるものは調査地全体でも少量となることから，古墳時代終末期に廃絶した集落と考えられる。

【古代～近世期】

条里地割と合致するⅠ区大畦畔及びⅢ区SD01が認められる。両遺構は位置関係及びⅠ区SD02の存在から，並存する可能性も想定される。明確な所属時期を示す出土遺物はないが，前段階の遺構に後出すること及び近世の遺構・堆積層に先行することから当期となる。水田と考えられる小区画の畦畔については，立地条件がやや異なるが当地より南西約1kmに所在する浴・長池遺跡でほぼ同規模のものが，古代～中世段階で確認されている。

No.16 林町65号線（平成15年度確認調査）

1　調査概要

a．場　所　　林町

b．期　間　　平成15年５月27日・28日

c．面　積　　約73㎡

d．担当者　　小川賢

2　調査内容（第69図）

当路線は林下所遺跡として平成11年度に調査を実地した同路線の南区間であり，同遺跡に近接するため確認調査を行った。南北の区間がほぼ新設となるもので，東西の区間については既存の道路を約２ｍ拡幅するものである。

確認調査は，隣接する地権者の承諾を得られた箇所を中心に第１～５トレンチを設定した。第１トレンチでは，ほぼ表土直下で地山と考えられる黄色シルト質粘土層となり，近世の土坑を数基確認した他，須恵器が若干出土した。第１トレンチの南端部から第２・３トレンチで，砂質土及び砂層が厚く堆積し認められた。北東方向の埋没流路が存在するものと考えられるが，遺物が皆無であったため所属時期は不明である。第４トレンチでは再び微高地となり，表土の直下で地山が確認された。遺物が皆無であり，近世・近代と考えられる耕作跡が確認されたのみであった。第５トレンチでは地山上に黒褐色土が数十㎝程認められ，湿地状の環境であったと推定される。遺構・遺物は皆無であった。

以上の結果から当路線区間については遺構・遺物が希薄な状況が考えられ，事前の保護措置は不要であると判断した。

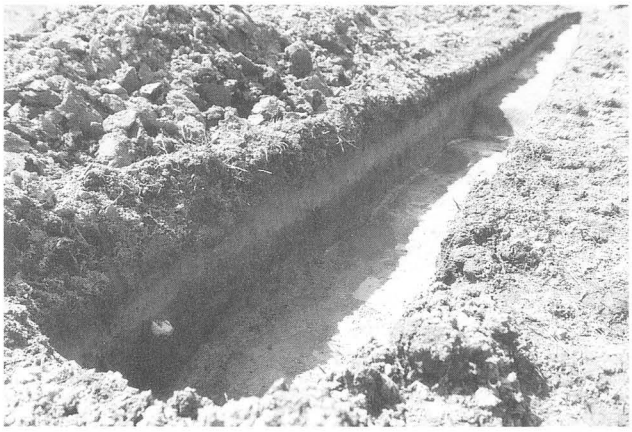


写真５　第１トレンチ

写真６　第３トレンチ

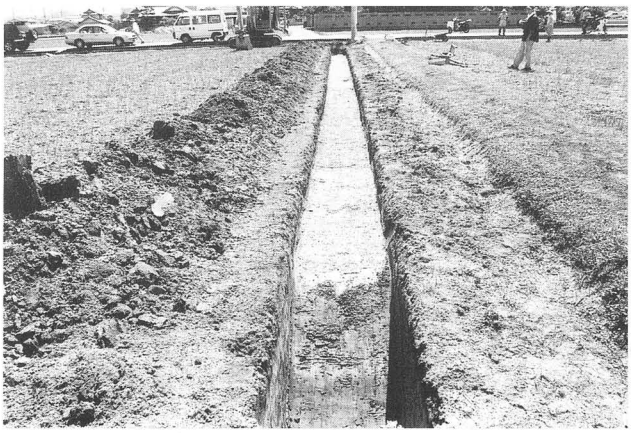


写真７　第４トレンチ

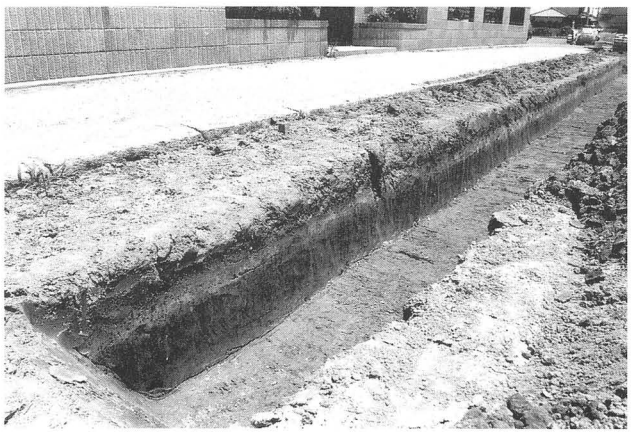
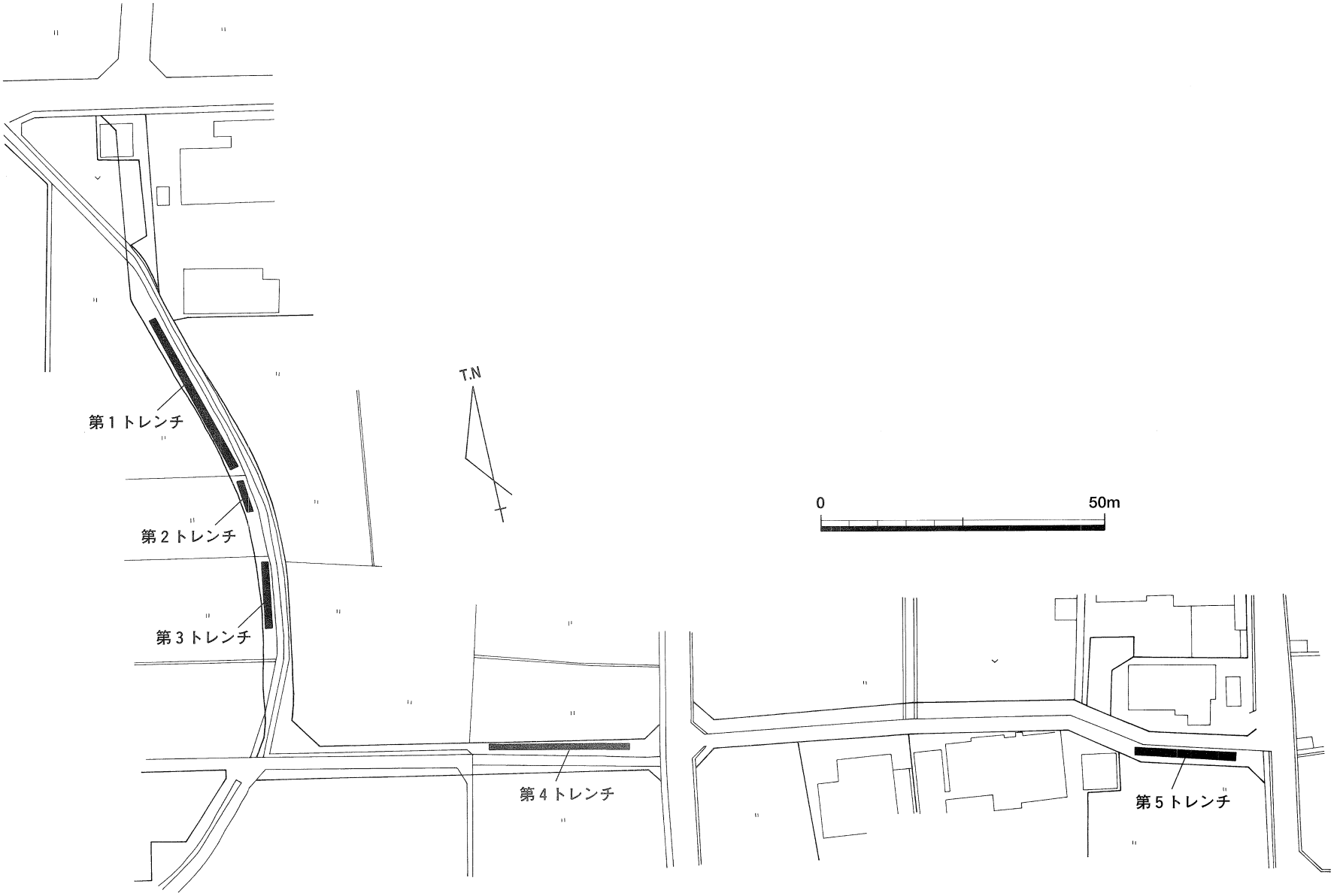


写真８　第５トレンチ



第69図　林町65号線平成15年度トレンチ配置図（縮尺 1/1000）

No.17 林下所・六条乾遺跡（林町70号線　平成14年度調査）

1　調査概要

a．場　所　　林町・六条町

b．期　間　　平成15年１月８日～22日

c．面　積　　約80㎡

d．担当者　　小川賢

2　調査内容

調査内容

a．調査の経緯（第70図）

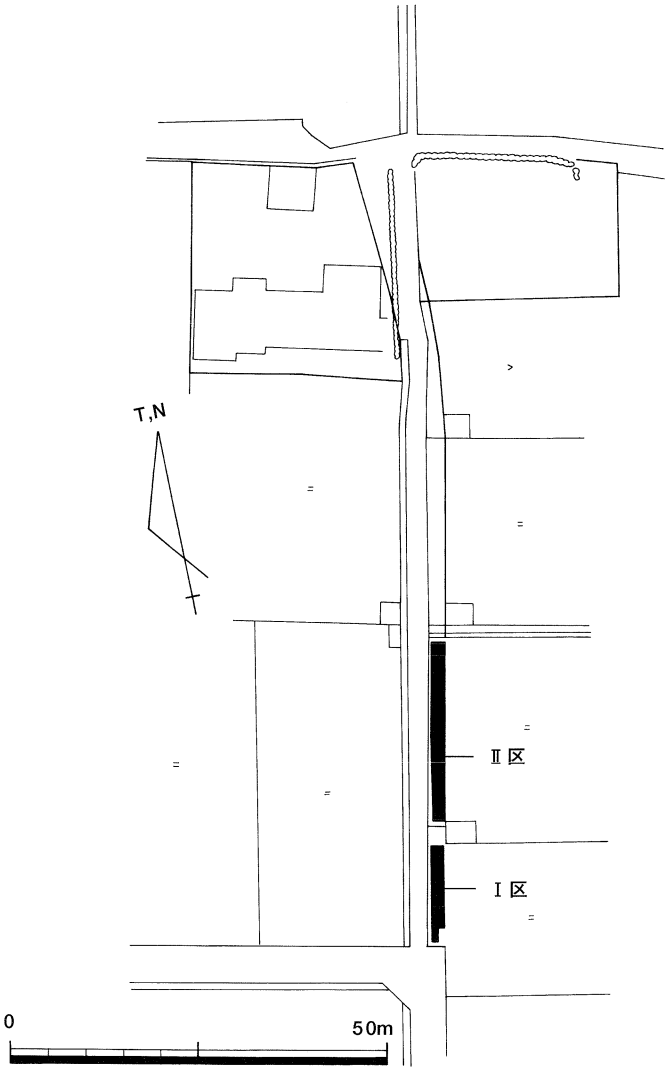
当路線は，既に埋蔵文化財包蔵地となっている林下所遺跡に近接し，新規工事部分を含むことから確認調査を行った。路線工事は北区間が新規工事部分で，南区間が既存道路を２m拡幅するものであった。トレンチ調査の結果，北区間においては遺構・遺物とも希薄であったが，拡幅工事部分となる南区間の南半部で平安時代の遺構・遺物を確認したことから，調査を実施することになった。

b．遺構の概要（第71図）

調査地は，現有のコンクリート畦畔等により南（Ⅰ区）・北（Ⅱ区）に分割された。確認された遺構は南北方向の溝SD01で，幅２mとなる南北の調査区に亘って検出された。

c．基本土層

現況はⅠ・Ⅱ区を分割する畦畔を境に，地表面が0.3～0.4mの段差が付き，北側が低くなっている。北のⅡ区では，現耕作土のほぼ直下で地山となる黄色粘質土が認められるが，南のⅡ区では地山の上部に灰褐色土が0.2m程堆積する。Ⅰ・Ⅱ区とも遺構確認は，この黄色粘質土の上面で行っている。



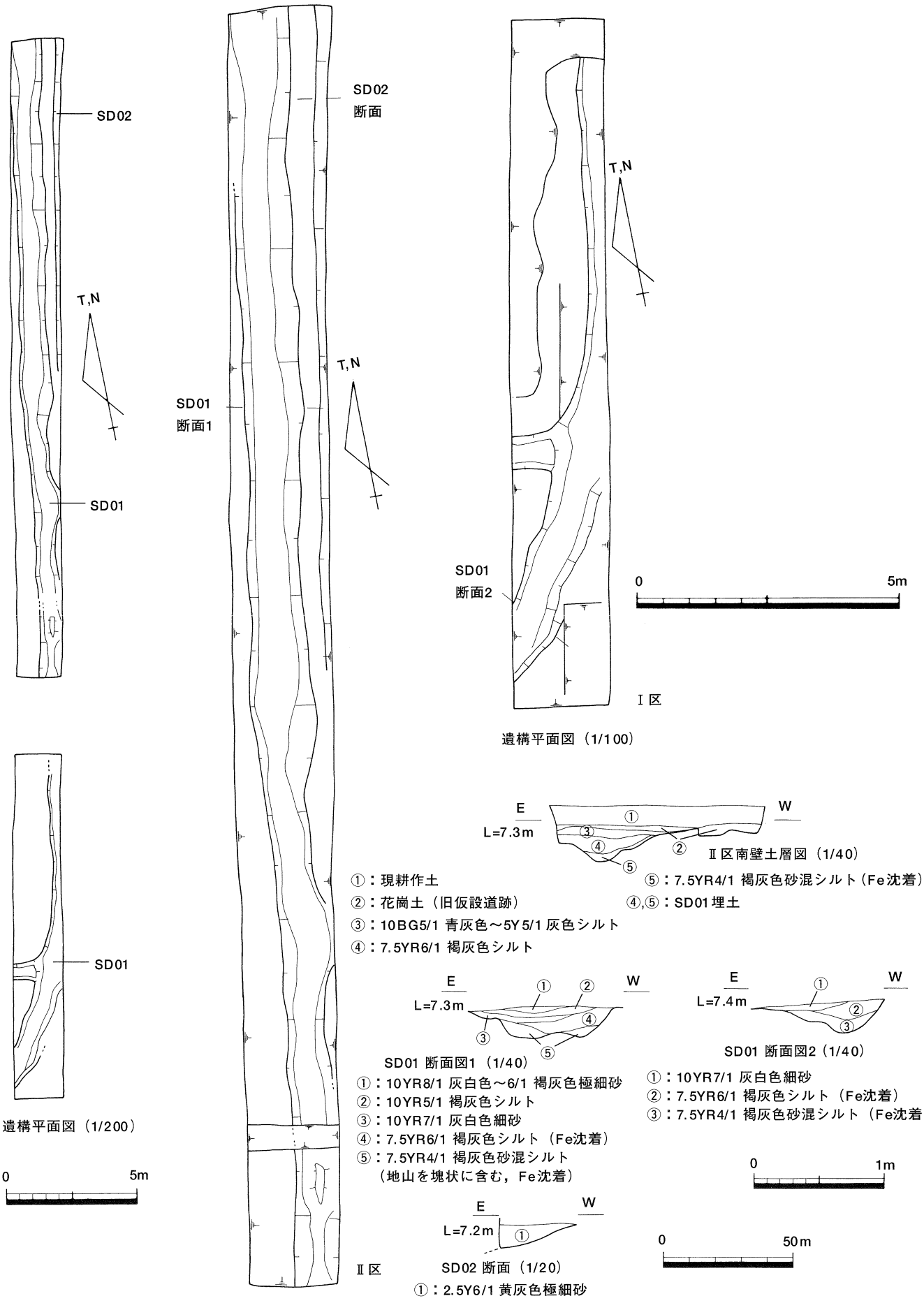
第70図　林下所・六条乾遺跡（林町70号線）
調査位置図（縮尺1/1000）

d．遺構・遺物

SD01（第71図）

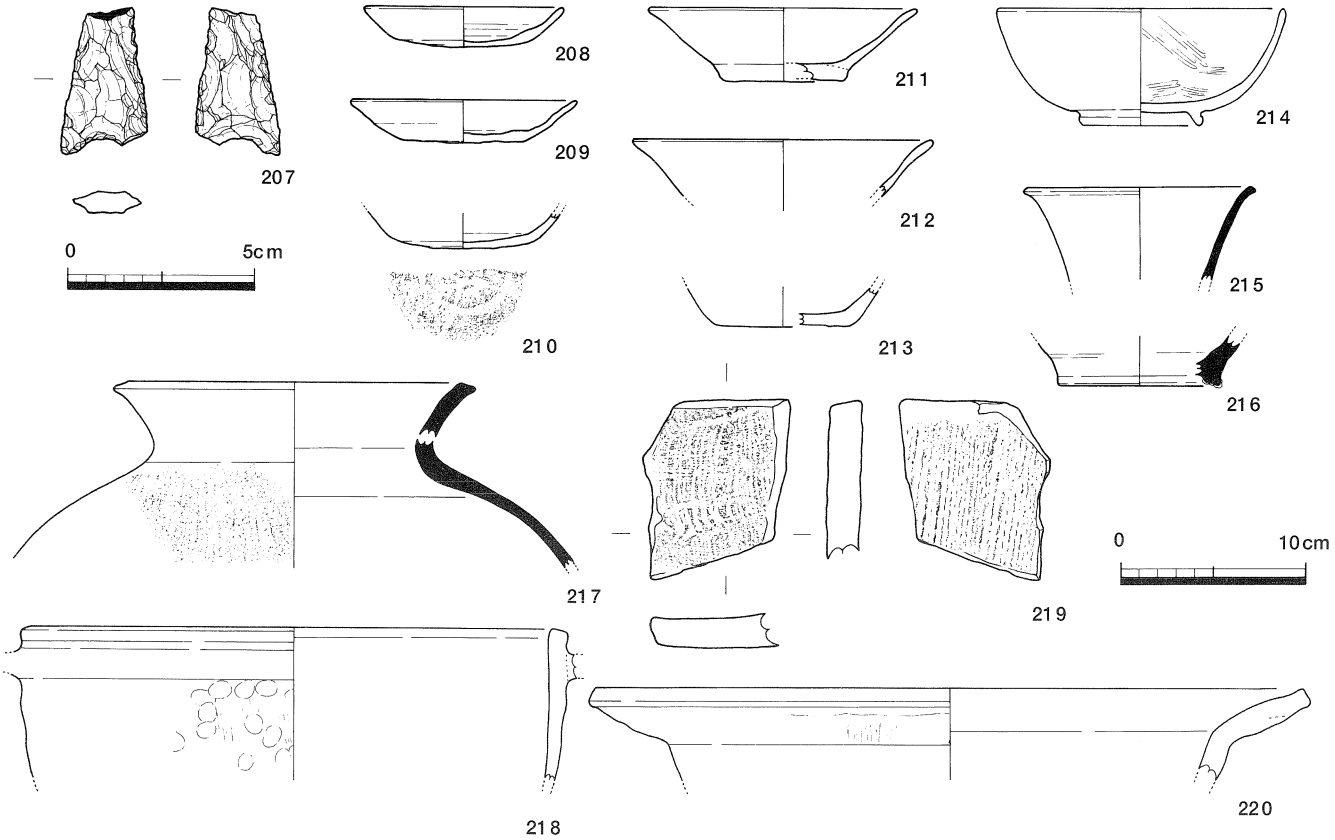
現有の道路に併走し，確認した南北方向の溝である。検出した標高はⅠ区で7.17～7.4m，Ⅱ区で7.10～7.19mを測り，底面は6.80～7.07mで緩やかに北へ下がる。検出距離は総延長で約37mを測り，検出幅は１.0～1.3mである。方位は現況の道路に平行するN－９°－E前後を示すが，Ⅰ区南半部で西方向に大きく湾曲する。この湾曲部付近では溝の上位に砂層が広範囲で被覆している状況が認められ，また西方向に伸びる幅0.6m程の支流部が検出されている。断面の形状は，全区間に亘り西壁は急傾斜で，東壁は段を伴いながら緩やかに立ち上がる壁面となっている。底面では中央が窪む凹形だが，Ⅱ区南部ではW形となる箇所が認められる。埋土は概ね上位に灰白色砂及び褐灰色シルトが堆積し，下位に褐灰色砂混りシルトが鉄分の沈着を伴い認められる。所属時期は出土遺物より平安時代後半と考えられる。

出土遺物（第72図）を報告するが，土器の形式・年代観については佐藤編年（佐藤 1995・2000）を参考とした。207は凹基式石鏃である。208～213は土師器坏・皿である。208・209は体部の外傾度及び法量より皿ＢⅠ型式に相当するものと考えられる。210は底部ヘラ切りである。211・212の坏は体部が大きく開き，口縁部も長く外反する。211は上底状の平坦な底部で坏Ａ型式に相当する。213は坏底部。器壁がやや厚く，体部の開きがやや小さいことから坏Ｃに該当する可能性が考えられる。214は黒色土器椀で，ほぼ完形で出土した。両面黒色で，径高指数41，高台高0.7ｃｍ，同径6.3ｃｍを測り椀ＡⅡ－３型式に該当する。215は須恵器壺の口縁部である。「ハ」の字形に開き，端部はやや外方向に摘み出す。壺ＢⅠ型式に相当する。216は


SD02
T,N
SD01
遺構平面図（1/200）
0
5m
SD02
断面
T,N
SD01
断面1
Ⅱ区
T,N
SD01
断面2
0
5m
Ⅰ区
遺構平面図（1/100）
E
W
L=7.3m
①
②
③
④
⑤
Ⅱ区南壁土層図（1/40）
①：現耕作土
②：花崗土（旧仮設道跡）
③：10BG5/1 青灰色～5Y5/1 灰色シルト
④：7.5YR6/1 褐灰色シルト
⑤：7.5YR4/1 褐灰色砂混シルト（Fe沈着）
④,⑤：SD01埋土
E
W
L=7.3m
①
②
③
④
⑤
SD01 断面図1（1/40）
①：10YR8/1 灰白色～6/1 褐灰色極細砂
②：10YR5/1 褐灰色シルト
③：10YR7/1 灰白色細砂
④：7.5YR6/1 褐灰色シルト（Fe沈着）
⑤：7.5YR4/1 褐灰色砂混シルト
（地山を塊状に含む，Fe沈着）
E
W
L=7.4m
①
②
③
SD01 断面図2（1/40）
①：10YR7/1 灰白色細砂
②：7.5YR6/1 褐灰色シルト（Fe沈着）
③：7.5YR4/1 褐灰色砂混シルト（Fe沈着）
0
1m
E
W
L=7.2m
①
SD02 断面（1/20）
①：2.5Y6/1 黄灰色極細砂
0
50m

第71図　遺構平・断面図

高台をもつ須恵器底部。217は須恵器甕である。体部に格子目状の叩き痕を有し，口縁端部を短く掻き出し凹面をもつ。甕C－2型式に相当する。218は土師器羽釜である。鍔が欠損するが口縁部の形態より羽釜CⅠ型式に該当する。219は平瓦。凹面に布目痕，凸面に縄叩き痕を残す。220は土師器甕ないし鍋である。口縁端部の特徴から甕EⅡ－1型式に相当すると考えられる。以上より，一部須恵器等に古相のものが存在するが概ねⅠ－3期（12世紀前半）までの時期が考えられる。



第72図　SD01 出土遺物実測図（縮尺1/4）

SD02（第71図）

Ⅱ区北部，東端部で確認した溝状遺構である。大半が調査地外に存在するため，詳細は不明である。検出した標高は7.14mを測り，SD01とほぼ併走する方位で検出された。埋土には黄灰色土が認められている。遺物が出土せず，所属時期は不明である。

e．まとめ

当調査地は現況では六条・林町の町境にあたり，推定条里では山田郡12里での6・7条界線上に相当する。この境界がSD01の確認により，平安時代後半期には存在していたと考えられる。またSD01（或は枝部）は，南部で大きく屈曲し西に向かう様に認められ，なお且つ溝壁面が西側で急となる状況から，西部を中心に当該期の遺構が所在する可能性が想定される。

No.18 六条町36号線（平成10年度確認調査）

1　調査概要

a．場　所　　六条町

b．期　間　　平成10年10月20日～22日

c．面　積　　約65㎡

d．担当者　　小川賢

2　調査内容

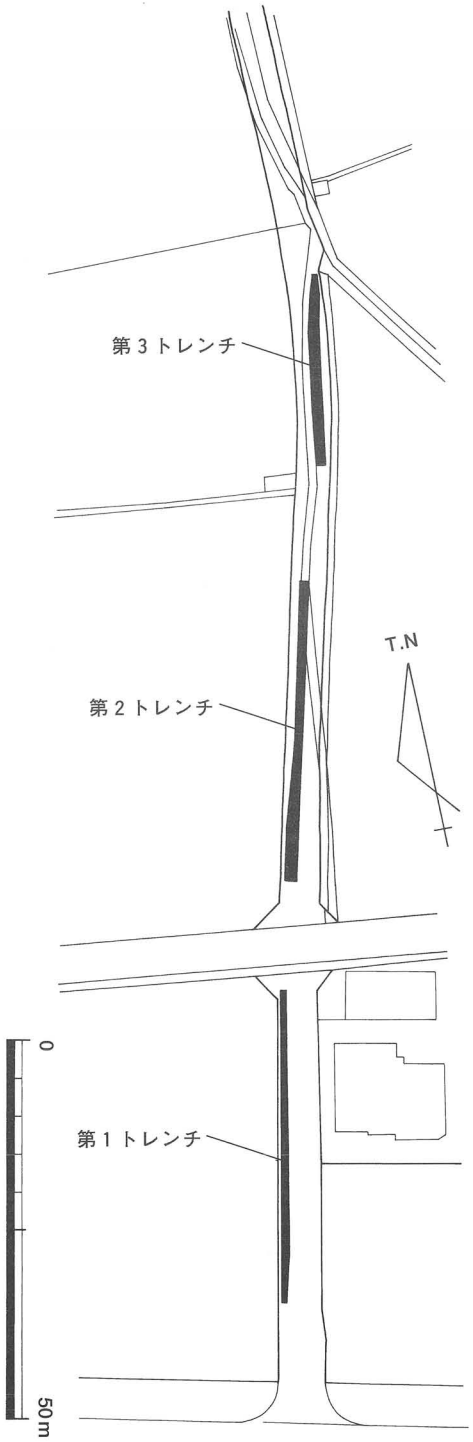
当路線は弥生時代～近世期に至る六条・上所遺跡に北接し，また，ほぼ新規の工事であることから確認調査を行った。

第１～３トレンチの３箇所を設定した。南部の第１トレンチでは，地山と考えられる黄色系粘質土の上部に黒褐色土の堆積が数十㎝程認められた。地山は北方向に落ち込んでいき，第２・３トレンチでは砂層が厚く堆積して認められた。いずれのトレンチにおいても遺構・遺物は皆無であった。

以上のような結果から，工事に先立つ保護措置は不要と判断した。

写真９　第２トレンチ土層堆積状況

写真10　第３トレンチ土層堆積状況



第73図　六条町36号線トレンチ配置図
（縮尺1/1000）

No.19 六条上川西遺跡（六条町38号線　平成12年度調査）

1　調査概要

a．場　所　　六条町

b．期　間　　平成12年10月24日～31日

c．面　積　　約158㎡

d．担当者　　小川賢・中西克也

2　調査内容（第74・75図）

当路線は弥生時代～近世に至る六条・上所遺跡に南接し，また工事の延長距離が長いことから確認調査を行った。路線南端部は既存の道路となっているが，その他は耕作地であり南北の用水路に沿って第１～５トレンチを設定した。

第１トレンチでは，地表の約60cm下で褐灰色砂質シルト層の堆積が10cm程度認められ，以下砂礫層となっていた。遺構検出はこの砂礫層上面で行い土坑状の遺構を１基確認した。遺物は出土せず時期は不明である。第２トレンチでは，地表の約80cm下で旧河道の堆積物とみられる黒褐色粘質土及び褐灰色砂質土層が認められた。下位の砂礫層まで合せて約50cmの堆積であったが，遺構・遺物は認められなかった。第３トレンチでは，黒褐色粘質土堆積が60cm程に増し旧河道の最深部付近と推定される。若干量の弥生土器・サヌカイト片等が認められた。第４トレンチは微高地と想定され，地表の約70cm下で安定した黄色シルト層上面で弥生時代を中心とした遺構・遺物が確認できた。第５トレンチでは，再度，黒褐色粘質土が認められるようになり，南部にも低地ないし旧河道の存在が想定される。遺構・遺物は認められなかった。

以上の結果から，第４トレンチで認められた遺構について工事範囲内で確認範囲を広げ調査を行い，当機会で記録保存を行い，他の範囲については事前の保護措置は不要と判断した。

写真11　第１トレンチ東壁土層堆積状況

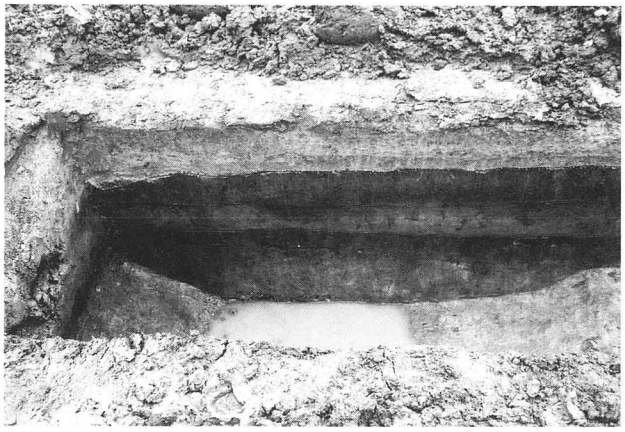


写真12　第２トレンチ東壁土層堆積状況

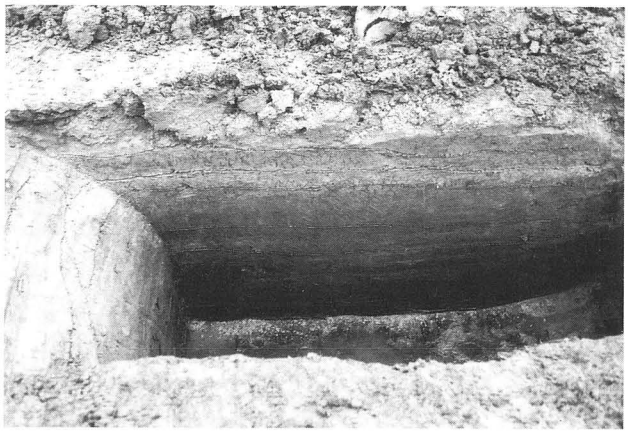
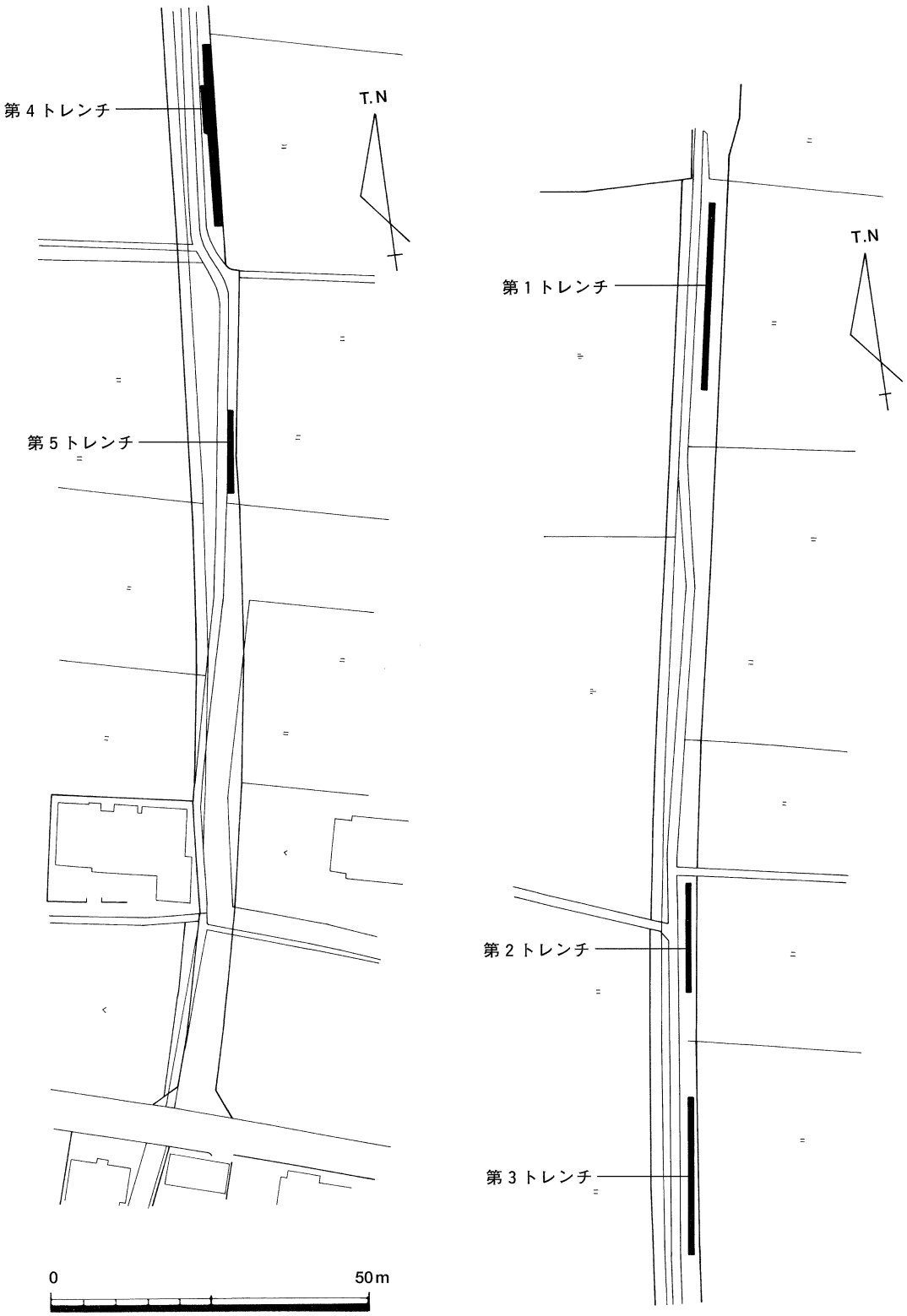
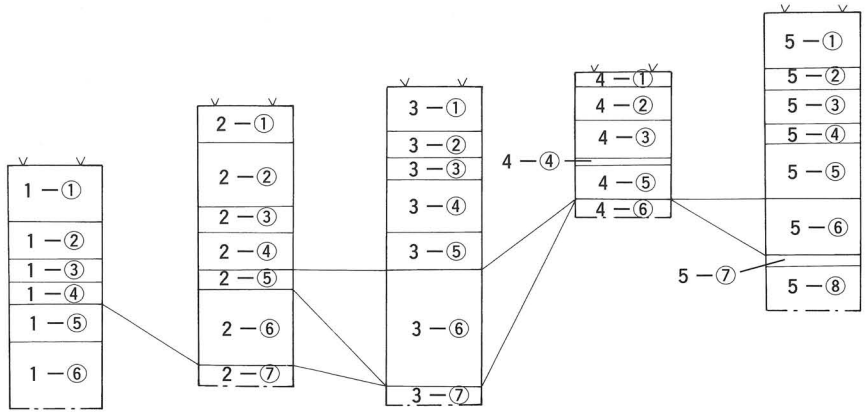


写真13　第３トレンチ東壁土層堆積状況

写真14　第５トレンチ東壁土層堆積状況



第74図　六条上川西遺跡（六条町36号線　平成12年度）トレンチ配置図（縮尺1/1000）



六条町38号線トレンチ東壁柱状土層図（1/40）

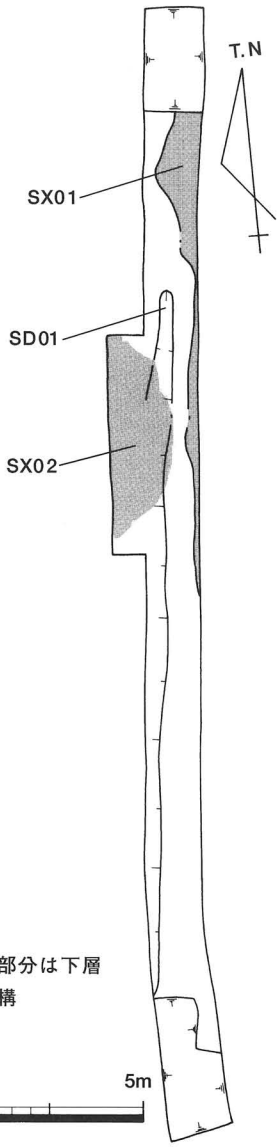
1-①：現耕作土
1-②：黄灰色シルト質極細砂
1-③：黄褐色粘土
1-④：褐灰色砂質シルト
1-⑤：砂礫
1-⑥：灰色砂

2-①：現耕作土
2-②：黄灰色シルト質細砂
2-③：灰褐色シルト
2-④：黄色シルト質粘土
2-⑤：黒褐色シルト質粘土
2-⑥：灰褐色砂質シルト
2-⑦：灰色砂礫

3-①：現耕作土
3-②：灰緑色シルト質極細砂
3-③：黄灰色シルト質極細砂
3-④：灰褐色砂混シルト
3-⑤：褐灰色砂質シルト
3-⑥：黒褐色シルト質粘土
3-⑦：灰色砂礫

4-①：現耕作土
4-②：黄灰色シルト質極細砂
4-③：灰褐色砂混シルト
4-④：黄褐色砂
4-⑤：灰色砂
4-⑥：黄色シルト

5-①：現耕作土
5-②：にぶい黄色シルト質極細砂
5-③：暗灰黄色砂混シルト質極細砂
5-④：灰黄色微砂
5-⑤：灰色砂
5-⑥：黒褐色粘土
5-⑦：灰黄色シルト
5-⑧：灰黄色砂礫



第４トレンチ遺構配置図（1/200）

第75図　六条町38号線トレンチ土層図・配置図

第４トレンチ遺構・遺物

SD01（第75図）

現有の水路に沿って確認した溝である。以北のトレンチにおいても部分的に認められていたが，当トレンチで溝として検出された。検出した標高は7.65m前後で，検出幅は約15cm，深度は５cm程度であった。坪界線上に位置する溝と考えられるが，現有水路と重複するため遺存状況は悪い。出土遺物より中世のものと考えられる。

出土遺物（第77図）のうち，233は備前大甕の口縁部である。玉縁状口縁で，端面に稜は見られない。14世紀後半～15世紀代の時期が考えられる。

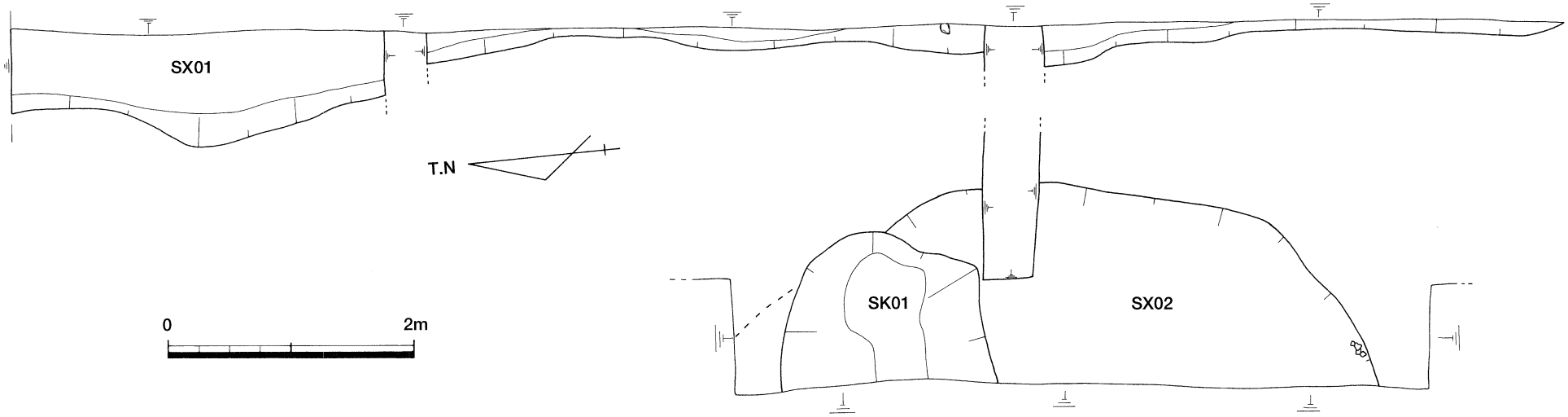
SX01（第76図）

調査地の東壁に沿って確認した遺構である。大半が調査地外に広がるものと考えられ，全容は不明である。検出した標高は7.53～7.65mを測り，底面は7.48m前後を測る。検出長は約12.5mで，検出幅は最大で約0.9mである。断面は船底形と考えられ，埋土は黒褐色土である。出土遺物より弥生時代のもの考えられる。

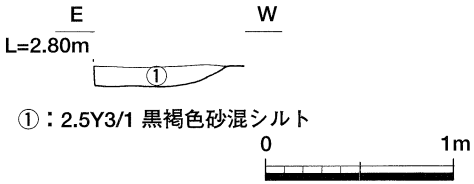
出土遺物（第77図）のうち，227は弥生土器壺底部である。胎土中に砂粒を多量に含み，弥生時代前期のものと考えられる。

SX02（第76図）

調査地の西半で確認した遺構である。径約５mの円形状に検出し，竪穴住居址の可能性が想定されたため，

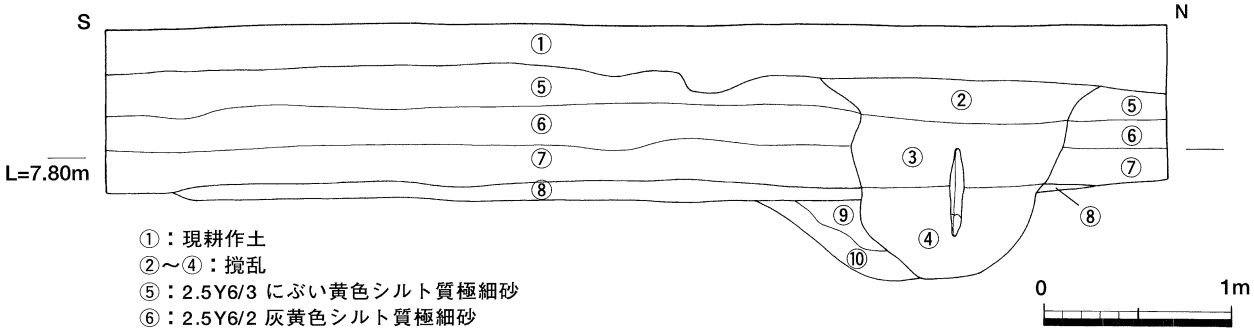


SX01・02・SK01 平面図（1/50）



①：2.5Y3/1 黒褐色砂混シルト

SX01 断面図（1/40）



①：現耕作土
②～④：撹乱
⑤：2.5Y6/3 にぶい黄色シルト質極細砂
⑥：2.5Y6/2 灰黄色シルト質極細砂
⑦：5Y6/2 灰オリーブ色砂
⑧：2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト（SX02埋土）
⑨：10YR3/1 黒褐色粘質シルト
⑩：2.5Y4/1 灰黄色砂礫混シルト
⑨,⑩：SK01 埋土

第４トレンチ拡張部分西壁土層図（1/40）

第76図　第４トレンチ下層検出遺構平・断面図

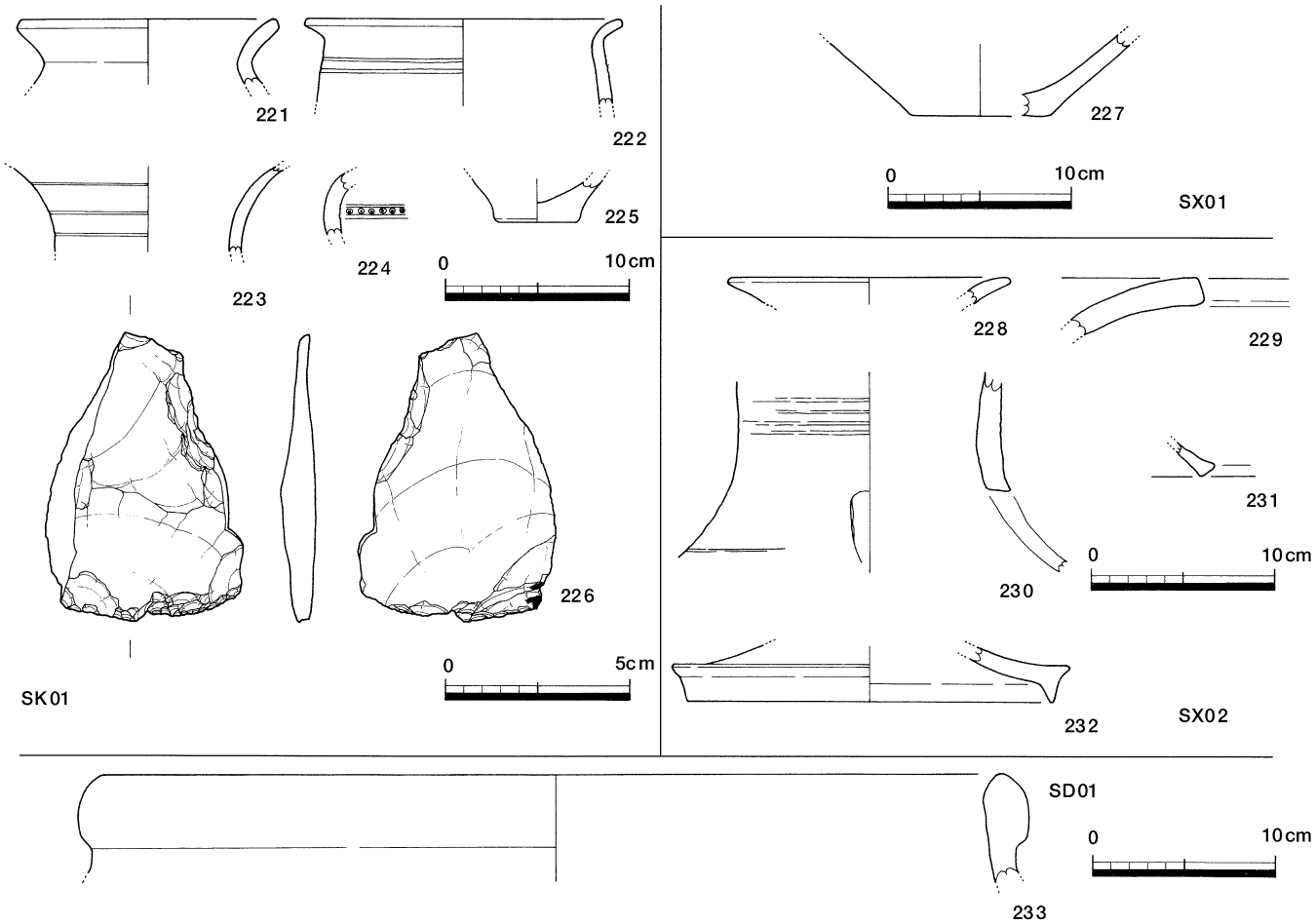
トレンチを工事範囲内で拡張し確認を行った。検出した標高は7.61～7.69ｍを測り，底面は7.53ｍで前後を測る。埋土は黒褐色粘質土層の単層である。西側は現有水路の撹乱のため遺存状態は悪く，また柱穴も認められないことから当遺構の性格は不明である。所属時期は出土遺物より，弥生時代後期と考えられる。

出土遺物（第77図）のうち，228は短く「ハ」字形に開く壺口縁部である。229は大きく外反する広口壺の口縁部である。228・229は胎土の特徴からも前期のものと考えられ，SK01からの混入した可能性が考えられる。230は器台の筒部で，裾部へ「ハ」字形に開き方形のスカシ及び凹線が施される。231・232は脚部である。232は裾端部を上下に拡張する。

SK01（第77図）

調査地の西半，SX02の底面で確認した土坑である。検出した標高は7.47～7.62ｍを測り，底面は7.15ｍ前後を測る。検出長は東西に約1.25ｍ，南北に約1.75ｍを測る。西側に広がるが撹乱の影響が大きく，やや不整形な方形状に検出された。所属時期は，出土遺物から概ね弥生時代前期と考えられる。

出土遺物（第77図）のうち，221は壺で，太い頸部より強く屈曲する。222の甕は，口縁部が如意状で，体部上半に２条の沈線文が施される。胎土には角閃石が認められる。223は壺の頸部である。３条の沈線文が認められる。224は甕頸部で，２条の沈線間に竹管文を施す。226はサヌカイト片である。



第77図　SK01・SX01・02・SD01 出土遺物実測図（縮尺：土器1/4，石器：1/2）

e．まとめ

確認調査により，北部及び南部に旧河道と考えられる堆積が認められた。当地の東には古川・春日川が併走して流れており，当河川に注ぐ埋没流路の存在が想定される。この流路に面し，第４トレンチの微高地上では弥生時代を中心とした遺構・遺物が確認できた。微高地での調査範囲が矮小であったため詳細は不明だが，南西部を中心に微高地が広がるものと想定され，当該期の遺構が所在する可能性が考えられる。

No.20 六条町38号線（平成13年度確認調査）

1　調査概要

a．場　所　　六条町

b．期　間　　平成13年10月12日～15日

c．面　積　　約110㎡

d．担当者　　小川賢

2　調査内容

当路線は周辺部に林下所遺跡，六条・上所遺跡が所在し，また新規となる工事区間が長いため確認調査を行った。確認調査では，8箇所のトレンチを設定した。何れのトレンチでも表土直下で地山と考えられる黄色粘土層に達し，その上面で遺構の確認を行なった。その結果，第1・2・5トレンチで南北方向の溝を検出した。第5トレンチの溝は，一定の規模をもつが遺物は出土しなかった。東部では近・現代の撹乱が多く，遺構確認は困難であった。結果，溝が数箇所において認められたが，トレンチ全体でも遺物が皆無であり時期不明であった。全体に削平を受けた可能性が高く，工事範囲についても同様の結果が想定されたため，工事に先立つ保護措置は不要と判断した。

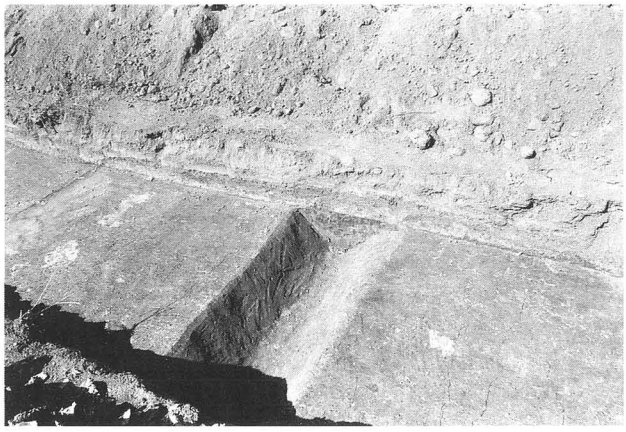


写真15　第2トレンチ溝跡

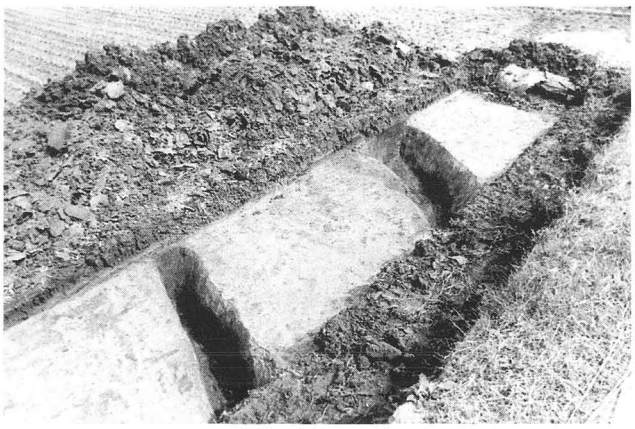
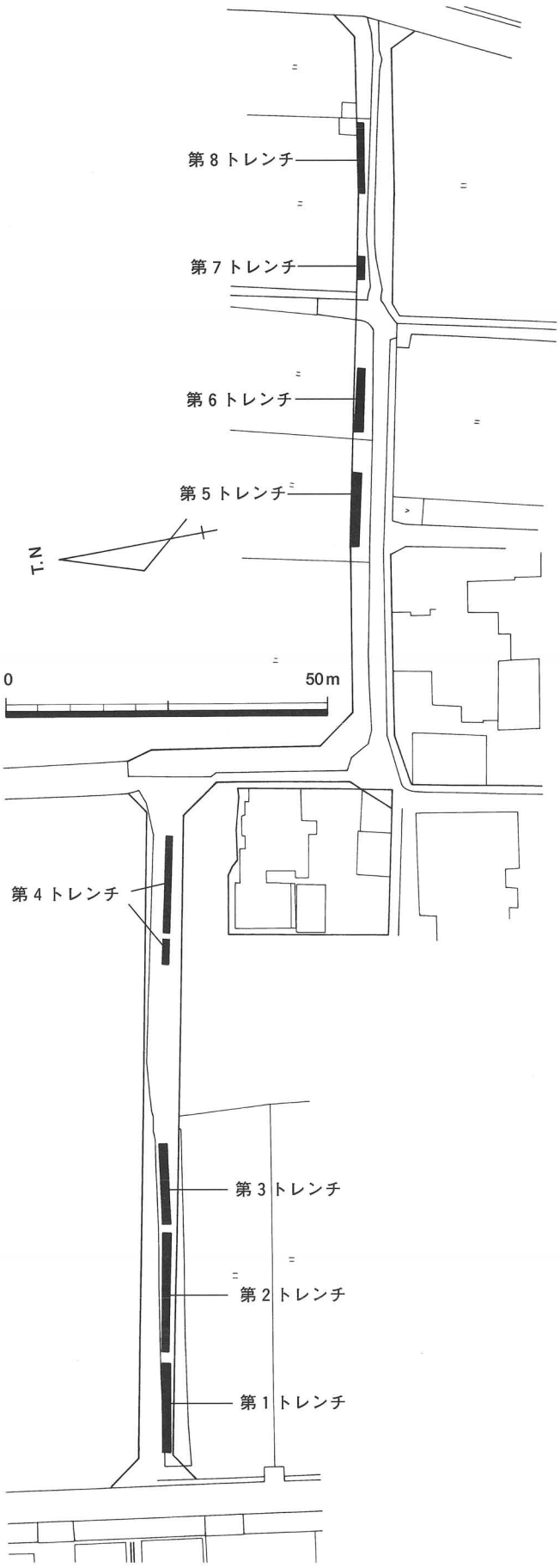


写真16　第5トレンチ溝跡



第78図　六条町36号線平成13年度トレンチ配置図（縮尺1/1000）

No.21 六条西村遺跡（林町23号線　平成15年度調査）

1　調査概要

a．場　所　　六条町

b．期　間　　平成15年７月22日～31日

c．面　積　　約100㎡

d．担当者　　小川賢・末光甲正

2　調査内容

a．調査の経緯（第79図）

当路線の周辺部には，林・坊城遺跡及び六条・上所遺跡が所在しており，路線の東西区間については，ほぼ新規の道路工事であることから遺構確認を行った。トレンチは路線の西半分に第１トレンチ，東部に第２トレンチを設定し調査を行った。第１トレンチでは，近世の土坑及び溝を確認した他，トレンチの東端部で埋没流路と考えられる砂層及び黒色土の厚い堆積層が認められた。当流路の堆積中から遺物は出土しなかった。当埋没流路の東部は，礫層～黄色粘質土が上昇し微高地となっていた。この微高地上となる第２トレンチでは，一定規模を有する溝が多数認められた。

この結果から，近世の遺構・遺物のみ確認した第１トレンチについては事前の保護措置を不要と判断し，遺構密度の高い第２トレンチを調査の対象とした。なお当路線の工事予定地に接し，塚（猫塚）の伝承のあるマウンドが位置し，現状で約１ｍの範囲において僅かな高まりが認められた。地権者及び高速交通対策室との協議により，猫塚を現状で保存することとなった。

b．遺構の概要（第80図）

南北方向の溝が20ｍ足らずの範囲において，７条(SD01～07)確認している。何れも黒褐色の埋土で，明瞭な掘り方をもつものが多い。東西方向では，現況の地割りとほぼ合致する溝（SD08）の他，柵列状遺構（SA01）が認められた。また現況の農道にほぼ接する調査地の南壁に沿い，近世の土坑及び小規模な溝が認められた。

c．基本土層

現況の耕作土が20～30㎝程度認められ，その下位に近世期の堆積層と考えられる淡黄色シルト質極細砂層が10㎝程度堆積し，この直下で地山と想定される黄色系粘土層が認められた。遺構検出はこの上面で行った。

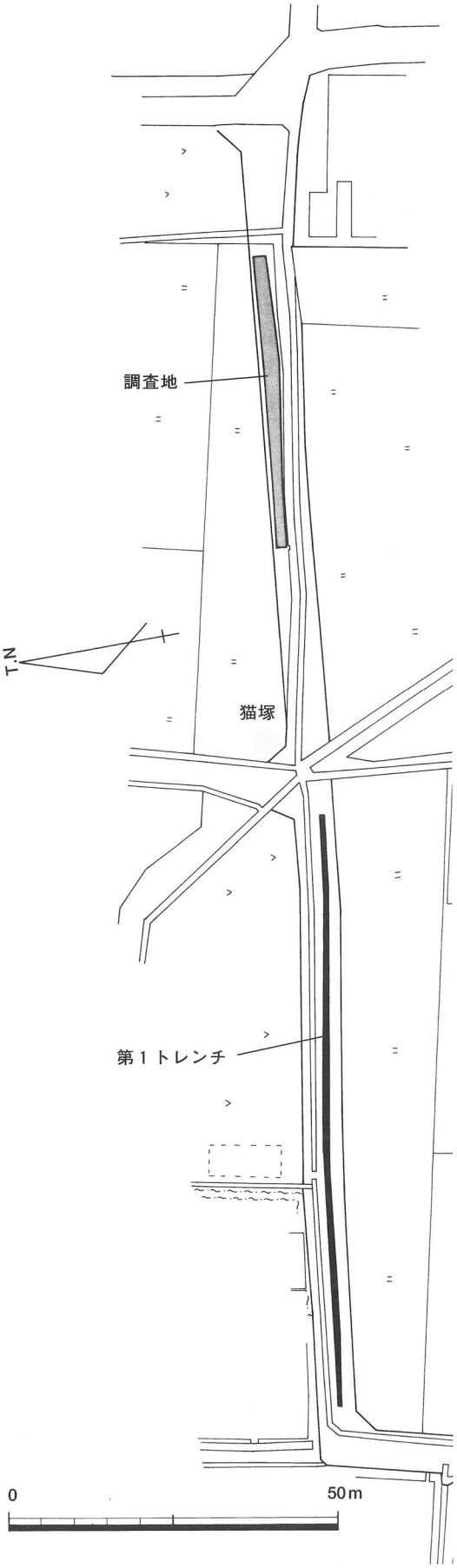
d．遺構・遺物

SA01（第80図）

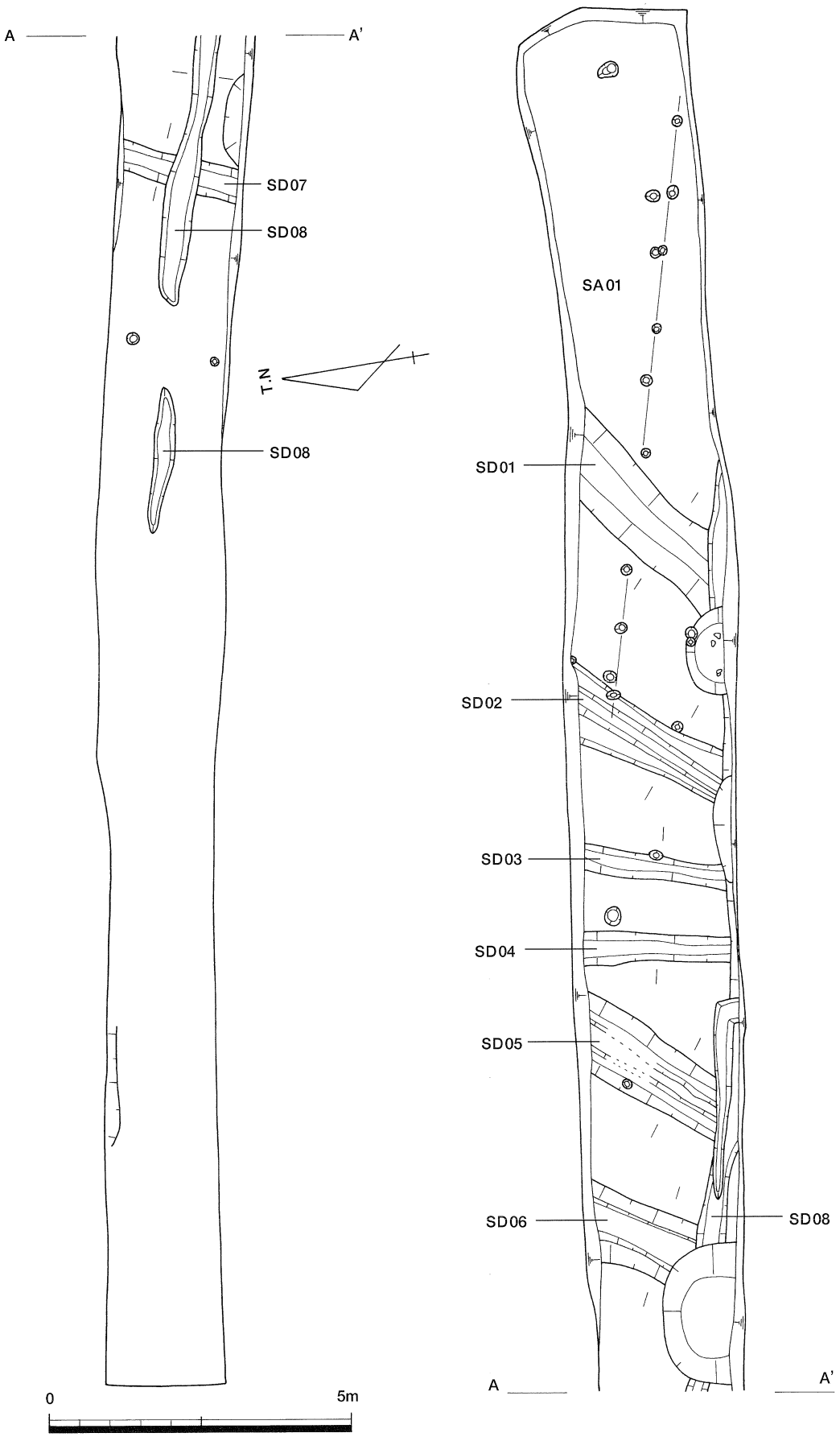
調査地南部で確認した柵列である。柱間距離は0.9ｍと1.2ｍ前後のものに大別される。検出した標高は10.22～10.3ｍを測る。主軸はＮ－104°－Ｅ前後を示す。各柱穴は15㎝前後の円形状に検出され，深度は10～30㎝を測る。出土遺物がなく時期不明だが，現況の地割及びSD08に主軸が近似し，古代～近世と想定される。

SD01（第80・81図）

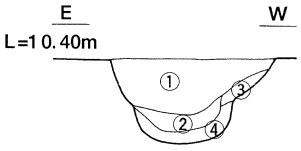
調査地の東端部で確認した溝である。検出した標高は10.26ｍ前後，底面は9.88ｍ前後を測る。検出長は約2.8ｍで，検出幅約1.2ｍを測る。北東に伸び，Ｎ－50°－Ｅ前後の方位を示す。南端部でSD08に切られる。断面の形状はＵ字形を重ねた形となっている。埋土は上層に灰黄褐色砂質シルト，中層に粘性のある黒



第79図　六条西村遺跡（林町23号線）
調査位置図（縮尺1/1000）

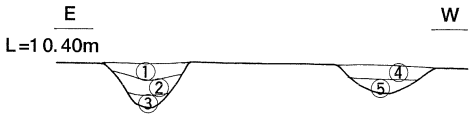


第80図　遺構平面図（1/100）



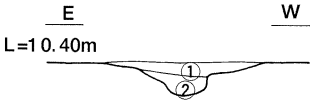
SD01

①：10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
②：10YR3/1 黒褐色砂質シルト（やや粘質）
③：10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
④：10YR4/4 褐色シルト混砂



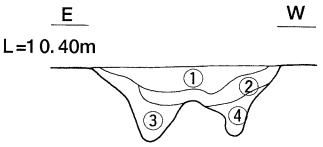
SD03　SD04

①：2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト
②：2.5Y4/2 暗灰黄色砂質シルト（やや粗）
③：2.5Y3/2 黒褐色砂質シルト（やや粘質）
④：2.5Y5/2 暗灰黄色砂質シルト
⑤：2.5Y5/3 黄褐色シルト混細砂



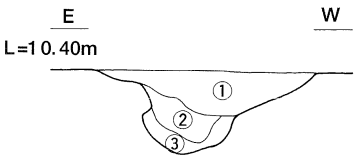
SD02

①：10YR4/3 にぶい黄褐砂質シルト
②：10YR4/2 灰黄褐色シルト混砂



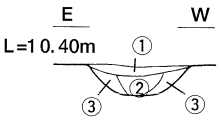
SD05

①：10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト
②：10YR3/2 黒褐色砂質シルト（やや密）
③：10YR5/3 にぶい黄褐色砂質シルト
④：10YR4/4 褐色砂質シルト



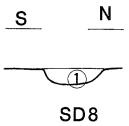
SD06

①：10YR3/2 黒褐色砂質シルト（礫混じり）
②：10YR3/4 暗褐色砂質シルト（やや粗）
③：10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト（やや粗）



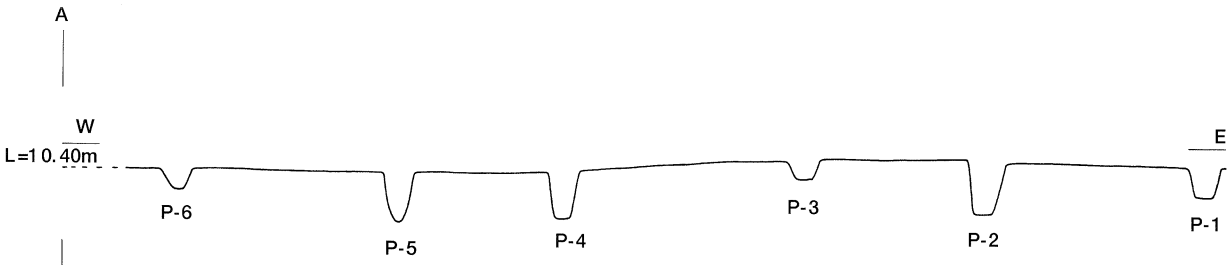
SD07

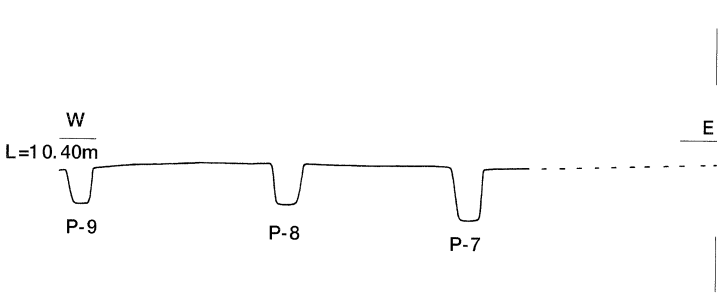
①：10YR4/3 にぶい黄褐色砂質シルト
②：10YR4/2 灰黄褐色砂質シルト（やや密）
③：10YR6/4 にぶい黄橙色砂質シルト



SD8

①：2.5Y6/2 灰黄色砂質シルト
（やや密，円礫を含む）



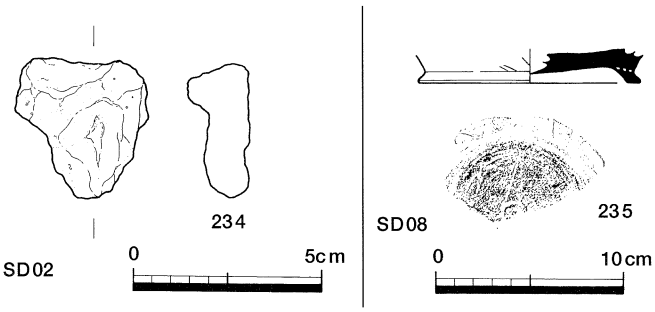


第81図　遺構断面図（縮尺1/40）

褐色砂質シルト，下層に砂質土が堆積している。所属時期を示す出土遺物はないが，SD08との前後関係及び埋土の特徴から弥生時代～古墳時代と推定される。

SD02（第80・81図）

調査地の東部で確認した溝である。検出した標高は10.26m前後，底面は10.07～10.11mを測り緩やかに北東へ下がる。検出長は約2.8mで，検出幅0.8～1.2mを測る。N－42°－E前後の方位を示す。南端部でSD08及び近世期の土坑に切られる。断面の形状は壁面の中位に段が付き，上部は緩やかに立ち上がる。埋土は中位の段部を境に2層に分層された。明瞭な時期を示す遺物はないが，SD08との前後関係及び埋土の特徴から古墳時代を中心に推定される。



第82図　SD02・08出土遺物実測図（縮尺1/4）

出土遺物（第82図）のうち，234は鉄製品である。錆が著しく，器種は不明である。

SD03（第80・81図）

調査地の東半部で確認した溝である。検出した標高は10.26m前後，底面は10.05m前後を測る。検出長は約2.3mで，検出幅0.4～0.5mを測る。N－18°－E前後の方位を示す。南端でSD08及び近世期の土坑に切られる。断面の形状はU字形で，埋土は3層に分層できた。時期を示す出土遺物はないが，SD08との前後関係及び埋土の特徴から古墳時代～古代と推定される。

SD04（第80・81図）

調査地の東半部で確認した溝である。検出した標高は10.26m前後，底面は10.12m前後を測る。検出長は約2.4mで，検出幅0.5～0.6mを測る。N－8°－E前後の方位を示す。南端でSD08に切られる。断面の形状は船底形で，埋土は2層に分層できた。時期を示す出土遺物はないが，SD08との前後関係及びこれにほぼ直交する位置関係より古代頃と推定される。

SD05（第80・81図）

調査地中央で確認した溝である。検出した標高は10.27m前後，底面は9.87m前後を測る。検出長は約2.4mで，検出幅1.0～1.2mを測る。N－41°－E前後の方位を示す。南端部で近世期の溝状遺構に切られる。断面の形状はW形をし，埋土は上層に灰黄褐色砂質シルト，中層に黒褐色砂質シルト，下層に砂質土が堆積している。時期を示す出土遺物はないが，規模及び方向性等でSD01と共通し，同時期頃のものと考えられる。

SD06（第80・81図）

調査地中央部で確認した溝である。検出した標高は10.27m前後，底面は9.83m前後を測る。検出長は約1.6mで，検出幅約1.2mを測る。N－35°－E前後の方位を示す。南端部でSD08及び近世期の土坑に切られる。断面の形状は，中位に段が付き，西面の壁面が抉れる。埋土は3層に分層できた。時期を示す出土遺物はないが，規模及び方向性等でSD01と共通し，同時期頃のものと考えられる。

SD07（第80・81図）

調査地中央部で確認した溝である。検出した標高は10.31m前後，底面は10.15m前後を測る。検出長は約2.0mで，検出幅約0.5mを測る。N－23°－E前後の方位を示す。SD08に切られる。断面の形状は船底形で，埋土は3層に分層できた。時期を示す出土遺物はないが，規模及び方向性等でSD03・SD04に共通し，同時期頃のものと考えられる。

SD08（第80・81図）

調査地を東西に横断した形で，確認した溝である。検出した標高は10.25～10.32mで，底面は10.13～10.25mを測り東へ下がる。検出長は約20mだが，断続し西方向に伸びる。検出幅約0.4～0.5mを測る。やや蛇行気味だが，概ねN－102°－E前後の方位を示す。断面の形状は船底形で，埋土は灰黄色土の単層である。出土遺物より古代のものと考えられる。

出土遺物（第80・81図）は1点のみであった。235は須恵器底部である。高台内及び高台脇に線刻が認められる。

e．まとめ

調査地の東半分で，南北方向の溝が多数確認された。出土遺物は希薄であったが，規模及び方向より各期に開削されているものと考えられる。北に近接する六条・上所遺跡では，弥生時代後期～古墳時代にかけて同方向を示す溝が多数確認されており，当地で確認された溝群はこの上流に相当する可能性が考えられる。

高速交通出土遺物観察表

※法量の()は，残存値を表す。

報告番号	器種	口径	底径	器高	調整	色調	胎土	備考
1	須恵器 甕	30.8		(10.0)	外面:回転ナデ，ハケメ 内面:指押さえ後回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N5/～灰	密	外面頸部:自然釉付着
2	石鏃	(長さ) 2.3	(幅) 1.8	(厚さ) 0.3				重さ:0.8g 白色風化サヌカイト
3	須恵質土器 坏	12.8	6.8	3.9	外面口縁～体部:回転ナデ　底部:回転ヘラ切り 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y8/1 内面:灰白5Y8/1	粗	
4	須恵質土器 坏	12.4	7.8	3.7	外面体部:回転ナデ　底部:回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰白N8/ 内面:灰白N8/	やや密	
5	須恵器 坏		6.8	(2.6)	外面坏部:回転ナデ 底部:板ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y8/1 内面:灰白5Y8/1	やや密	
6	須恵器 坏	12.6	6.8	3.9	外面口縁～体部:回転ナデ　底部:回転ヘラキリ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	
7	黒色土器椀 底部		6.6	(1.3)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:褐灰10YR5/1 内面:褐灰10YR5/1	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	
8	須恵器 甕	25.0		(16.0)	外面口縁部:回転ナデ，体部:平行タタキ 内面口縁部:回転ナデ，体部:当て具痕，ナデ	外面:灰白N8/ 内面:灰白N8/	密	
9	土師器 甕	22.4		(4.0)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:灰白10YR7/1 内面:灰黄褐10YR6/2	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
10	土師器 甕	26.0		(4.3)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/2 内面:にぶい黄橙10YR7/2	2mm以下の石英・長石・雲母を含む	
11	土師器 竈			(14.5)	外面:ナデ，指押さえ 内面:ナデ，指押さえ	外面:にぶい黄橙10YR7/2 内面:にぶい黄橙10YR7/2	1mm以下の石英・長石を含む	
12	須恵器 坏蓋		12.2	(3.9)	外面:回転ヘラケズリ，回転ナデ 内面:回転ヘラケズリ，回転ナデ	外面:灰白N8/ 内面:灰白N8/	やや密	
13	須恵器 坏蓋			(3.2)	外面:回転ナデ，回転ヘラケズリ 内面:ナデ	外面:灰白N7/1 内面:灰白N7/1	やや粗	
14	須恵器 坏身	9.0		(2.1)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	青灰5B6/1 明青灰5B7/1	密	
15	須恵器 坏(皿)	14.2		(2.8)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	やや密	
16	須恵器 高坏			(1.6)	外面:回転ナデ 内面:ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	
17	須恵器 坏蓋			(2.6)	外面:回転ナデ 内面:ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	
18	須恵器 甕			(3.6)	外面:回転ナデ 内面:ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	外面:自然釉付着
19	須恵器 壺			(12.0)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	
20	須恵器 壺		14.0	(17.0)	外面体部:回転ヘラケズリ 内面体部:ナデ，指押さえ	外面:黄灰2.5Y6/1 内面:黄灰2.5Y5/1	密	頸部から肩部にかけ自然釉付着 肩・高台部に熔着痕
21	須恵器 甕	20.6		(5.8)	外面口縁部:回転ナデ　体部:カキ目 内面口縁部:回転ナデ　体部:当て具痕	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	やや密	
22	須恵器 甕	22.0		(5.3)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N7/	密	
23	須恵器 甕			(7.7)	外面頸部:回転ナデ　体部:タタキ後カキ目 内面:当て具痕	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	密	
24	須恵器 甕	33.0		(9.3)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	外面口縁部:烈点状刺突文 頸部:ハケ原体による縦位施文 後横位沈線区画
25	土師器 鉢	15.2		(6.9)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:にぶい褐7.5YR6/3 内面:灰黄褐10YR6/2	1mm以下の石英・長石を含む	
26	土師器 鉢	14.8		(2.5)	外面:ヘラケズリ，接合痕 内面:ナデ	外面:淡橙5YR8/3 内面:淡橙5YR8/4	2mm以下の石英・長石を含む	
27	土師器 鉢	18.4		(4.5)	外面:ヨコナデ，ヘラケズリ 内面:摩滅のため不明	外面:にぶい橙7.5YR7/3 内面:にぶい橙7.5YR7/3	1mm以下の石英・長石を含む	
28	黒色土器 椀		8.4	(2.5)	外面:ナデ 内面:摩滅のため不明	外面:にぶい黄橙10YR7/4 内面:灰黄褐10YR6/2	1mm以下の石英・長石を含む	
29	土師器 壺	13.2		(3.4)	外面口縁部:ヨコナデ　体部:タテハケ 内面口縁部:ヨコナデ　体部:板ナデ	外面:にぶい褐7.5YR6/3 内面:浅黄橙7.5YR8/3	0.5mm以下の石英・長石を含む	
30	土師器 甕	18.0		(4.3)	外面口縁部:ヨコナデ　体部上半:タテハケ 内面口縁部:ナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/2 内面:にぶい黄橙10YR7/2	1mm以下の石英・長石を含む	
31	土師器 甕	25.0		(3.2)	外面口縁部:ヨコナデ　頸部:タテハケ 内面口縁部:ヨコナデ　体部上半:ハケ，接合痕	外面:にぶい黄橙10YR7/4 内面:にぶい黄橙10YR7/4	1mm以下の石英・長石を含む	
32	土師器 甕			(9.3)	外面:タテハケ，接合痕 内面:ヨコハケ	外面:にぶい褐7.5YR5/4 内面:にぶい褐7.5YR6/3	1～2mmの石英・長石を含む	外面:黒斑
33	土師器 鍋	29.6		(6.2)	外面:ナデ 内面体部:ヨコナデ，接合痕	外面:橙5YR6/6 内面:にぶい橙5YR6/3	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
34	土師器 鍋	27.6		(6.4)	外面:ナデ 内面:ヨコハケ，接合痕	外面:橙5YR6/6 内面:橙5YR6/6	1mm以下の石英・長石を含む	
35	土師器 鍋	28.8		(6.2)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい橙5YR6/4 内面:にぶい橙7.5YR7/3	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
36	土師質土器 坏	10.2		(2.5)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:にぶい橙7.5YR7/3 内面:浅黄橙7.5YR8/3	1mm以下の石英・長石を含む	
37	土師質土器 坏	11.0		(2.6)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/3 内面:浅黄橙7.5YR8/3	やや密	
38	土師質土器 坏	10.0		(2.1)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:灰白7.5YR8/2 内面:灰白7.5YR8/2	やや密	
39	土師質土器 坏	12.0		(2.4)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:灰白10YR8/1 内面:灰白10YR8/1	1mm以下の石英・長石を含む	
40	土師質土器 坏	9.8		(1.8)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:灰白10YR8/2 内面:灰白10YR8/2	やや密	
41	土師質土器 坏	11.0		(2.9)	外面:ヨコナデ 内面:摩滅のため不明	外面:浅黄橙7.5YR8/3 内面:浅黄橙7.5YR8/3	やや密	
42	土師質土器 坏	9.6		(2.5)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰白10YR8/1 内面:灰白10YR8/1	密	
43	土師質土器 坏	11.0		(2.5)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/3 内面:浅黄橙7.5YR8/3	1mm以下の石英・長石を含む	
44	土師質土器 坏	10.4		(1.7)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白10YR8/1	密	
45	土師質土器 坏	11.6		(1.7)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	2mm以下の石英・長石を含む	
46	土師質土器 坏	9.8		(1.9)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:灰白10YR8/2 内面:灰白10YR8/2	やや密	
47	土師質土器 坏	12.2		(1.9)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:浅黄橙7.5YR8/4 内面:浅黄橙7.5YR8/3	1mm以下の石英・長石を含む	

報告番号	器種	口径	底径	器高	調整	色調	胎土	備考
48	土師質土器 坏	10.0		(1.2)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:灰白7.5Y8/1 内面:灰白7.5Y8/1	やや密	
49	土師質土器 坏	13.0		(1.5)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	1mm以下の石英・長石を含む	
50	土師質土器 坏	9.8		(1.8)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	やや密	
51	土師質土器 坏	14.2		(2.6)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:灰白7.5YR8/2 内面:灰白7.5YR8/2	やや密	
52	土師質土器 坏		5.2	(1.3)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:褐灰10YR6/1	1mm以下の石英・長石を含む	
53	土師質土器 坏	13.0		(2.9)	外面:ヨコナデ 内面:ナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/4 内面:浅黄橙7.5YR8/3	やや密	
54	土師質土器 坏		5.6	(2.0)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:灰白10YR8/1 内面:灰白10YR8/1	2mm以下の石英・長石を含む	
55	土師質土器 坏		9.0	(1.6)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/3 内面:浅黄橙7.5YR8/3	やや密	
56	土師質土器 坏		7.2	(1.2)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:にぶい橙5YR7/4 内面:にぶい橙5YR7/4	密	
57	土師質土器 坏		7.0	(0.9)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:灰白10YR8/2	1mm以下の石英・長石を含む	
58	土師質土器 坏		6.4	(1.8)	外面:回転ナデ, ナデ 内面:ナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/3 内面:灰白7.5YR8/2	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
59	土師質土器 足釜	20.6		(1.9)	外面:ヨコナデ, 指押さえ 内面:ヨコナデ, 指押さえ	外面:浅黄橙10YR8/2 内面:浅黄橙10YR8/2	1mm以下の石英・長石を含む	鍔に煤付着
60	土師質土器 足釜	24.2		(4.2)	外面口縁部:指押さえ　体部:指押さえ後ハケメ 内面:ハケメ	外面:にぶい黄橙10YR7/3 内面:にぶい黄橙10YR7/3	1mm以下の石英・長石を含む	外面:煤付着
61	土師質土器 足釜	22.2		(4.4)	外面:指押さえ 内面:ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/4 内面:橙7.5YR7/4	1mm以下の石英・長石を含む	
62	土師質土器 鍋	30.8		(2.3)	外面:ハケメ, 指押さえ 内面:ハケメ	外面:褐灰10YR6/1 内面:にぶい黄橙10YR7/2	1mm以下の石英・長石を含む	
63	瓦質土器 鉢			(5.0)	外面:叩き痕？ 内面:ヨコナデ	外面:灰N4/ 内面:灰N4/	やや密	
64	土師質土器 鍋			(2.7)	外面:ヨコナデ, 指押さえ 内面:ナデ	外面:にぶい黄橙10YR6/3 内面:にぶい黄橙10YR6/3	1mm以下の石英・長石を含む	
65	土師質土器 鍋			(1.7)	外面:ナデ, ハケメ 内面:ナデ, ハケメ	外面:にぶい褐7.5YR5/3 内面:にぶい黄橙10YR7/3	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	
66	土師質土器 鍋			(1.8)	外面口縁端部:ヨコハケ　口縁部:タテハケ 内面口縁部:ヨコハケ	外面:にぶい黄橙10YR7/2 内面:灰白10YR8/2	1mm以下の石英・長石を含む	
67	土師質土器 脚			(8.8)	外面:板ナデ, ナデ	外面:にぶい褐7.5YR6/3	1mm以下の石英・長石を含む	
68	土師質土器 脚			(9.1)	外面:板ナデ, ナデ	外面:にぶい褐7.5YR6/3	1mm以下の石英・長石を含む	
69	土師質土器 脚			(6.6)	外面:ナデ	外面:にぶい褐7.5YR5/4	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
70	土師質土器 脚			(4.8)	外面:ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/3	1mm以下の石英・長石を含む	
71	土師器 底部		7.8	(1.6)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:明赤褐5YR5/8 内面:明赤褐5YR7/1	0.5mm以下の石英・長石, 2mmの長石を含む	
72	須恵質土器 底部		11.8	(2.5)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰N6/ 内面:7.5Y7/1	やや密	
73	サヌカイト片	(長さ) 5.0	(幅) 3.7	(厚さ) 0.7				重さ:20.0g
74	染付 段重	7.3	4.4	3.0	内面:ロクロナデ 外面:ロクロナデ	釉:灰白5GY8/1 断面:灰白2.5Y8/1	精良密	
75	土師質土器 椀	6.2		(2.3)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰白2.5Y8/2 内面:灰白2.5Y8/2	密	
76	土師質土器 坏	8.4		(1.5)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白10YR8/1	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
77	土師質土器 坏	9.4		(1.8)	外面口縁～体部:ナデ 底部:回転ヘラきり 内面:ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y8/1	1mm以下の石英・長石を含む	
78	土師質土器 坏	8.2		(1.7)	外面口縁～体部:ナデ 底部:回転ヘラきり 内面:ナデ	外面:灰白10YR8/1 内面:灰白10YR8/2	1mm以下の石英・長石を含む	
79	土師質土器 坏	9.0	5.0	1.8	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:淡赤橙2.5Y7/4 内面:淡赤橙2.5Y7/4	密	
80	土師質土器 坏	9.0	5.2	1.6	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/4 内面:にぶい橙7.5YR7/4	1mm以下の石英・長石を含む	
81	土師質土器 坏	9.5	5.4	1.7	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰白7.5Y8/2 内面:灰白7.5Y8/2	0.5mm以下の石英・長石・雲母を含む	
82	平瓦	(長さ) (7.8)			凸面:平行タタキ痕 凹面:布目	外面:にぶい黄橙10YR6/3	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
83	平瓦	(長さ) (9.4)			凸面:平行タタキ痕 凹面:布目圧痕	外面:橙7.5YR7/6 内面:橙7.5YR7/6	1mm以下の石英・長石を含む	
84	弥生土器 甕	11.6		(14.5)	外面体部:ヘラミガキ 内面:摩滅のため不明	外面:灰黄褐10YR5/2 内面:灰黄褐10YR6/2	1mm以下の石英・長石を含む	口縁端部:刻み目文 外面体部:刺突文
85	弥生土器 底部		11.8	(4.3)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:にぶい黄橙10YR7/2 内面:灰白10YR8/1	2mm以下の石英・長石を含む	外面底部:黒斑
86	弥生土器 底部			(3.3)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:橙2.5YR6/6 内面:灰黄2.5Y7/2	3mm以下の石英・長石を含む	
87	土師器 坏		12.0	(1.3)		外面:にぶい橙7.5YR7/3 内面:にぶい橙7.5YR7/3	1mm以下の石英・長石を含む	
88	須恵器 壺		13.0	(7.4)	外面:回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	
89	弥生土器 鉢	12.8		(4.4)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:にぶい黄橙10YR6/3 内面:灰黄褐10YR6/2	1mm以下の石英・長石を含む	
90	弥生土器 底部		6.4	(5.4)	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラケズリ	外面:にぶい褐7.5YR5/3 内面:にぶい褐7.5YR5/3	1mm以下の石英・長石を含む	
91	土師器 壺			(1.8)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:橙5YR6/6 内面:橙5YR6/6	1mm以下の石英・長石を含む	
92	土師器 口縁部			(2.2)		外面:にぶい橙7.5YR7/4 内面:にぶい橙7.5YR7/4	1mm以下の石英・長石を含む	
93	土師器 高坏			(2.7)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/4 内面:にぶい黄橙10YR7/3	2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
94	肥前系陶器 皿	11.8		(1.7)	外面:ナデ 内面:ナデ	釉:オリーブ黄5Y6/3 断面:灰白5Y8/1	密	
95	須恵器 口縁部	13.0		(1.4)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	

報告番号	器種	口径	底径	器高	調整	色調	胎土	備考
96	須恵器 脚部			(1.8)	外面:回転ナデ 内面:ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	
97	黒色土器 椀(内黒)		5.4	(1.4)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/3 内面:褐灰7.5YR4/1	1mm以下の石英・長石を含む	
98	陶器 口縁部	13.0		(0.7)	外面:ナデ 内面:ナデ	釉:灰10Y6/1 断面:灰黄褐10YR6/2	密	
99	備前焼 擂鉢			(2.8)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:灰白5Y7/1 内面:橙7.5YR7/6	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
100	刃器	(長さ) 6.1	(幅) 3.5	(厚さ) 0.7				重さ:16.6g
101	土師器 壺	11.0		(3.5)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/3 内面:にぶい橙5YR6/4	1mm以下の石英・長石を含む	
102	土師器 甕	20.6		(4.5)	外面:ナデ, ハケメ 内面:ナデ, ハケメ	外面:灰黄褐10YR5/2 内面:灰褐7.5YR5/2	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
103	須恵器 口縁部	17.0		(2.3)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	
104	須恵器 底部		4.4	(1.4)	外面:回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N6/	密	
105	須恵器 高坏	14.0		(5.2)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白N8/ 内面:灰白N8/	3mm以下の石英・長石を含む	外面坏部:凹線1条
106	須恵器 高坏		12.0	(9.0)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	やや密	脚部:凹線2条 上下2個のスカシ1対
107	須恵器 高坏脚部			(4.8)	外面:回転ナデ 内面:ヘラケズリ, ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	
108	須恵器 甕	20.2		(6.0)	外面口縁部:回転ナデ　体部:タタキ後カキ目 内面口縁部:回転ナデ　体部:当て具痕	外面:灰褐5YR4/2 内面:灰褐5YR4/2	密	
109	須恵器 甕	17.0		(4.2)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:暗灰N4/ 内面:灰N6/	密	内外面口縁部:自然釉付着
110	須恵器 坏身	15.2		(1.7)	外面口縁部:回転ナデ 内面口縁部:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	
111	須恵器 坏蓋			(1.7)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰6/ 内面:灰6/	密	
112	須恵器 坏身			(2.0)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰6/ 内面:灰5/	密	
113	須恵器 底部		8.4	(1.0)	外面底部:回転ヘラケズリ 内面底部:回転ヘラケズリ	外面:灰6/ 内面:灰6/	密	内外面:火襷
114	弥生土器 壺	14.6		(2.5)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい褐7.5YR6/3 内面:にぶい橙7.5YR7/4	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
115	弥生土器 甕	12.8		(6.4)	外面口縁部:ヨコナデ　体部上半:指押さえ 内面:ヘラケズリ	外面:にぶい橙7.5YR7/4 内面:明褐灰7.5YR7/2	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
116	弥生土器 壺頸部			(5.3)	外面頸部:ハケメ 内面頸部:摩滅のため不明	外面:にぶい黄褐10YR5/3 内面:黄灰2.5Y6/1	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	外面体部上半に櫛描き波状文
117	弥生土器 甕	6.6		(4.4)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:ハケメ 内面体部:ヘラケズリ	外面:にぶい褐7.5YR5/3 内面:にぶい黄橙10YR7/3	2mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
118	弥生土器 壺		4.6	(9.9)	外面体部:摩滅のため不明 内面体部:指押さえ	外面:褐7.5YR4/6 内面:にぶい黄橙10YR7/3	5mm以下の石英・長石・雲母を含む	
119	弥生土器 底部		11.2	(2.5)	外面底部:摩滅のため不明 内面底部:摩滅のため不明	外面:にぶい黄橙10YR7/2 内面:にぶい橙7.5YR7/3	3mm以下の石英・長石を含む	
120	弥生土器 高坏	21.6		(3.6)	外面口縁部:ナデ　坏部:ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面口縁部:ナデ　坏部:ヘラミガキ	外面:にぶい橙7.5YR6/4 内面:にぶい橙7.5YR6/4	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	口縁端部:凹線2条
121	弥生土器 高坏脚部		13.8	(3.8)	外面脚部:摩滅のため不明 内面脚部:ヘラケズリ	外面:灰黄2.5Y7/2 内面:灰黄2.5Y7/2	2mm以下の石英・長石・雲母を含む	
122	弥生土器 底部		8.0	(3.8)	外面底部:摩滅のため不明 内面底部:ナデ, ヘラケズリ	外面:にぶい褐7.5YR5/4 内面:にぶい黄橙10YR6/3	2mm以下の石英・長石・角閃石を含む	
123	弥生土器 甕		6.0	(3.7)	外面底部:ヘラミガキ 内面底部:ヘラケズリ	外面:にぶい赤褐5YR5/4 内面:褐灰7.5YR4/1	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	
124	弥生土器 底部		8.6	(3.2)	外面底部:摩滅のため不明 内面底部:ナデ	外面:赤橙10R6/8 内面:橙2.5YR6/8	2mm以下の石英・長石を含む	
125	須恵器 高坏蓋	14.6		(4.5)	外面:回転ヘラケズリ, 回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰6/ 内面:灰6/	やや密	外面:凹線1条
126	須恵器 坏蓋	11.2		(4.1)	外面:回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰N6/	密	
127	須恵器 坏蓋	13.0		(3.1)	外面:回転ナデ, 回転ヘラケズリ 内面:ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	
128	須恵器 坏蓋	13.8		(2.9)	外面:回転ナデ 内面:ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N6/	密	
129	須恵器 坏身	14.8		(2.9)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	
130	須恵器 高坏脚部			(7.1)	外面:ナデ 内面:ヨコナデ, 絞り目	外面:灰N5/ 内面:青灰5B5/1	やや密	脚部上段:現状1対のスカシ
131	須恵器 壺	10.4		(10.5)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰白N8/ 内面:灰白2.5Y8/1	やや密	
132	須恵器 壺		9.0	(13.8)	外面底部:回転ヘラケズリ　体部:回転ナデ 内面底部:指押さえ	外面:灰白10YR8/1 内面:灰白10YR8/1	やや密	
133	須恵器 高坏			(2.8)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	坏部:凹線1条
134	須恵器 坏身			(2.1)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	
135	須恵器 壺	13.5		(2.8)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	
136	須恵器 壺	14.6		(5.8)	外面:回転ナデ 内面頸部:回転ヘラケズリ　体部:回転ナデ	外面:灰6/ 内面:灰6/	密	
137	土師器 甕	19.4		(6.3)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:タテハケ 内面:ナデ	外面:橙2.5Y6/6 内面:灰黄褐10YR6/2	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	
138	弥生土器 壺	13.6	5.4	26.0	外面口縁部:ナデ　体部下半:ヘラミガキ 内面口頸部:ナデ　体部下半:ヘラケズリ	外面:にぶい褐7.5YR5/4 内面:にぶい褐7.5YR5/3	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	頸部外面:凹線2条 頸部内面:凹線3条
139	弥生土器 高坏	22.2		(2.7)	外面口縁部:ナデ 坏部:ヘラミガキ 内面口縁部:ナデ 坏部:ヘラミガキ	外面:褐7.5YR4/6 内面:褐7.5YR4/6	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
140	弥生土器 甕	14.0		(3.2)	外面口縁部:ナデ 体部:ハケメ 内面口縁部:ナデ 体部:指押さえ, ハケメ	外面:にぶい橙7.5YR6/4 内面:にぶい橙7.5YR6/4	2mm以下の石英・長石・雲母を含む	
141	弥生土器 甕	13.2		(6.8)	外面:ナデ 内面:ナデ, 指押さえ	外面:にぶい褐7.5YR5/3 内面:にぶい褐7.5YR5/3	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	口縁端部:凹線2条
142	弥生土器 甕		4.8	(2.2)	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラケズリ	外面:にぶい黄橙10YR7/3 内面:にぶい黄橙10YR7/3	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	
143	弥生土器 鉢	32.0		(1.9)	外面口縁部:摩滅のため不明 内面口縁部:摩滅のため不明	外面:黒7.5YR2/1 内面:橙7.5YR6/6	3mm以下の石英・長石・角閃石を含む	口縁端部:凹線3条
144	須恵器 底部		9.2	(0.9)	外面:ヘラケズリ 内面:ナデ	外面:灰6/ 内面:灰6/	密	

報告番号	器種	口径	底径	器高	調整	色調	胎土	備考
145	打製石器 石庖丁	(長さ) 6.4	(幅) 5.5	(厚さ) 1.2				重さ:65.3g サヌカイト
146	弥生土器 甕	12.0		(5.1)	外面:ナデ 内面口縁部:ナデ　体部:指押さえ	外面:灰褐7.5YR6/2 内面:にぶい黄橙10YR7/2	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	外面体部:黒斑
147	弥生土器 高坏脚部	15.0		(1.0)	外面:ヨコナデ 内面:ヘラケズリ	外面:にぶい黄橙10YR6/3 内面:にぶい黄橙10YR6/3	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	
148	弥生土器 甕		10.2	(5.4)	外面:ヘラミガキ, ナデ 内面:ヘラケズリ	外面:にぶい橙7.5YR6/4 内面:灰黄2.5Y7/2	2mm以下の石英・長石を含む	
149	弥生土器 底部		7.2	(2.1)	外面底部:摩滅のため不明 内面底部:摩滅のため不明	外面:灰褐5YR4/2 内面:橙5YR6/6	1～2mmの石英・長石を含む	
150	須恵器 底部		8.6	(1.8)	外面体部下半:回転ナデ　底部:回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:青灰10BG7/1 内面:青灰10BG6/1	密	
151	須恵器 坏蓋	9.8		(2.6)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白N8/ 内面:灰白N8/	密	
152	須恵器 坏身	7.8		(2.1)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	
153	須恵器 坏身	10.4		(1.8)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白2.5Y7/1 内面:灰白N8/	密	
154	須恵器 坏身	12.3		(2.0)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰白N7/	密	
155	須恵器 坏身	13.6		(2.3)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	
156	須恵器 坏身	12.0		(2.1)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	
157	須恵器 坏身	14.2		(2.1)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	1mm以下の石英・長石を含む	
158	須恵器 坏身(蓋？)	12.2		(2.8)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:褐灰7.5YR5/1	密	
159	須恵器 坏身		8.8	(2.3)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	
160	須恵器 坏蓋	8.8		(3.2)	外面:回転ヘラケズリ, 回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白N8/ 内面:灰白N8/	密	
161	須恵器 鉢	10.0		(5.2)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:褐灰5YR6/1 内面:灰白N7/	密	
162	須恵器 高坏脚部	12.4		(2.5)	外面:ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	
163	須恵器 坏蓋			(2.7)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y8/1 内面:灰白N8/	密	
164	須恵器 坏身			(1.6)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰白N6/ 内面:灰白N6/	密	
165	須恵器 高坏脚部			(1.9)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	
166	須恵器 高坏脚部			(1.0)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰N6/	密	
167	須恵器 甕	21.6		(2.8)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	
168	弥生土器 壺	18.2		(5.1)	外面口縁部:タテハケ 頸部:タテハケ 内面頸部:ヨコナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/2 内面:にぶい黄橙10YR6/4	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	口縁端部:凹線2条
169	土師器 把手				外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/4	1～2mmの石英・長石を含む	
170	陶器 小坏	8.0		(2.2)	外面:ナデ 内面:ナデ	釉:灰白2.5Y8/2 断面:灰白2.5Y8/1	精良	
171	青磁 碗	13.0		(3.1)	外面:ナデ 内面:ナデ	釉:明緑灰10GY7/1 断面:灰白5Y7/1	密	
172	石鏃	(長さ) 2.9	(幅) 1.8	(厚さ) 0.4				重さ1.1g
173	須恵器 坏蓋	11.2	5.6	3.3	外面天上部:回転ヘラケズリ 口縁部:回転ナデ 内面天上部:回転ヘラケズリ 口縁部:回転ナデ	外面:灰白10YR7/1 内面:灰白N7/	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	外面天上部:自然釉付着
174	土師器 小型丸底壺	6.5		7.7	内面:指押さえ 外面:指押さえ	外面:橙2. 5YR6/8 内面:橙2. 5YR6/8	2mm以下の石英・長石を含む	
175	須恵器 小形壺			(5.8)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ,接合痕	外面:灰N5/ 内面:灰白N7/	密	
176	土師器 高坏		9.6	(5.7)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:灰白5Y8/1 内面:灰黄2.5Y7/2	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	
177	土師器 甕			(3.0)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰褐7.5YR5/2 内面:明灰褐7.5YR7/2	1mm以下の石英・長石を含む	
178	須恵器 碾			(3.4)	外面:回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	体部:現状円孔1個
179	弥生土器 広口壺	35.8		(1.5)	外面:ヨコナデ, ハケメ 内面:ヨコナデ	外面:灰白10YR8/1 内面:灰白10YR8/1	1mm以下の石英・長石を含む	
180	須恵器 甕	27.2		(6.2)	外面:ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰7.5Y6/1 内面:灰7.5Y6/1	1mm以下の石英・長石を含む	
181	須恵器 高坏			(3.0)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰白5/ 内面:灰白N7/	密	
182	須恵器 高坏脚部			(1.0)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰7.5Y6/1 内面:灰白7.5Y7/1	密	
183	須恵器 甕			(4.1)	外面:格子目タタキ後カキ目 内面:ナデ, 当て具痕	外面:灰白2.5Y7/1 内面:灰白2.5Y7/1	やや密	
184	須恵器 坏蓋	14.2		(3.6)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	
185	須恵器 坏身	14.6		(4.6)	外面口縁～体部:回転ナデ 底部:回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白6/	密	
186	須恵器 甕			(9.4)	外面:格子目タタキ 内面:同心円文	外面:灰N4/ 内面:灰N6/	密	
187	土師器 坏	13.7		4.7	内面:摩滅のため不明 外面:摩滅のため不明	外面:橙5YR6/6 内面:橙5YR6/6	1mm以下の石英・長石を含む	
188	土師器 高坏脚部		10.4	(5.9)	外面:摩滅のため不明 内面脚柱部:絞り目　脚裾部:板ナデ	外面:橙5YR6/6 内面:橙5YR6/6	1mm以下の石英・長石・雲母を含む	
189	須恵器 甑		13.2	(7.7)	外面:回転ナデ, ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:灰白2.5Y7/1 内面:黄灰2.5Y6/1	密	
190	土師器 甕	25.0		(2.6)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:浅黄橙10YR8/2 内面:浅黄橙10YR8/3	1mm以下の石英・長石を含む	
191	須恵器 坏身	9.8		(2.8)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白5Y7/1 内面:灰白N7/	やや密	

報告番号	器種	口径	底径	器高	調整	色調	胎土	備考
192	須恵器 坏身			(1.9)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:褐灰10YR6/1 内面:褐灰10YR6/1	やや密	
193	須恵器 高坏脚部			(1.1)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	密	
194	鍛冶器滓	(長さ) 5.0	(幅) 6.0	(厚さ) 1.6				重さ:5.9g
195	須恵器 坏身	13.0		(3.3)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/	やや密	
196	須恵器 高坏			(1.9)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N6/ 内面:灰白N7/	密	外面杯部:沈線1条
197	土師器 高坏			(1.8)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:橙5YR6/8 内面:橙5YR6/6	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	
198	フイゴ 羽口部				外面:指押さえ	外面:灰白10YR8/2 内面:橙5YR6/8	2mm以下の石英・長石を含む	
199	鉄滓片	(長さ) 3.0	(幅) 2.1					重さ:7.6g
200	須恵器 坏蓋	13.0		(3.5)	外面:摩滅のため不明 内面:ナデ	外面:灰白7.5Y8/1 内面:灰白5Y7/2	やや密	
201	土師器 壺	14.0		(2.8)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:にぶい黄橙10YR7/2	2mm以下の石英・長石・雲母を含む	
202	土師器 鉢	16.2		(8.7)	外面:ハケメ, 接合痕 内面:ナデ, 接合痕	外面:灰白10YR8/1 内面:浅黄橙10YR8/3	1mm以下の石英・長石を含む	
203	弥生土器 壺			(4.7)	外面:ハケメ 内面:摩滅のため不明	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰黄褐10YR6/2	4mm以下の石英・長石・角閃石を含む	
204	須恵器 壺	19.0		(3.6)	外面:ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N6/	密	外面頸部:自然釉付着
205	須恵器 坏蓋			(2.1)	外面:回転ナデ, ヘラケズリ 内面:回転ナデ	外面:黄灰2.5Y6/1 内面:灰白2.5Y7/1	密	
206	須恵器 底部			(1.2)	外面:回転ヘラケズリ 内面:ナデ	外面:灰白7.5Y7/1 内面:灰白N7/	密	
207	石鏃	(長さ) 4.0	(幅) 2.3	(厚さ) 0.6				重さ:4.9g サヌカイト
208	土師器 坏	10.6	7.2	2.2	外面体部:回転ナデ 底部:回転ヘラ切り 内面:回転ナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/3 内面:浅黄橙7.5YR8/3	3mm以下の石英・長石を含む	
209	土師器 坏	12.0	6.4	2.3	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:橙5YR6/6 内面:橙5YR6/8	粗	
210	土師器 底部		3.6	(1.9)	外面体部:回転ナデ 底面:回転ヘラ切り 内面:回転ナデ	外面:明赤褐2.5YR5/8 内面:橙5YR7/6	1mm以下の石英・長石を含む	
211	土師器 坏	14.2	6.4	3.9	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰褐7.5YR5/2 内面:褐灰7.5YR4/1	2mm以下の石英・長石を含む	
212	土師器 坏	16.0		(3.0)	外面:ヨコナデ 内面:摩滅のため不明	外面:にぶい赤褐5YR5/4 内面:褐灰5YR4/1	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	
213	土師器 底部		6.6	(2.1)	外面:摩滅のため不明 内面:ナデ	外面:にぶい褐7.5YR5/4 内面:にぶい褐7.5YR5/4	2mm以下の石英・長石・雲母を含む	
214	黒色土器 椀	15.2	6.3	6.2	外面:ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	外面:黄灰2.5Y4/1 内面:黄灰2.5Y4/1	密	
215	須恵器 壺	12.0		(5.0)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:灰N5/	密	
216	須恵器 壺		8.7	(2.7)	外面:回転ヘラケズリ, ナデ 内面:ナデ	外面:灰N4/ 内面:灰白N7/	密	
217	須恵器 甕	17.6		(9.9)	外面体部:格子目タタキ 内面体部:当て具痕, 仕上げナデ	外面:灰N5/ 内面:灰白5Y7/1	密	
218	土師器 羽釜	29.0		(8.2)	外面:ハケメ, ヨコナデ, 指押さえ 内面:摩滅のため不明	外面:灰黄褐10YR6/2 内面:灰黄2.5Y7/2	3mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	
219	平瓦	(長さ) 9.6	(幅) 7.9	(厚さ) 1.7	凸面:縄タタキ痕 凹面:布目痕	外面:灰N6/	密	
220	土師器 鍋	38.2		(4.9)	外面口縁部:タテハケ, 接合痕 内面:ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/3 内面:明褐灰7.5YR7/2	1mm以下の石英・長石を含む	
221	弥生土器 壺	14.0		(3.4)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/4 内面:にぶい黄橙10YR7/3	2mm以下の石英・長石・雲母を含む	
222	弥生土器 甕	17.0		(4.8)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい黄橙10YR6/3 内面:にぶい褐7.5YR5/4	1mm以下の石英・長石・角閃石・雲母を含む	外面頸部:沈線2条
223	弥生土器 壺			(4.0)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:浅黄2.5Y7/4 内面:灰黄褐10YR6/2	7mm以下の石英・長石, 1mm以下の雲母を	外面頸部:沈線3条 沈線に赤色顔料付着
224	弥生土器 甕			(3.6)	外面:ヨコナデ 内面:ナデ	外面:にぶい黄褐10YR6/4 内面:浅黄2.5Y7/3	2mm以下の石英・長石・雲母を含む	外面:凹線2条, 竹管文
225	弥生土器 底部		4.2	(2.4)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:灰黄2.5Y7/2 内面:灰黄2.5Y7/2	3mm以下の石英・長石を含む	
226	剥片	(長さ) 7.9	(幅) 5.4	(厚さ) 1.0				重さ:40.7g
227	弥生土器 底部		7.6	(4.5)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:にぶい黄橙10YR7/2 内面:にぶい褐7.5YR5/4	2mm以下の石英・長石を含む	
228	弥生土器 広口壺	15.2		(1.5)	外面:摩滅のため不明 内面:摩滅のため不明	外面:灰白2.5Y8/2 内面:灰白10YR8/2	3mm以下の石英・長石を含む	
229	弥生土器 広口壺			(3.3)	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/3 内面:にぶい黄橙10YR7/3	3mm以下の石英・長石を含む	
230	弥生土器 器台			(10.9)	外面:ナデ 内面:ナデ, 接合痕	外面:明褐7.5YR5/6 内面:明褐7.5YR5/6	1～2mmの石英・長石・角閃石・雲母を含む	外面:凹線上段4条 下段1条
231	弥生土器 高坏			(1.8)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい褐7.5YR5/4 内面:にぶい褐7.5YR5/4	1mm以下の石英・長石・角閃石を含む	
232	弥生土器 脚部		19.6	(3.0)	外面:ナデ 内面:ナデ	外面:にぶい褐7.5YR5/4 内面:黒7.5YR1.7/1	1～2mmの石英・長石・雲母を含む	内面:黒斑
233	肥前焼 大甕	49.2		(5.9)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ	外面:灰N5/ 内面:赤褐10R4/3	2mm以下の石英・長石を含む	
234	鉄製品	(長さ) 3.6	(幅) 3.6	(厚さ) 1.2				重さ:24.7g
235	須恵器 底部		11.6	(1.8)	外面体部:回転ナデ 底部:線刻 内面:ナデ	外面:灰白N7/ 内面:灰白N7/		

第４章　まとめ

四国横断自動車道関連特別用地対策事業は，高速道路建設により影響を受ける周辺地域の道路や水路等整備事業であるが，中でも大きな影響を受けるインターチェンジ（IC）周辺での事業量が多かったことから，これに伴い埋蔵文化財調査も高松中央IC付近となる高松市林町～六条町，高松西IC付近となる高松市檀紙町～中間町周辺において行ってきた。平成８年度～15年度に亘る調査であったが，道路拡幅部分が大半を占め，細いトレンチ（試掘溝）を上記地域の各所に掘った形となった。このため，検出した遺構の意義付けが困難であった反面，遺跡の広がりを把握する点では有効な調査であった。また現有の道路・農道に沿った範囲の調査が多く，これに合致した溝・畦の確認により，各地区での（条里型）地割りの施工状況がうかがわれるものが随所で認められた。高松中央IC及び高松西IC周辺部の調査は，さらに２小地区に細分でき，本章では地区ごとに遺跡の確認状況を概観し，まとめとしたい。

【檀紙町～中間町周辺】

《檀紙町北部》：高松西ICの北側に位置する（注１）。四国横断自動車建設に先立ち，中森遺跡や八幡遺跡が香川県埋蔵文化財調査センターにより発掘されている。本報告で掲載している中森遺跡の南北方向の溝は，現況の地割に合致しており中世段階まで遡ることが判明した。溝内では石積み状の遺構が認められ，遺物もまとまって出土していることから，県調査により検出されている中世集落を構成する一つの要素となる可能性がある。

《中間～御厩町・檀紙町南部》：高松西ICから北東方向の地域である（注２）。香川県埋蔵文化財調査センターが調査した古代集落遺跡である正箱・薬王寺遺跡が知られており，この遺跡では条里地割に規制された集落構造が確認されている。一方，古川を挟んで対岸の縁辺部に位置する津内・東井坪遺跡（本報告書掲載）では，平安時代に属する条里地割とは一致しない溝が検出され，中・近世期になり条里地割に合致し里界に相当するとみられる大畦畔が検出されている。このことから古川の西岸或は流域周辺部においては，条里制施工が遅れることが考えられる。また当地区で行われた確認調査及び工事立会では，近世のものを除くと遺構・遺物は希薄であることから，これら周辺部は近世になり開発が進んだ地区である可能性が考えられる。

【林町～六条町周辺】

《林町周辺》：高松中央ICから北方向の地域である。中央ICの直下は，縄文時代晩期～古代期にかけての林・坊城遺跡が所在する。現況の地割の乱れが示す様に，北方へ向く当該期の埋没河川の存在が考えられ，林下所遺跡はその両岸域に位置している。微高地上では，当河川と併走する様に弥生時代前期の溝が，林下所墓地や林町８号線内で確認された。林町65号線及び林下所・木太今村上所遺跡では，当河川より発するとみられる北東方向の支流部を認め，古墳時代以降と想定される埋没までの間に各期の遺構・遺物が確認された。この地域はこれまで遺跡の空白地帯であったが，特に古墳時代後期～終末期にかけての掘立柱建物跡や溝といった集落を構成する遺構は，高松平野全体においても確認事例が少数であるため，重要である。今後，この時期の遺跡調査が進めば丘陵部に群集する古墳群との対比が可能であり，注目すべきものである。古代以降では，六条町・林町との境となる六条乾・林下所遺跡で条界線上の溝の他，林下所・木太今村上所遺跡でも現況の地割に合致する溝・畦が認められる。

《六条町》：高松中央ICから東方向の地域である。確認した遺構・遺物はやや希薄であったことから，各期において集落の縁辺であった可能性が考えられる。この地域も遺跡の所在については不明であったが，六条上川西遺跡及び六条西村遺跡の所在が判明した。六条上川西遺跡は東を流れる古川・春日川流域の西端に属し，中世以降に安定した地割となったことが想定される。これ以前は流路及び低地が大半部を占め，南部の微高地において弥生時代の遺構・遺物を確認し，南西部を中心に弥生集落が所在する可能性が考えられる。一方，六条西村遺跡では，西側に現況の地割り及びトレンチ調査により林・坊城遺跡に至る北西方向の流路が想定され，その東岸の微高地上に六条・上所遺跡の上流部とみられる弥生時代～古代の水路が確認されている。

（注１，２）高松西ICは，ハーフIC，２箇所の総称であり，檀紙町所在のもの（注１），中間町所在のもの（注２）がある。

引用文献・主要参考文献

北山健一郎1995『高松道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第５冊　六条・上所遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
佐藤竜馬1995「香川十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設40周年記念　考古学論叢』
佐藤竜馬2000『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第４冊　空港跡地遺跡Ⅳ』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
信里芳紀・野崎隆亨「八幡遺跡」「中森遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成11年度』香川県教育委員会ほか
廣瀬常雄・西村尋文『県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　正箱遺跡・薬王寺遺跡』香川県教育委員会ほか
宮崎哲治1993『高松道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第２冊　林・坊城遺跡』（財）香川県埋蔵文化財調査センター
森下栄治1999「中森遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報　平成10年度』香川県教育委員会ほか
山本英之・山元敏裕1993『一般国道11号線高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１冊　谷・長池遺跡』高松市教育委員会ほか

報告書抄録

ふりがな	つない・ひがしいつぼいせき，なかもりいせき，はやしさこいせき，はやしげしょいせき，はやしげしょ・きたいまむらじょうしょいせき，はやしげしょ・ろくじょういぬいいせき，ろくじょうかみかわにしいせき，ろくじょうにしむらいせき
書名	津内・東井坪遺跡，中森遺跡，林谷遺跡，林下所遺跡，林下所・木太今村上所遺跡，林下所・六条乾遺跡，六条上川西遺跡，六条西村遺跡
副書名	四国横断自動車道関連特別用地対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第７４集
編集者名	小川　賢
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760-8571　香川県高松市番町一丁目８番15号　TEL 087(839)2636
市町村コード	３７２０１
発行年月日	平成１６年３月３１日

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
林谷遺跡 (林町 61 号線)	集落	中世	坪界線上溝	須恵質土器	
林下所遺跡 (林町 60 号線)	集落	近世	溝状遺構	土師質土器皿	
林下所遺跡 (林下所墓地)	集落	弥生時代	溝状遺構	弥生土器	
林下所遺跡 (林町 8 号線)	集落	弥生時代	溝状遺構	弥生土器	
林下所遺跡 (林町 60 号線)	集落	古墳時代	土坑	須恵器	
林下所遺跡 (林町 65 号線)	集落	古墳時代	掘立柱建物	土師器・須恵器	
六条上川西遺跡 (六条町 38 号線)	集落	弥生時代	土坑	弥生土器	
津内・東井坪遺跡 (檀紙町 55 号線)	集落	平安時代	大畦畔・溝状遺構	土師器・須恵器	蔵骨器出土
中森遺跡 (檀紙町 27 号線東)	集落	鎌倉時代	坪界線上溝	土師質土器坏	
林下所・木太今村上所遺跡 (林町 8 号線)	集落	古墳時代	掘立柱建物	土師器・須恵器・鍛冶器滓	集落内で鍛冶関連遺物出土
林下所・六条乾遺跡 (林町 70 号線)	集落	平安時代	坪界線上溝	鉄犀	
六条西村遺跡 (林町 23 号線)	集落	古墳時代	溝状遺構	須恵器	

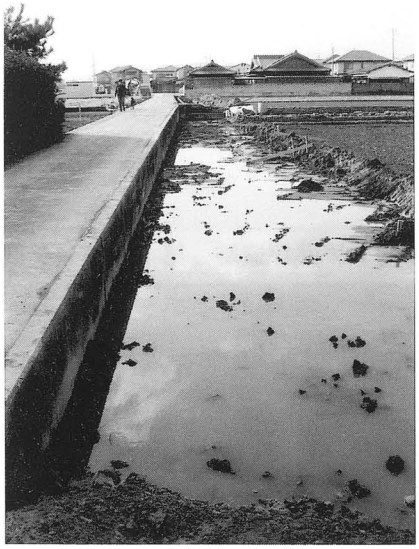
四国横断自動車道関連特別用地対策事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

津内・東井坪遺跡，中森遺跡，林谷遺跡，
林下所遺跡，林下所・木太今村上所遺跡，
林下所・六条乾遺跡，六条上川西遺跡，
六条西村遺跡

編集・発行　高松市教育委員会
　　高松市番町一丁目８番15号
発行日　平成１６年３月３１日
印刷　有限会社 中央ファイリング

林浴遺跡（林町61号線）調査地全景

林浴遺跡 条里坪界線



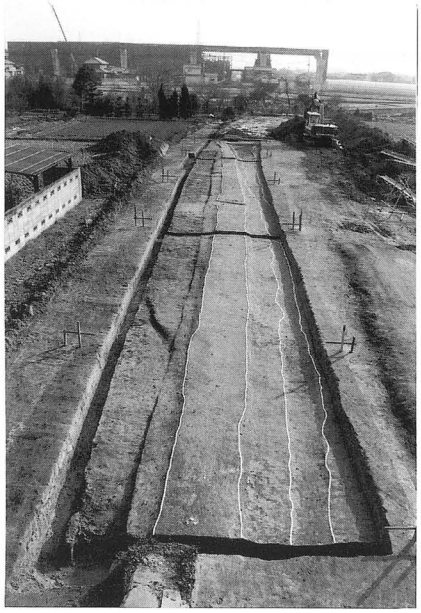
林下所遺跡（林町60号線）
平成10年度　工事立会箇所全景

林下所遺跡（林町60号線）
平成10年度　工事立会時遺物出土状況

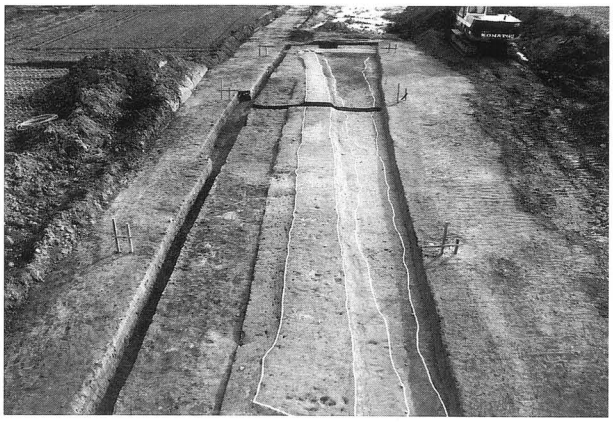
中森遺跡（檀紙町27号線東区間）
第１トレンチ SD01 集石部（西から）

中森遺跡（檀紙町27号線東区間）
第１トレンチ SD01 （北から）

図版2



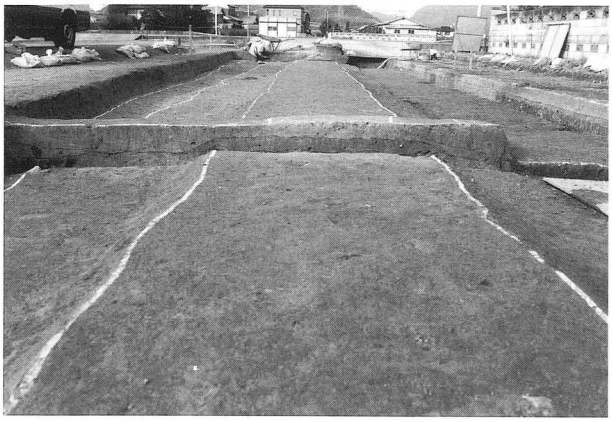
津内・東井坪遺跡　調査区全景(西から)



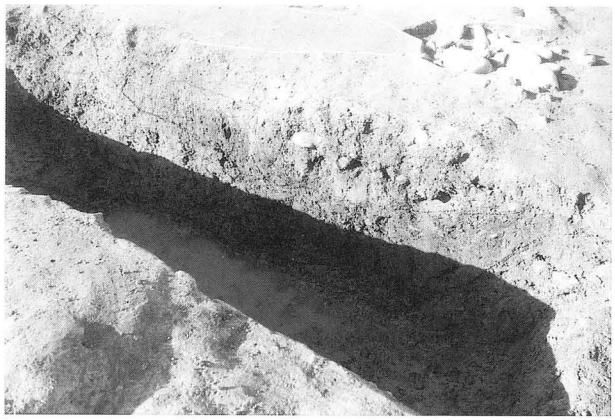
津内・東井坪遺跡　調査地東部

津内・東井坪遺跡　第4トレンチ東壁

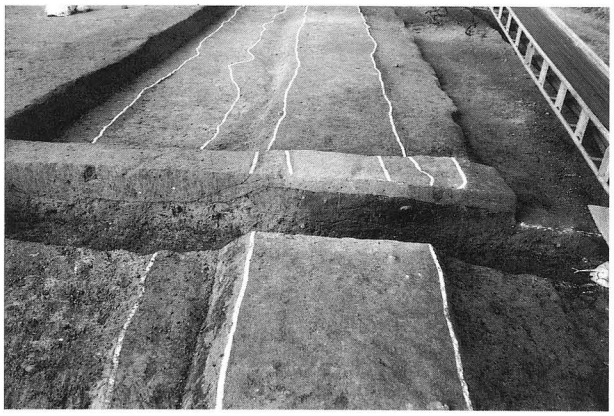
津内・東井坪遺跡　第1トレンチ西壁



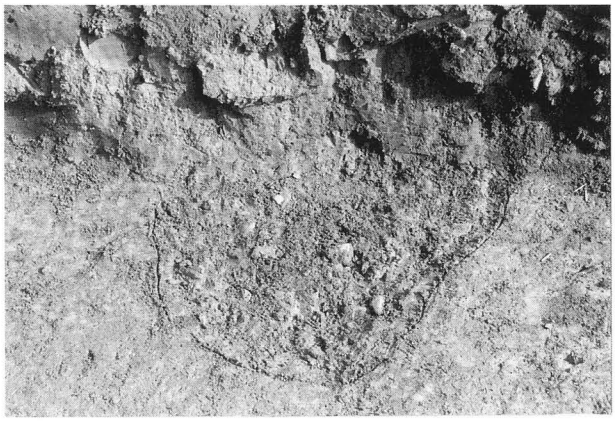
津内・東井坪遺跡　第2トレンチ西壁



津内・東井坪遺跡　第6トレンチ西壁



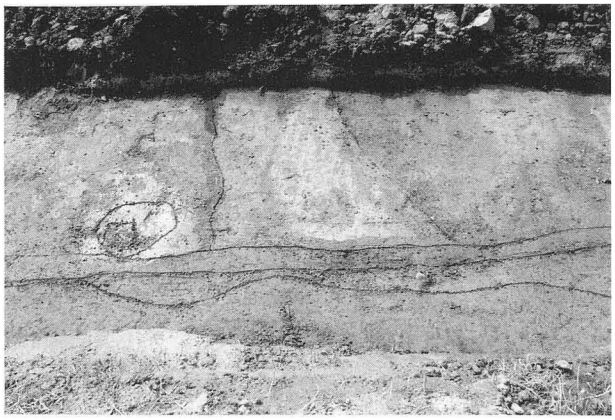
津内・東井坪遺跡　第3トレンチ西壁



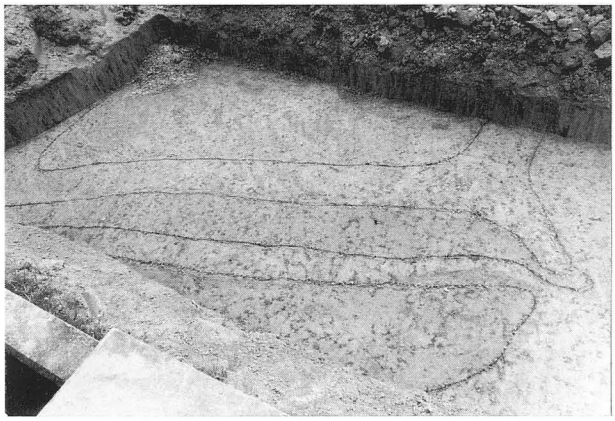
林下所遺跡（林町60号線）No.1区礫堆積検出状況

林下所遺跡（林町60号線）No.3区,SD04完掘状況

林下所遺跡（林町60号線）No.2-1区,SE01掘削状況

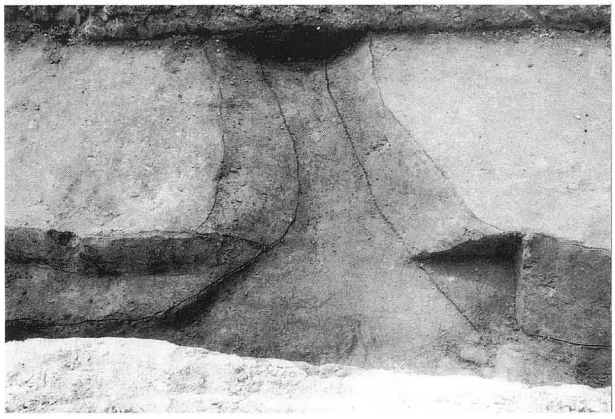


林下所遺跡（林町60号線）No.3区,SD05検出状況



林下所遺跡（林町60号線）No.2-2区,畦畔状遺構検出状況

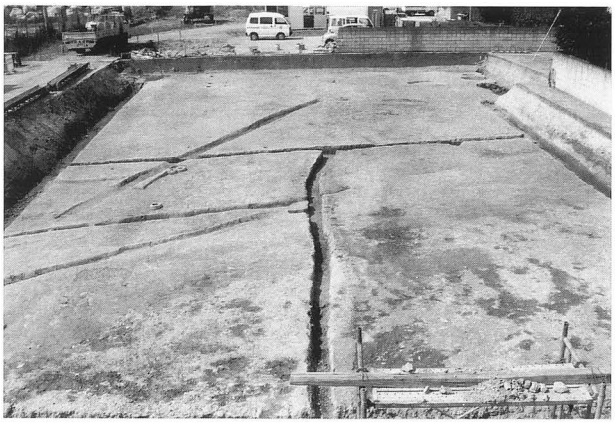
林下所遺跡（林町60号線）No.3区,SD03（坪境）検出状況



林下所遺跡（林町60号線）No.3区,SD04・SD07掘削状況

林下所遺跡（林町60号線）No.3区,SD-X検出状況

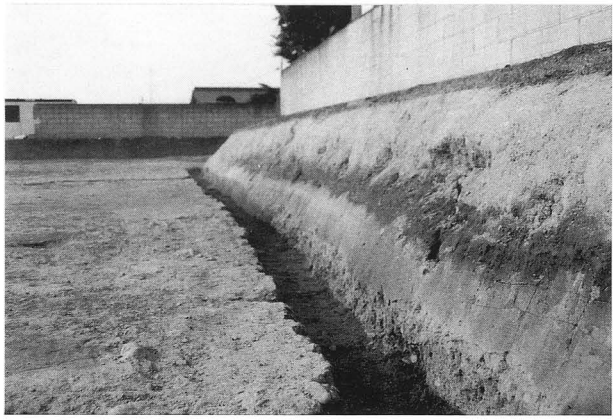
図版4



林下所遺跡（林下所墓地）調査地全景（南から）

林下所遺跡（林下所墓地）SD02遺物出土状況

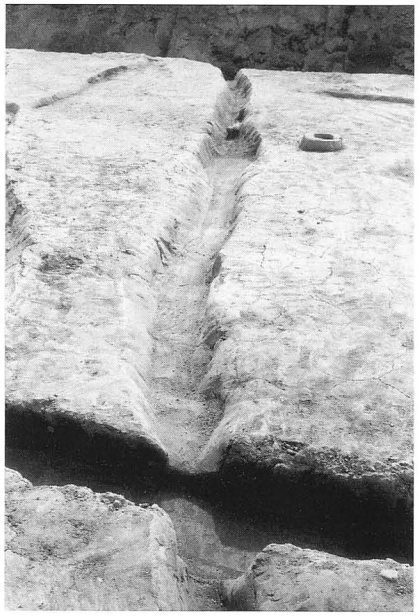
林下所遺跡（林下所墓地）SD02断面



林下所遺跡（林下所墓地）調査地東壁（南から）

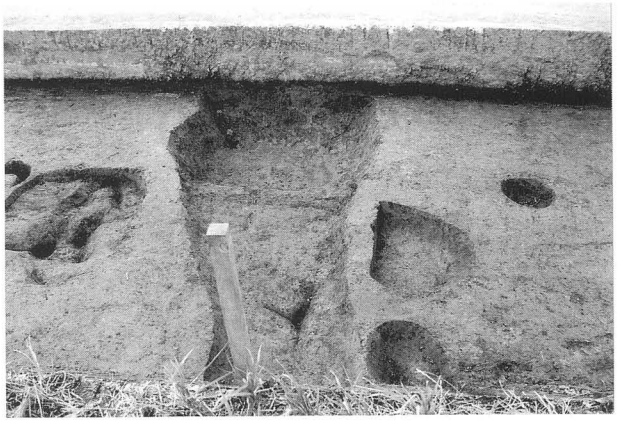
林下所遺跡
（林下所墓地）
SD01（南から）

林下所遺跡
（林下所墓地）
SD02（東から）

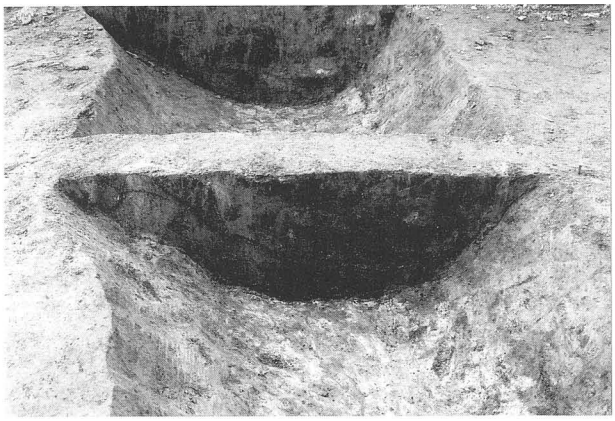


林下所遺跡
（林下所墓地）
SD03（東から）

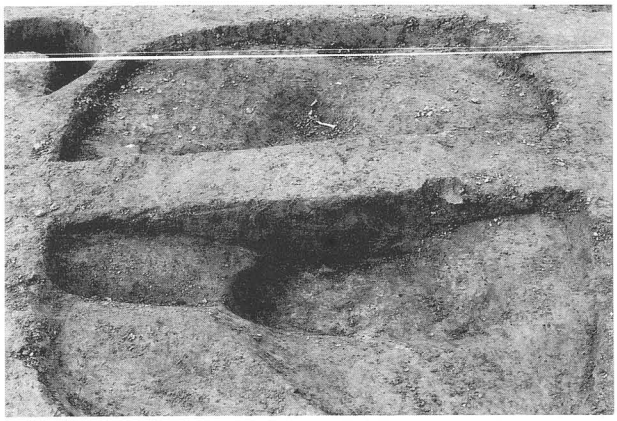
林下所遺跡（林町８号線）N区　SD01



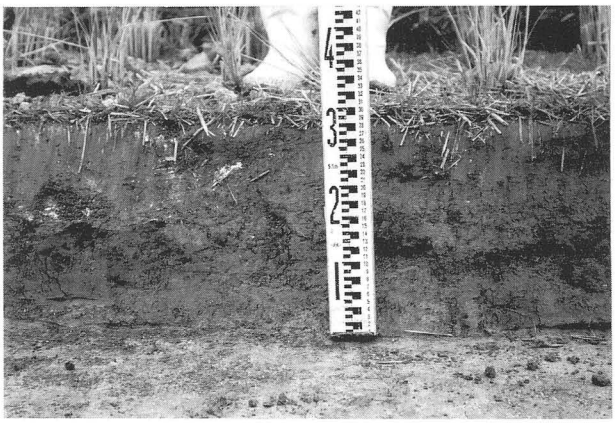
林下所遺跡（林町８号線）N区　SK01（左）



林下所遺跡（林町８号線）N区　SD01断面



林下所遺跡（林町８号線）N区　SK01断面



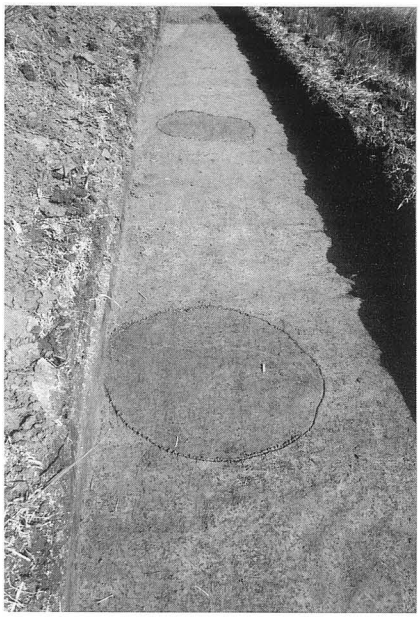
林下所遺跡（林町８号線）東壁

林下所遺跡（林町８号線）N区（北から）

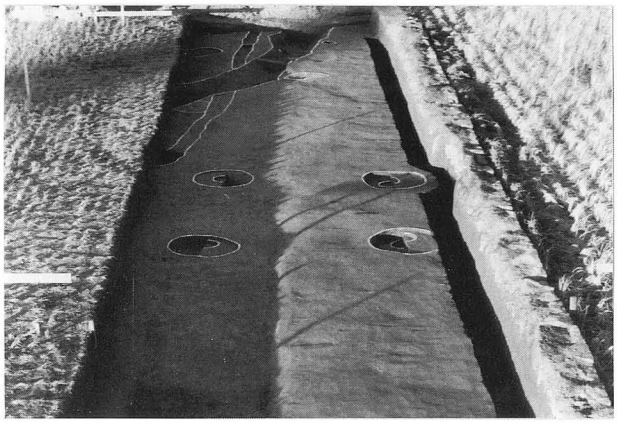
林下所遺跡（林町８号線）S区（北から）

林下所遺跡（林町８号線）N区（南から）

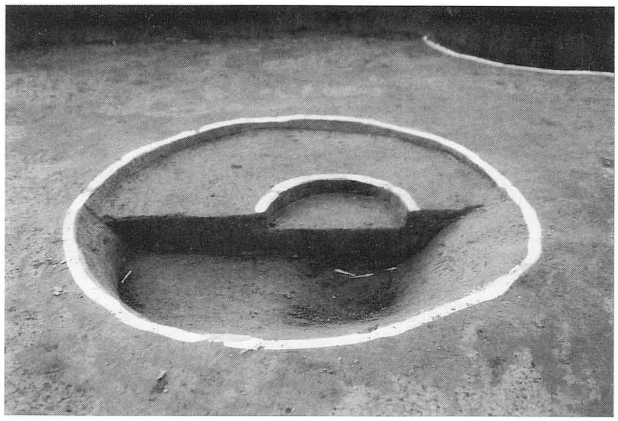
図版6



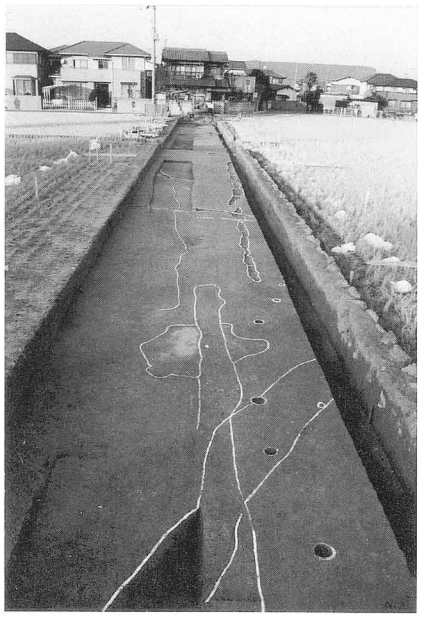
林下所遺跡
（林町65号線）
SB01検出状況



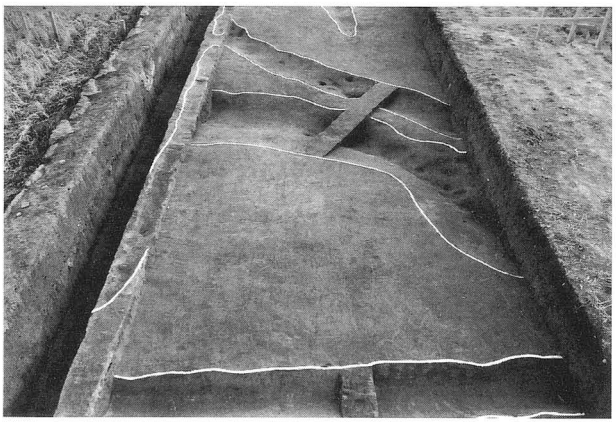
林下所遺跡（林町65号線）SB01



林下所遺跡（林町65号線）SB01 P-2断面



林下所遺跡
（林町65号線）
S区遺構検出
状況



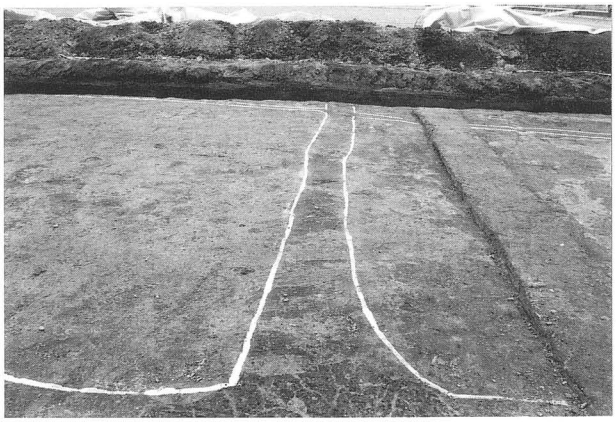
林下所遺跡（林町65号線）S区北部下層検出遺構

林下所遺跡
（林町65号線）
SD07検出状況

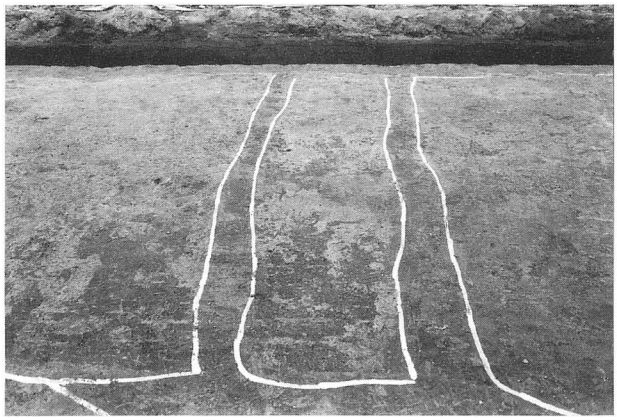
林下所遺跡（林町65号線）SD04・05断面

林下所・木太今村上所遺跡　Ⅰ区全景（南から）

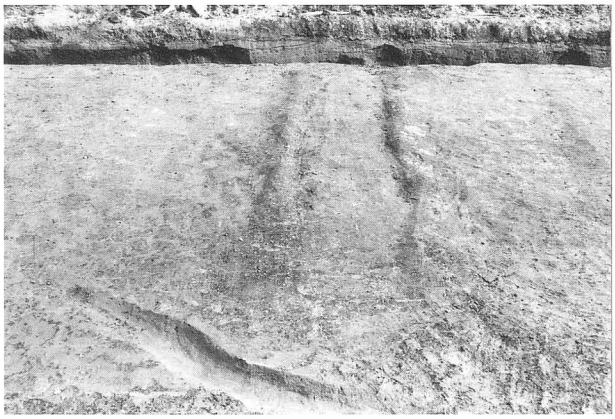
林下所・木太今村上所遺跡　Ⅰ区畦畔状遺構（南から）



林下所・木太今村上所遺跡　Ⅰ区小畦畔（西から）



林下所・木太今村上所遺跡　Ⅰ区小畦畔（西から）



林下所・木太今村上所遺跡　Ⅰ区SD02（西から）

林下所・木太今村上所遺跡　Ⅰ区大畦畔遺物検出状況

林下所・木太今村上所遺跡　Ⅰ区SD01（西から）

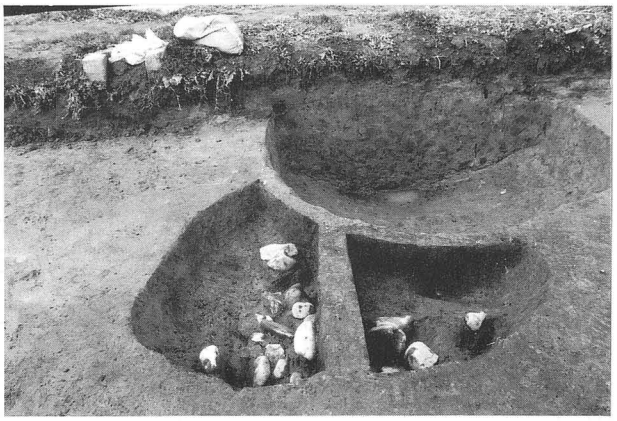
林下所・木太今村上所遺跡　Ⅰ区（北から）

図版8

林下所・木太今村上所遺跡　Ⅱ区全景（北から）

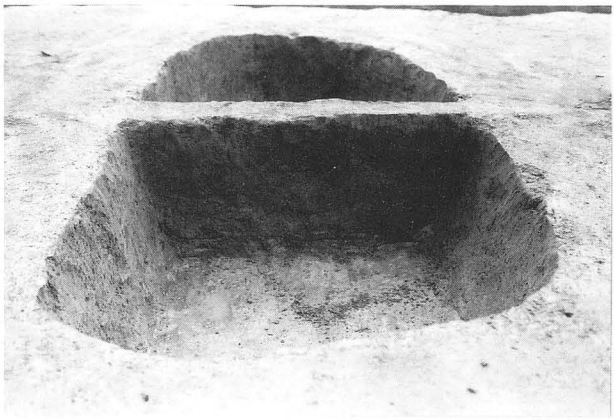
林下所・木太今村上所遺跡　Ⅱ区SB01（南から）

林下所・木太今村上所遺跡　Ⅱ区SB01 P-2断面



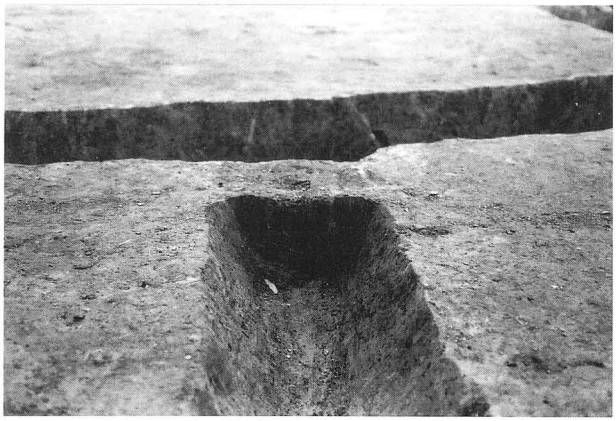
林下所・木太今村上所遺跡　Ⅱ区SK01（東から）

林下所・木太今村上所遺跡　Ⅱ区（南から）



林下所・木太今村上所遺跡　Ⅱ区SK02断面

林下所・木太今村上所遺跡　Ⅱ区SK03・SD04断面

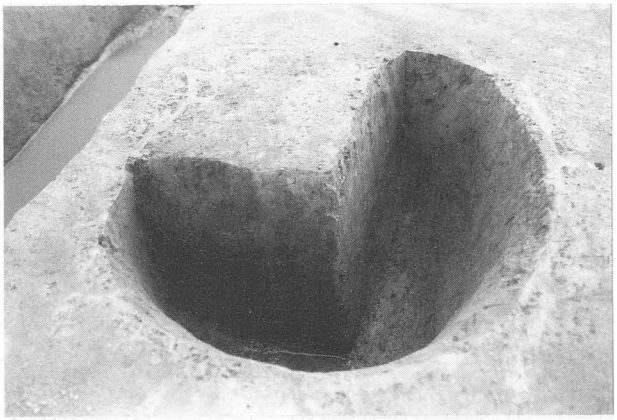


林下所・木太今村上所遺跡　SD05断面

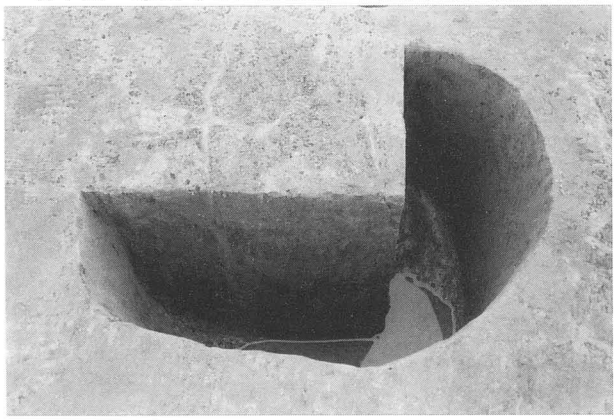
林下所・木太今村上所遺跡　Ⅲ区全景（南から）

林下所・木太今村上所遺跡　Ⅲ区SB01（北から）

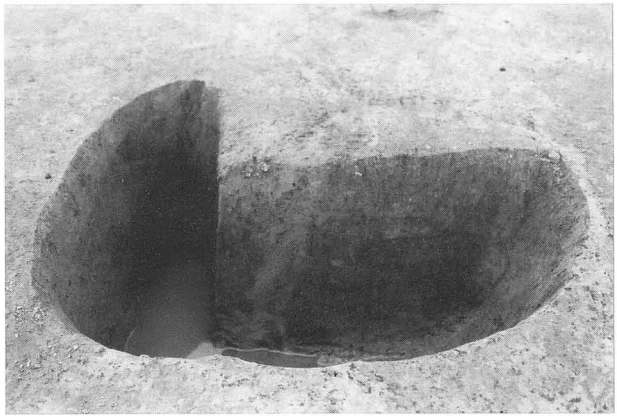
林下所・木太今村上所遺跡　Ⅲ区SB01（東から）



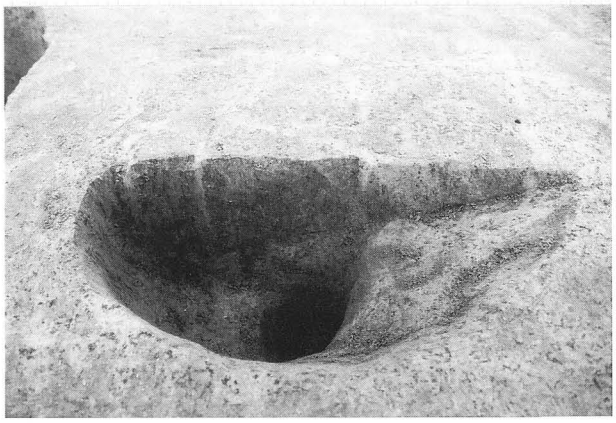
林下所・木太今村上所遺跡　Ⅲ区SB01　P-1



林下所・木太今村上所遺跡　Ⅲ区SB01　P-2



林下所・木太今村上所遺跡　Ⅲ区SB01　P-4



林下所・木太今村上所遺跡　Ⅲ区SB01　P-6

林下所・木太今村上所遺跡　Ⅲ区南部